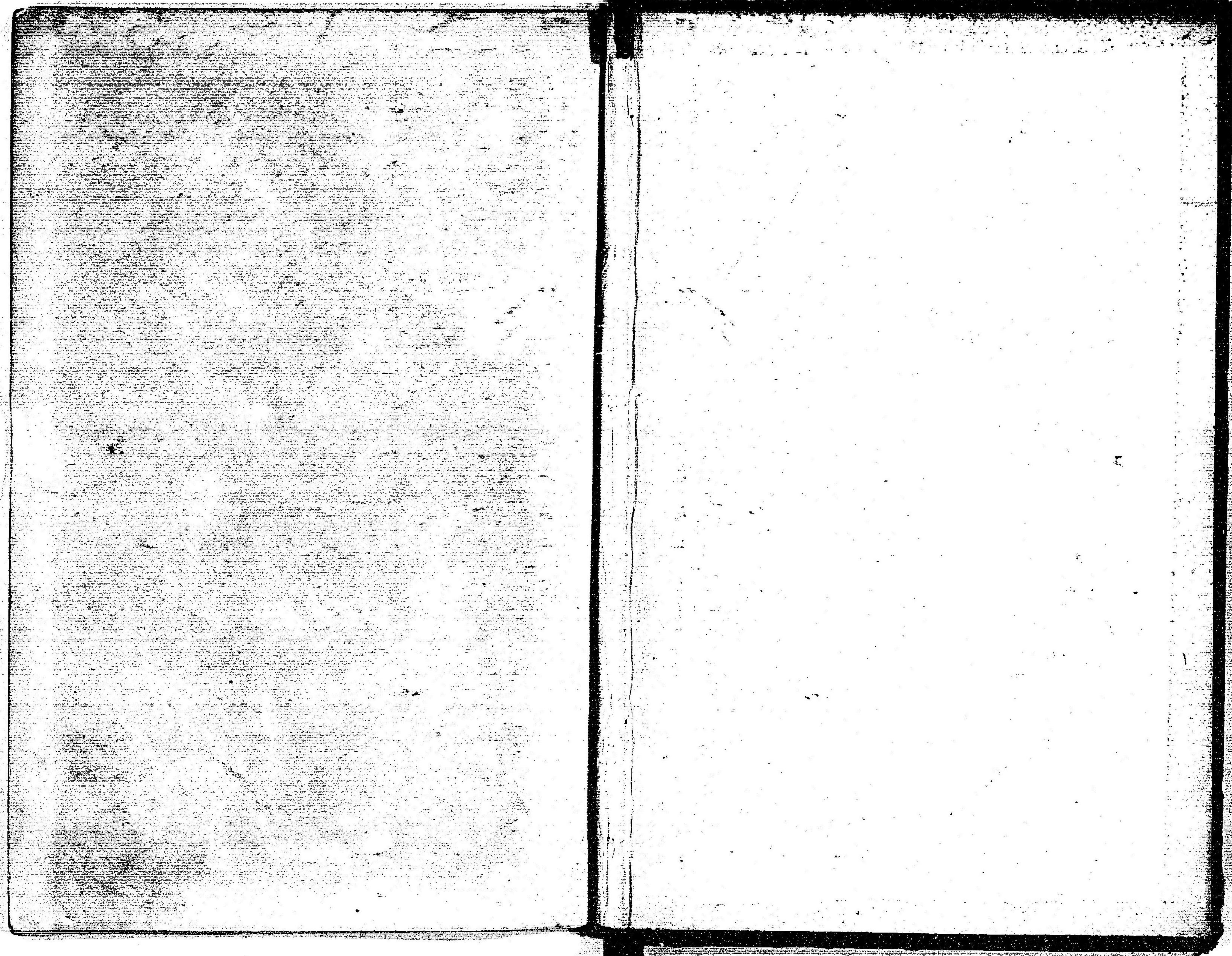


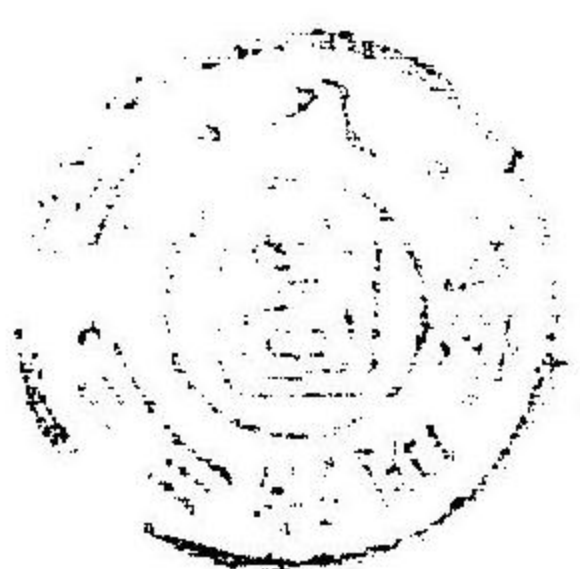
88
8





帝國海軍總覽

海軍軍子爵伊東海軍大將題辭
日本郵船株式會社社員 寺島成信 著



東京

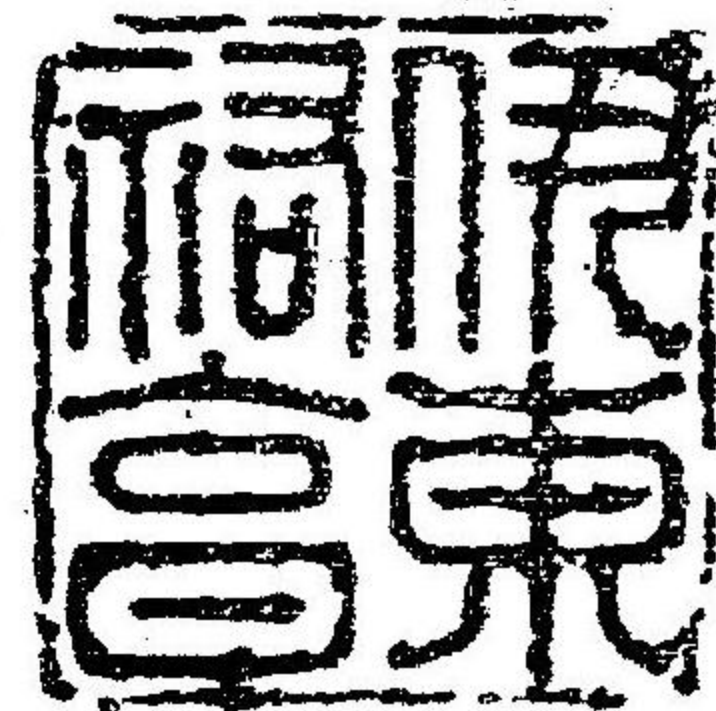
共益商社發刊

博而

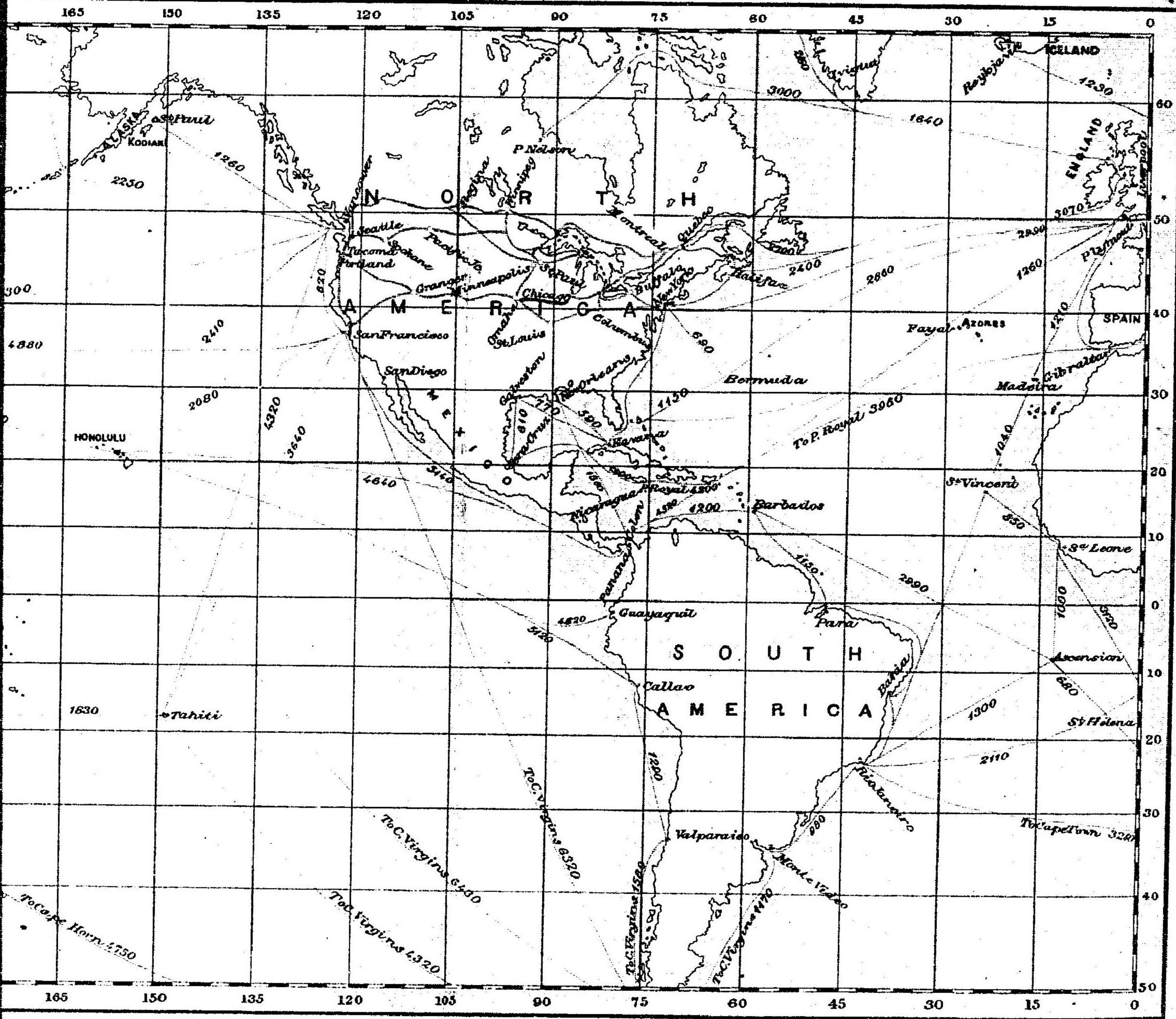


方要

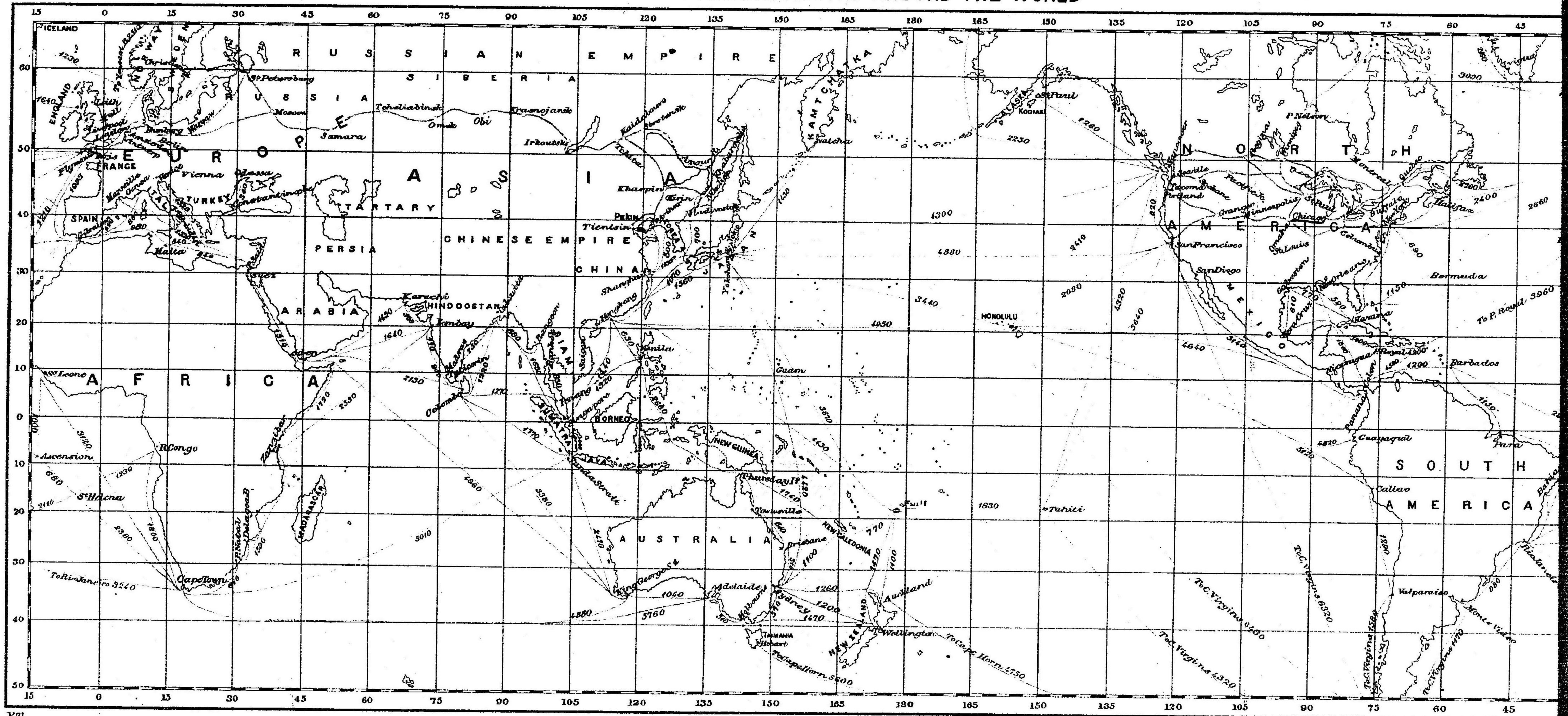
取治庚子心月
珀胆海



THE WORLD

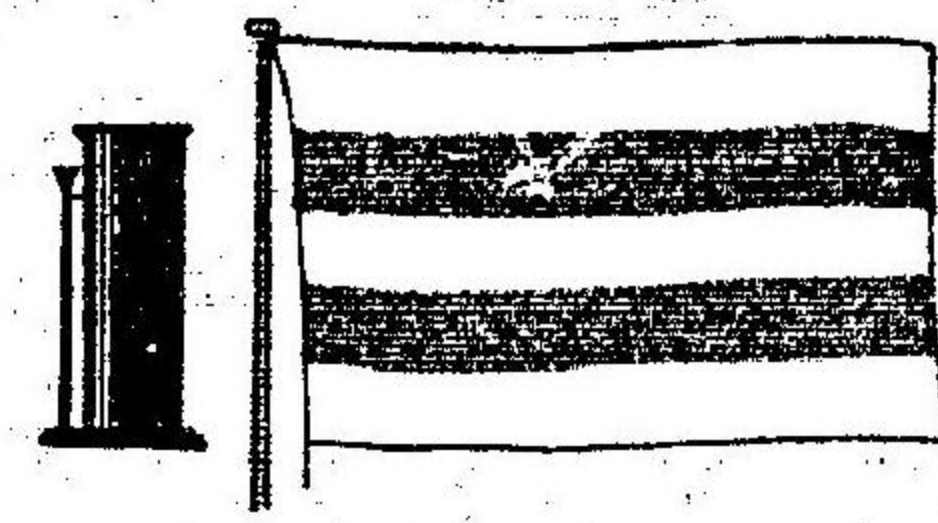


PRINCIPAL ROUTES AROUND THE WORLD

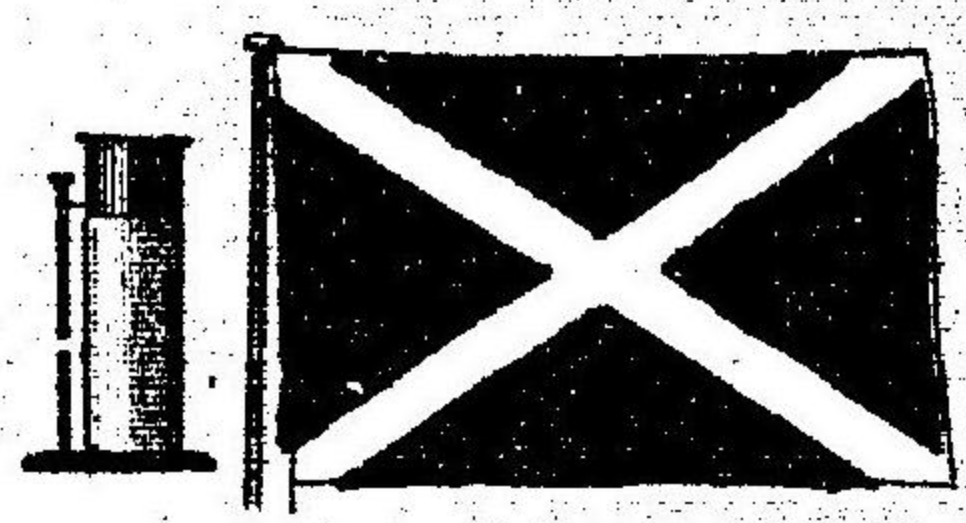


HOUSE FLAGS AND FUNNELS

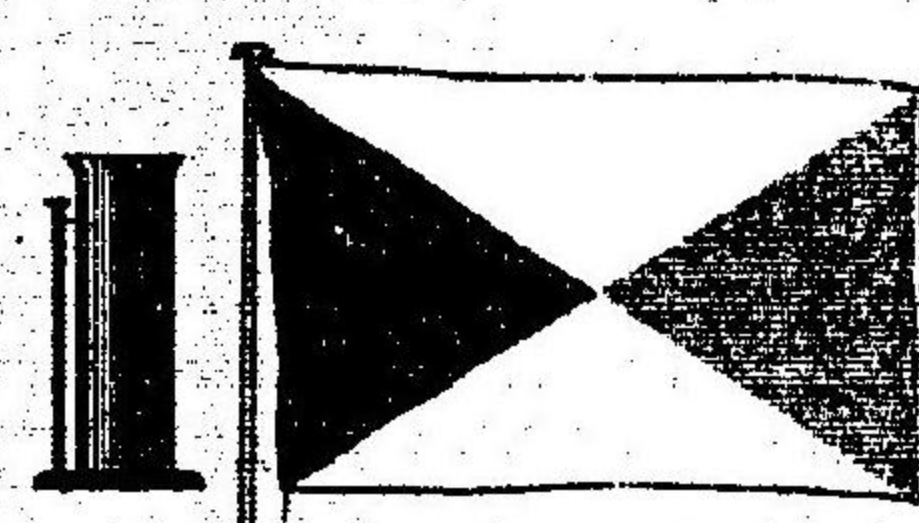
OF SOME OF THE PRINCIPAL STEAMSHIP COMPANIES



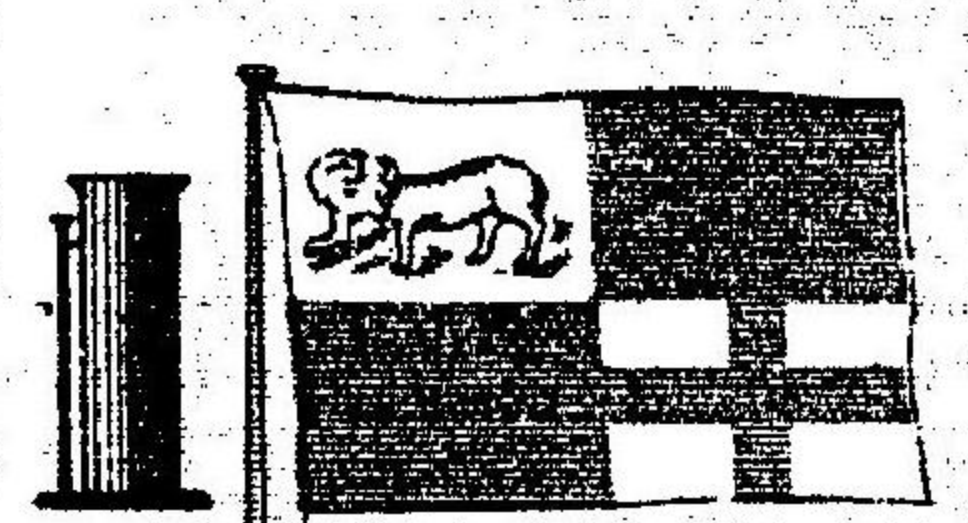
NIPPON YUSEN KAISHA



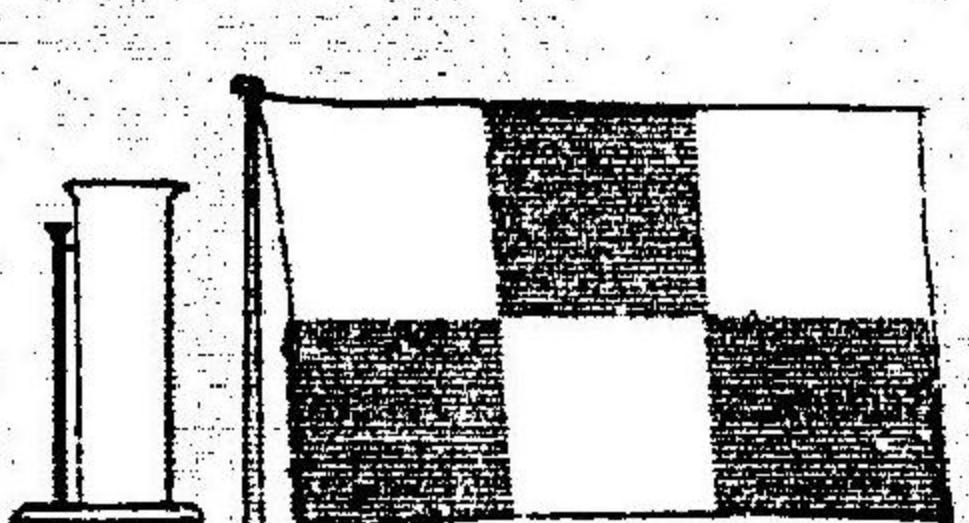
INDO CHINA S. N. CO.
怡和洋行



P. & O. S. N. CO.



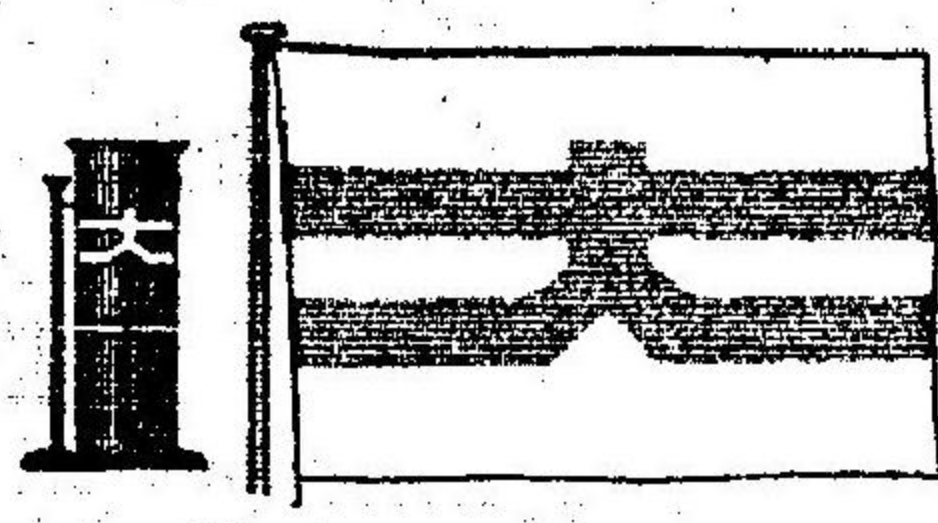
FLORIO-RUBATTINO, ITALIAN.



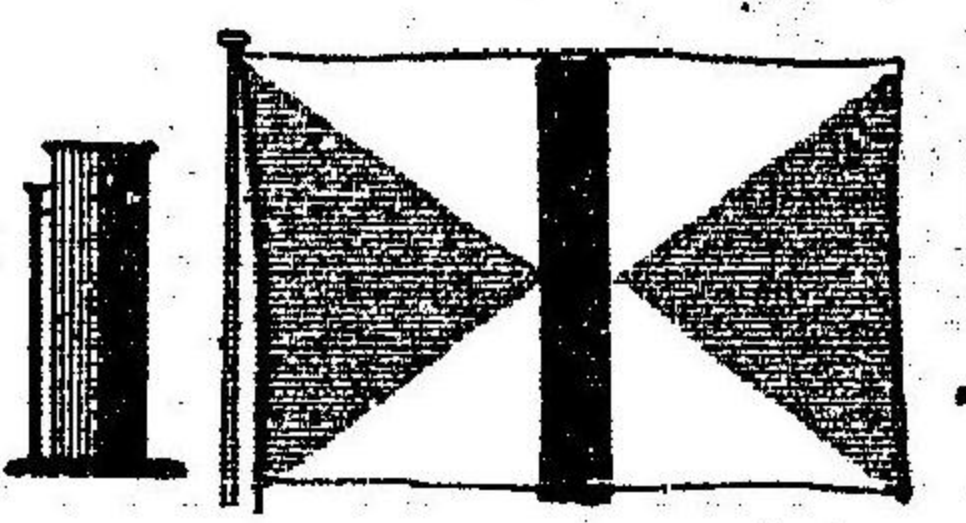
CANADIAN PAC. R. W. CO.



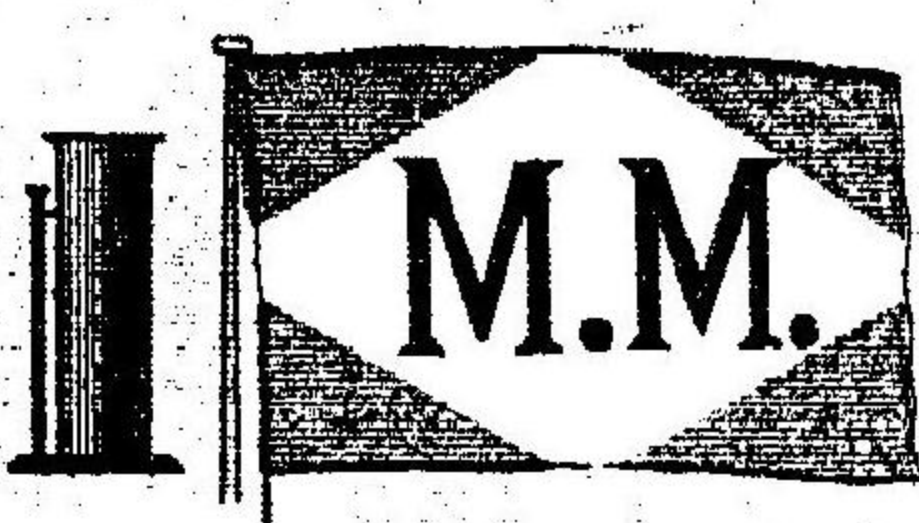
CUNARD LINE



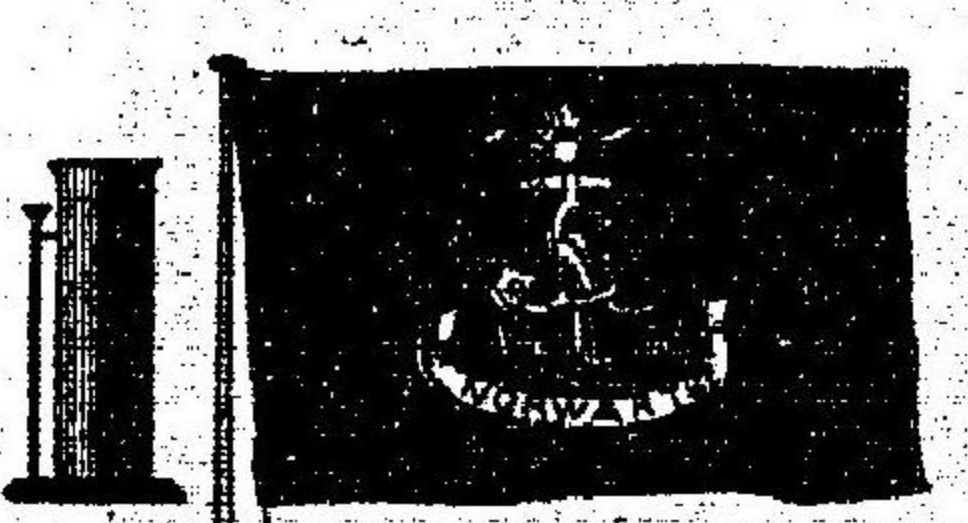
OSAKA SHOSEN KAISHA



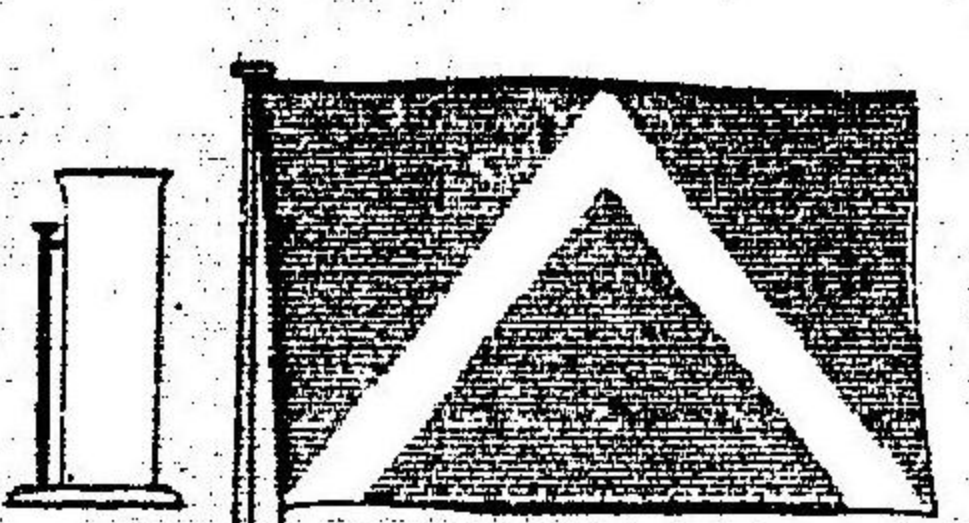
CHINA NAV. CO.
太古洋行



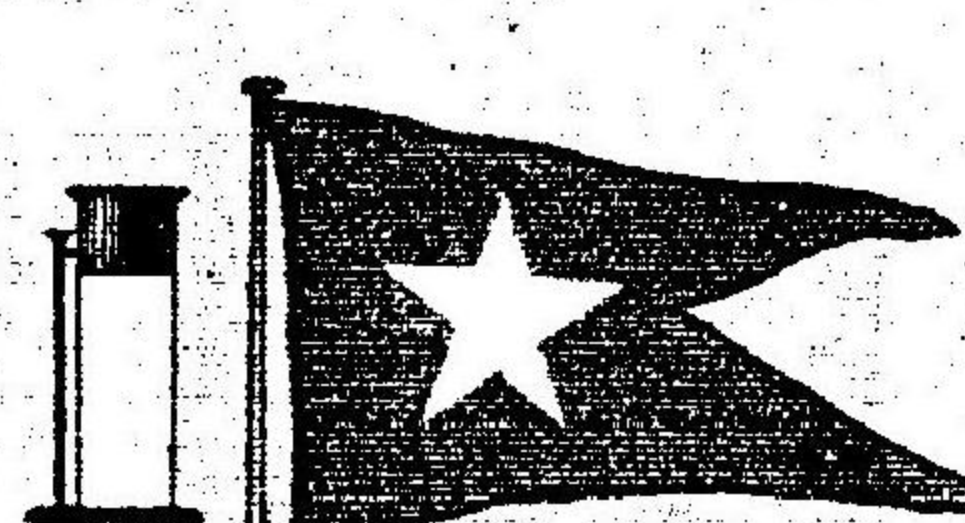
MESSAGERIES MARITIMES



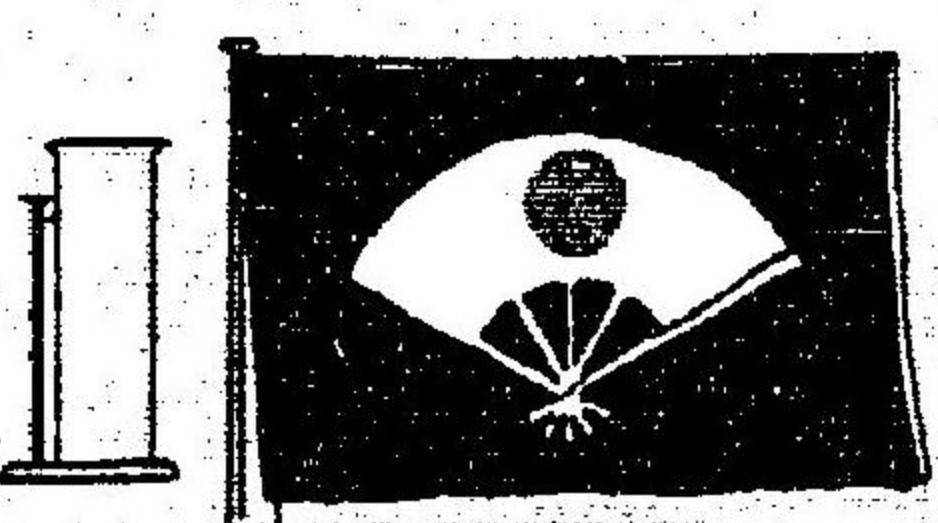
AUSTRIAN LLOYD'S S. W. CO.



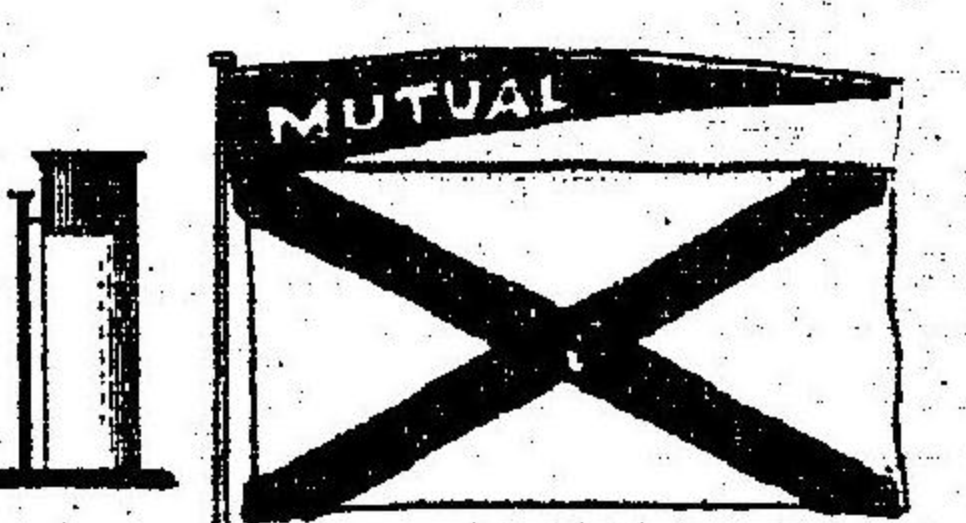
NORTH PAC. S. S. CO.



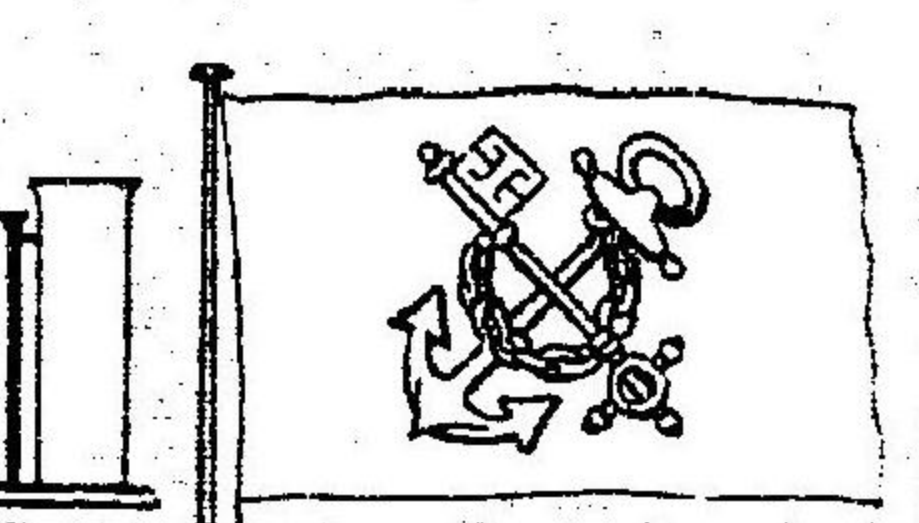
WHITE STAR LINE



TOYŌ KISEN KAISHA



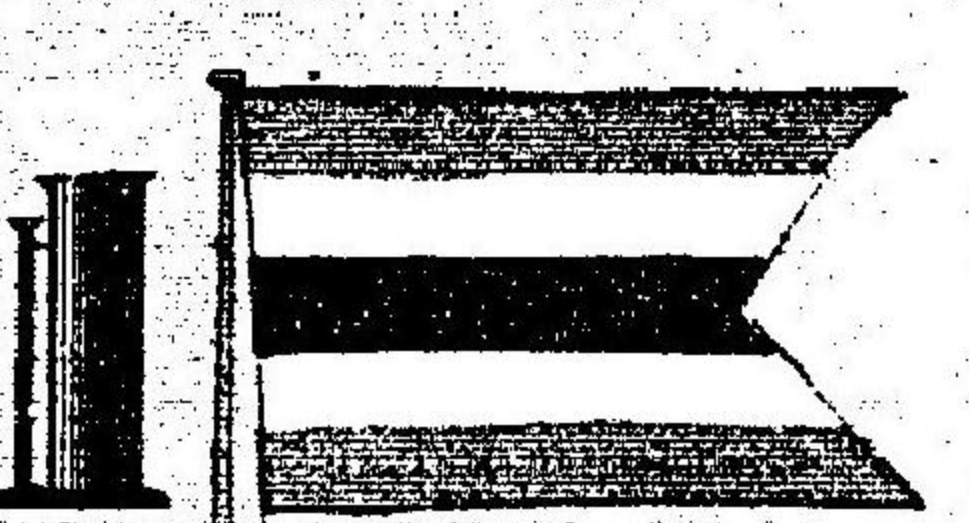
CHINA MUTUAL S. N. CO.



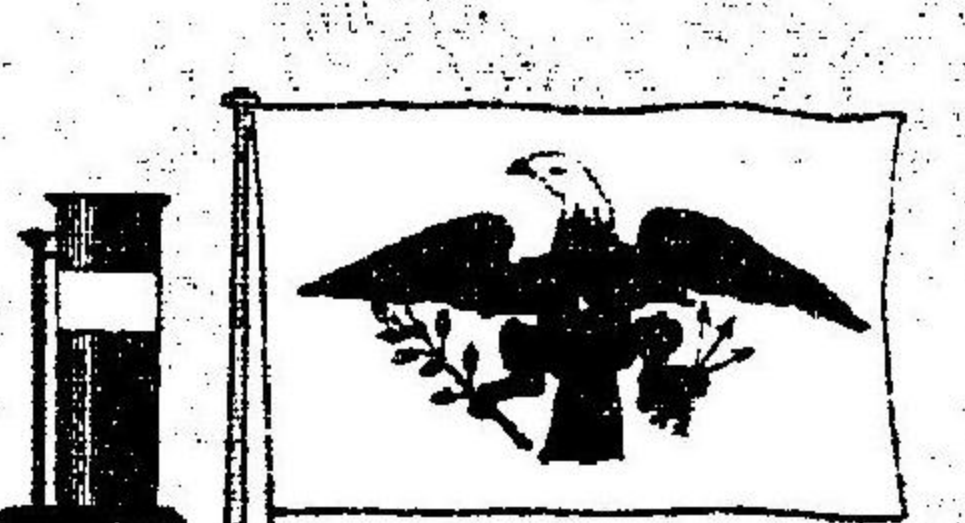
NORTH GERMAN LLOYD



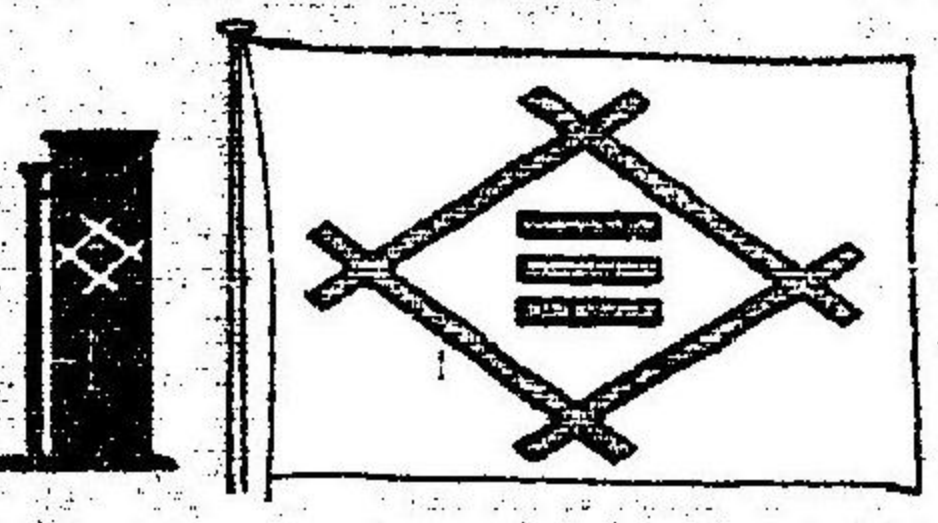
OCEAN S. S. CO.



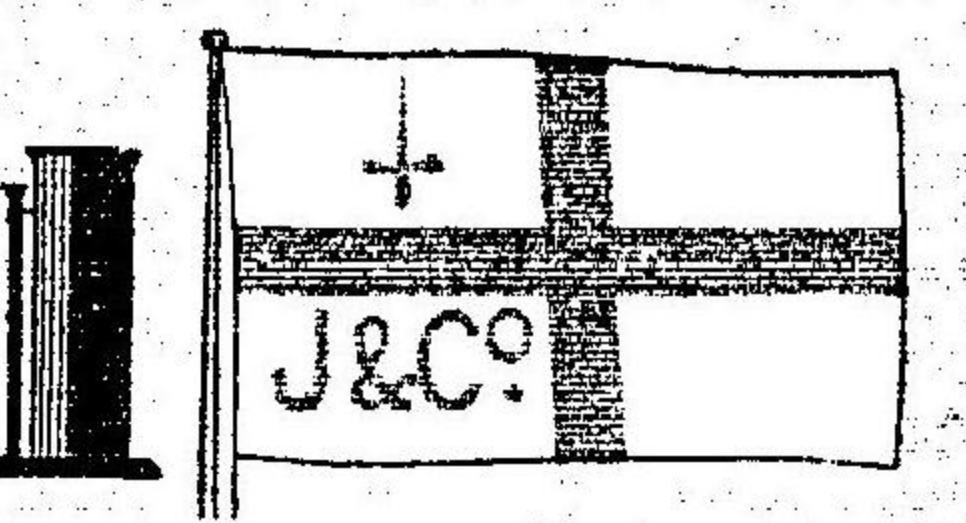
PAC. MAIL S. S. CO.



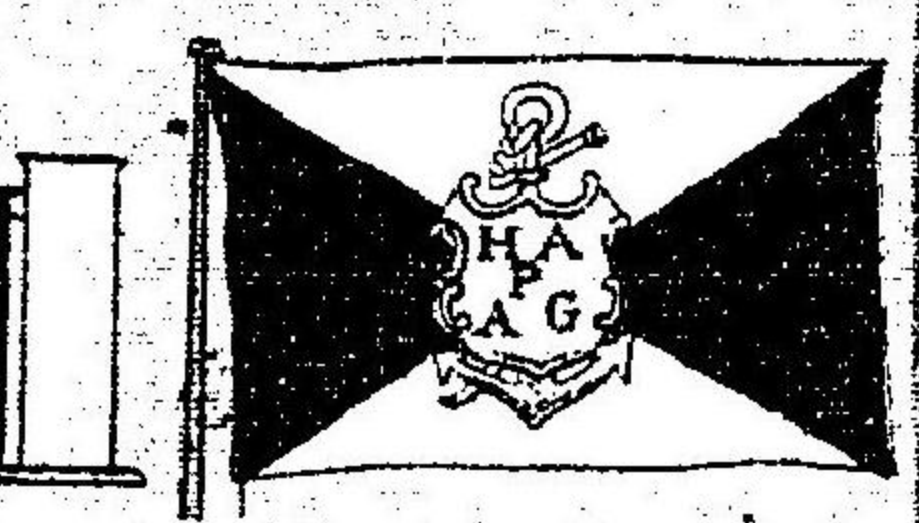
AMERICAN LINE



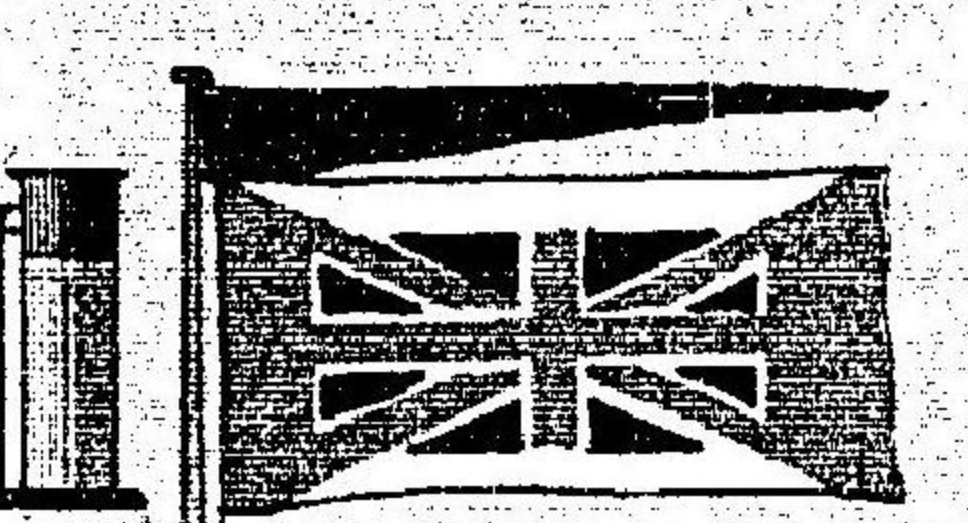
MITSUMI BUSSAN KAISHA



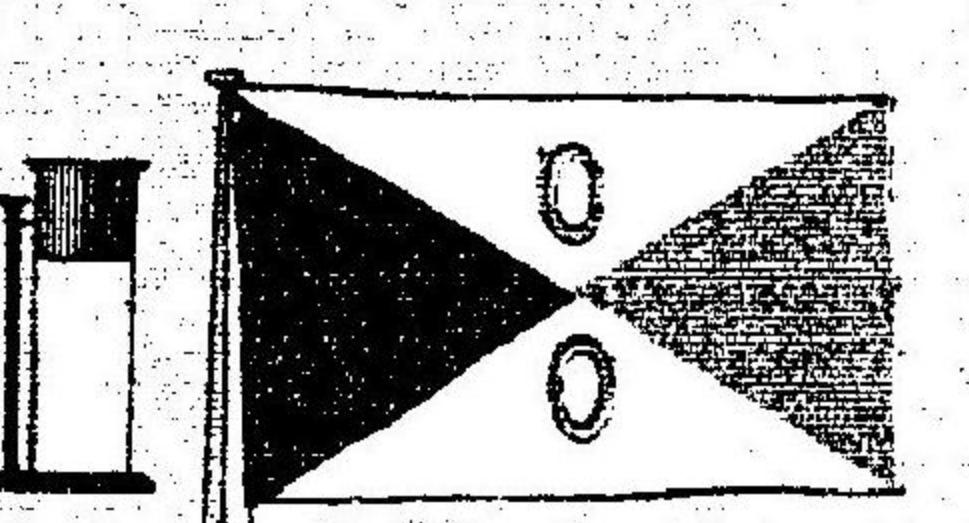
SHIRE LINE



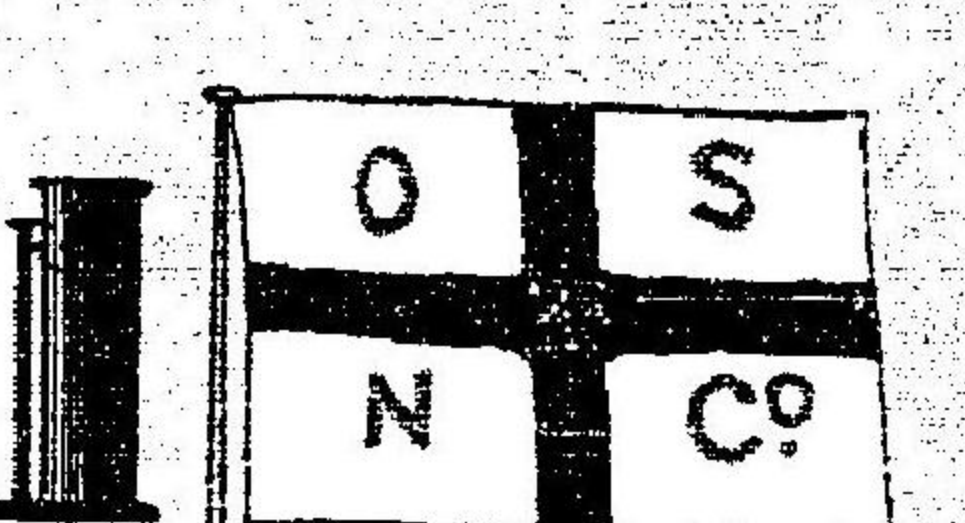
HAMBURG-AMERICAN LINE



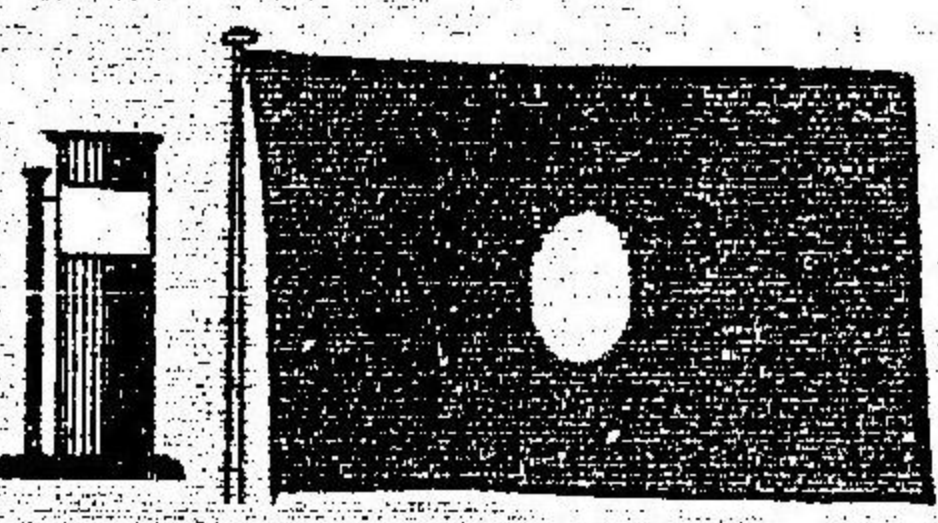
GLEN LINE



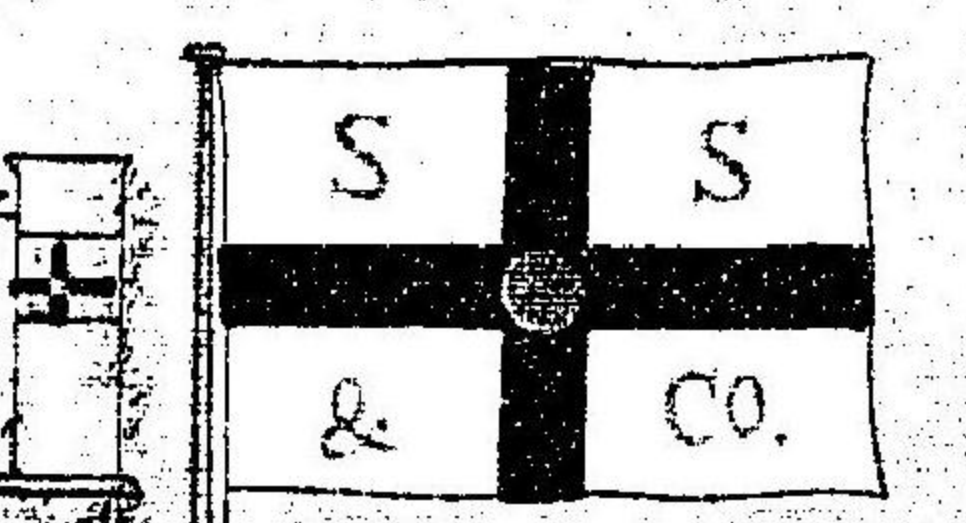
O. & O. S. S. CO.



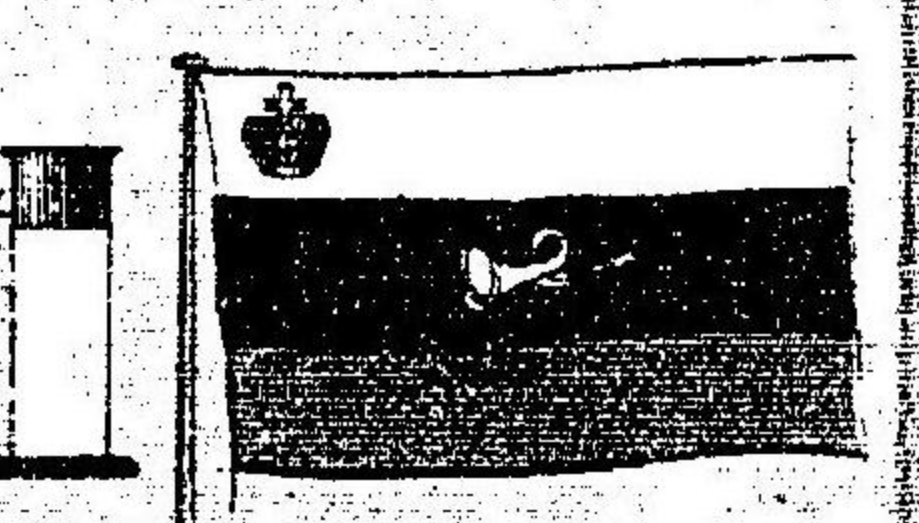
ORIENT S. N. CO.



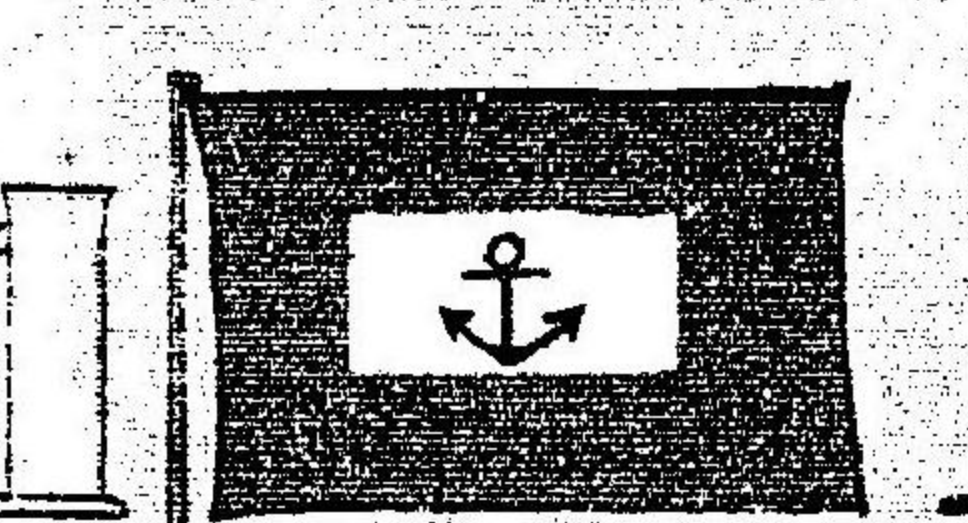
CHINA MERCHANTS S. N. CO.
招商局



SHELL LINE



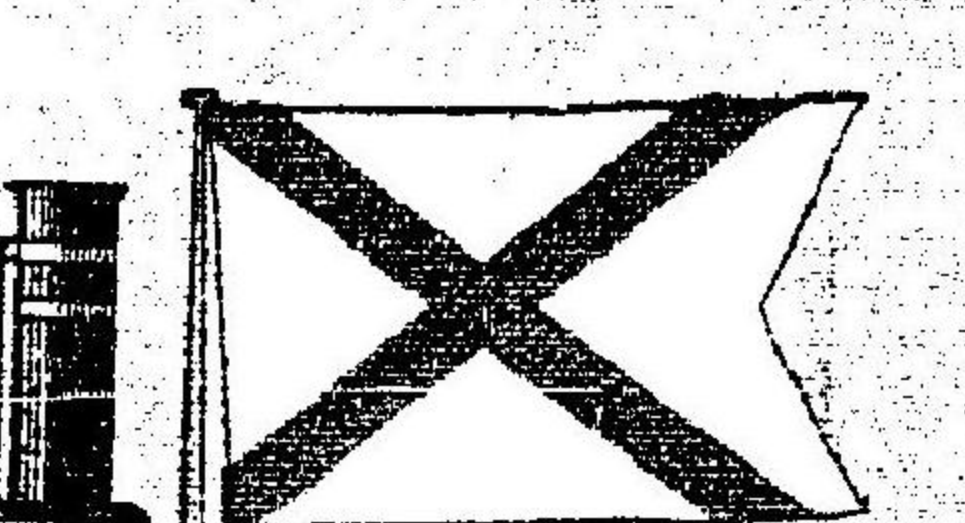
RUS. VOLUNTEER FLEET



BEN LINE



CALIF. & ORIFL. S. S. CO.



BRITISH INDIA S. N. CO.

緒言

著者後學の身をも省みず、本書を編纂したる目的蓋し三あり、一は以て本邦海事に關する著作の闕乏を補ひ、二は以て海員執務上の指針に充て、三は以て海商營業上の參考に供へむと欲すること是なり。

今や我國學問技藝の進むに伴ひ、奇籍珍篇の梓に上るもの汗牛充棟も啻ならずと雖も、獨り海事に關する著作に至ては寥々殆ど晨星の如し、四面環海の帝國、一に通商航海を以て富國の源と爲すべき國柄にて有りながら、廣く海事上の實踐智識を鼓吹すべき一書尤も刊行せられざるは、豈に聖代の闕點と謂はざるへけむや、由來海國の形勢、通商の業、或は航海の術に關し、新聞に將た雜誌に意見を

披瀝したる者尠なしとせざるも、何れも刺激誘掖を旨とせる一時の論策に過ぎず、近頃又二三學士の著譯書世に出て、斯途に資するの多きは疑を容れずと雖も、其の所説或は一局部に偏し立論亦研究的に流るゝものあり、實用的參考書としては稍隔靴搔痒の憾なきを得ず、若し夫れ海事全般に渉る浩漭の事項を一篇の機軸に網羅し、以て當業者座右の便覽に供ふるものゝ如きは、著者の寡聞なる未た之れ有るを知らざるなり、客年初夏船舶法、船員法、海商篇等の新法令愈實施せられ、世の海員、海商たる者、その一舉手一投足も國法の規定に制束せらるゝの秋に會するや、著者は躬其境に在りて殊に以上の感を深くし、遂に自ら揣らす本書の起稿を企つるに至りぬ、是れ著者か本書を編纂したる所以の一なり、

我國今日の船舶は之を日清戰役前に比較すれば、單に其の數量を倍蓰したるのみならず著くその資格を高め、大船巨舶の新造せられたるもの無慮貳拾隻に上れり、加ふるに歐米濠の三大航路は既に開設せられ、久しく社會の問題たりと特別助成法も幸に兩院を通過し、又當期の議會には東洋近海航路の補助案難なく成立せり、帝國海運業か過る數年間に長足の發達を爲したるは、眞に宇内列國の耳目を聳動するに足るものあり、然れども右三大航路に於て運航を掌る海員を顧れば、其實悉く外國人に非ずや、六千噸大の新造汽船に乗組み船長、機關長、若くは一等運轉士の如き要職を占むる者は、本邦海員中一人も之れ無きにあらずや、人は我か海運業の一躍的膨脹を誇るも、操船航海の實權にして外國海員の手に歸する間は、未

た以て嬉々するに足らざるなり、惟ふに本邦海員に就て憂ふべきは、専門的智識技藝の足らざるよりも、寧ろ伎倆の未だ洽く信用を博するに足らざるに在り、部下の統率の如き旅客の待遇の如き船務の處理の如き、畢竟統御の手腕、事務の才能と謂ふべきものに至ては、遺憾ながら本邦海員は仍は未だ外國海員に向て一籌を輸するものこと評せざるを得ず、今や海事に關する法令は雨後の春草の如く簇々發布せられたり、この際船主船員間の關係、公私執務の手續、内外海事の慣例、海運と國家との關係等を詳悉せしむることを得ば、啻に帝國海員として本務を暗知し法定の職責を盡くすに綽々餘裕あらはむるのみならず、その眼界を高め常識を潤くと、所謂統御の手腕、事務の才能を涵養せしむるに於て亦裨益なしとせむや、是れ著者か

本書を編纂したる所以の二なり、

世の航運、回漕問屋、海上保険、海員媒介等の業に従事する者は、主人たるご使用人たるごを問はず、單にその本領内に属する日常の業務のみに通曉するを以て満足せず、船舶の操縦、貨物の積卸等を掌る海員の業務職責の如きも、必ずや其の一斑を會得せざるへからず、況して海商たる者の權限義務も、亦法令を以て一々規矩せらるゝ今日に於てをや、蓋し海員海商は輔車唇齒の關係あり、海陸相待て運輸交通の重任を完うし、營業の利潤改善を庶幾すへし、苟も事務の敏活を希ひ成果の圓熟を望まむご欲せば、須く海事の全豹を窺ひ絶えず新智識を得て營業上の參考に供ふるの覺悟なくして可ならむや、是れ著者か本書を編纂したる所以の三なり、

本書は實に斯る目的を以て編纂したるものなり、然るに海員は本
と貴重の人命と鉅萬の財産とを擔保しつゝ、狂瀾怒濤の間に入出し、
又海商は日夕の業務に營々し取引應待に忙殺せらるゝものにして、
孰れも悠々書を繙くの暇あるなし、故に著者は本書を起稿するに方
り簡約明晰を旨とし可成字句を平易にし、術語の如きは勉て之を用
ゆるを避け、一讀以て其の意義を理會せしむることを期し、且つ編
章を分ち項款を多くし、題目の下直に己か求むる事項を發見せしむ
るに便にせり、其の間口廣くして奥行淺き」の批評は、著者の甘し
て受けむと欲する所なり、唯、憾むらくは淺學菲才、加ふるに公務
の餘閑乏しきの身を以てす、固より抱負の一半をも充たすに足らさ
ることを、讀者之を諒し錯誤遺漏の點を指摘せらるゝあらは幸甚、

本書の編纂に就ては、日本郵船會社先輩及僚友諸君の助力を藉り
たること尠なからず、殊に須田、茂木、松山三監督、吉武、堀兩文書
役の高教を蒙りたるもの多し、是れ發刊に際し、特筆以て深く鳴謝
する所なり、

明治三十三年三月上澣麴町僑居に於て

寺 島 成 信 識

帝國海事總覽目次

緒言

(一頁……………七頁)

第一篇 海運

(二頁……………六五頁)

第一章 海運と帝國

(一頁……………三〇頁)

- 第一 日本ノ國是ト海運一
- 第二 日本ノ形勝ニ
- 第三 海運ノ任務三
- 第四 世界航海業ノ變遷五
- 第五 太平洋ノ將來六
- 第六 海外航路ト直輸貿易——(一)海外航路助成ノ要旨八(二)日本ノ商權及航海權九(三)定期航海ト不定期航海一二
- 第七 海外航路ト殖民政策——(一)殖民政策ノ必要一四(二)殖民ノ利益一五(三)日本殖民ノ現狀一六(四)海外航路開設ノ影響一八
- 第八 日本ノ商港——(一)商港トハ何ソヤ一九(二)國港ノ撰定二二(三)海陸運輸ノ聯絡二四(四)自由貿易區ノ設置二八

第二章 商船ト海軍

(三一頁……………六五頁)

目次

一

○第一 海上權ノ要素 三一 ○第二 海軍ノ任務——(一)平時ノ任務 三三
 (二)戰時ノ任務 三五 ○第三 海岸封鎖ノ影響 三八 ○第四 海軍擴張ノ程度
 四一 ○第五 商船ト海軍ノ骨肉的關係 四五 ○第六 兵商併進ノ手段——
 (一)要旨 四七 (二)海軍ノ平時任務ヲ發揮スル事 四八 (三)海軍豫備船及豫備
 員ノ制度ヲ起ス事 五二 (甲)海軍豫備船 五一 (乙)海軍豫備員 五七 (四)商事ト
 海軍ノ關係ヲ親密ナラシムル事 六一

第二篇 船舶

第三章 船舶ト法律

○第一 法律的觀察ノ要旨 六六 (六六頁……一〇二頁)
 第一節 國法上ヨリ觀察シタル船舶 (六七頁……七五頁)
 ○第一 日本船舶ノ資格 六七 ○第二 日本船舶ノ特權 六八 ○第三 船舶ノ
 検査 七〇 ○第四 船舶ノ行動 七〇 ○第五 船舶ハ特種ノ動産ナリ 七一 ○第
 六 船舶ノ獎勵 七二 ○第七 船舶ノ乗組員 七四 ○第八 船舶ニ關スル其他

ノ法令 七五

第二節 國際法上ヨリ觀察シタル船舶

(七六頁……一〇〇頁)

○第一 大洋中ニ在ル船舶ト本國トノ關係 七六 ○第二 外國領海内ニ在ル船
 舶ト該外國トノ關係 七七 ○第三 外國領海内ニ於ケル船舶ノ遭難 八一 ○第
 四 脱船者及逃走人 八二 ○第五 船舶其他私有財産ノ捕獲 八五 ○第六 臨
 檢及搜索權 九一 ○第七 戰時禁制品等——(甲)日本法 九四 (一)戰時禁制品
 九五 (二)戰時禁制品 九五 (三)戰時禁制品 九五 (乙)英國法 九六 (一)絶對的戰
 時禁制品 九五 (二)條件附戰時禁制品 九七 ○第八 私艦及代用巡洋艦 一〇〇

第四章 船政ノ系統及分掌

(一〇三頁……一二二頁)

○第一 船政ノ系統 一〇三 ○第二 船政ノ分掌——(一)管船局 一〇四 一、監
 理課 一〇四 二、船舶課 一〇四 三、海員課 一〇五 (二)海事局 一〇五 (イ)海事局及其
 ノ管轄區域 一〇五 (ロ)海務署及其ノ管轄區域 一〇六 (ハ)管海官廳事務取扱市町
 村長 一〇八 (ニ)船舶検査執行地 一一一 (三)港務局 一一二 (四)海事審判所 一一二

(五)航路標識管理所 一二二 (六)商船學校 一二二

第五章

船舶ノ登記、登録、國籍證書受有等

(一三三頁……一三三頁)

○第一 船舶ノ國籍取得手續ノ大要 一二三 ○第二 船舶ノ積量測度 一二四

○第三 船舶所有權ノ登記 一二九 ○第四 船舶ノ登録 一三三 ○第五 船舶

國籍證書 一三五 ○第六 船舶ノ標示及其名稱ノ變更 一二七 ○第七 船舶ノ

登記、登録ニ關スル登録税及手数料 一二九

第六章 船舶ノ検査及修繕

(一三三頁……一五五頁)

○第一 検査及修繕ノ要旨 一三三

第一節 検査

(一三三頁……一五二頁)

○第一 法定検査——(一)検査ノ種類 一三四 一、特別検査 一三五 二、定期檢

査 一三五 三、臨時検査 一三五 四、航海獎勵検査 一三六 五、外國船舶ニ關スル檢

査 一三七 (二)検査手續 一三八 (三)検査執行地 一三九 (四)検査證書 一四二 (五)航

海獎勵認許證書 一四六 (六)検査旅費及手数料 一四七 ○第二 英國「ロイド」

検査——一、検査ノ種類 一四八 (イ)船體検査 一四九 一、年次検査 一四九 二、特

別検査 一四九 (ロ)機關検査 一五〇 一、年次検査 一五〇 二、特別検査 一五〇 三、汽

罐特別検査 一五〇 (二)検査執行地 一五〇 (三)検査證書 一五一 (イ)船體検査證

書 一五一 (ロ)機關検査證書 一五二 ○第三 検査ニ關スル船長ノ注意 一五二

第二節 修繕

(一五二頁……一五五頁)

○第一 脩繕 模樣替等 一五二 ○第二 船底ノ塗替 一五三 ○第三 汽罐ノ

掃除 一五四 ○第四 壓艙水槽ノ掃除及防蝕手當 一五四 ○第五 修繕等ニ開スル

船長ノ注意 一五四

第七章 船舶ノ種類、積量及設備

(一五六頁……一八八頁)

○第一 船舶ノ種類——(一)造船材料ニ關スル種類 一五六 (イ)鐵船 一五六 (ロ)

鋼船 一五七 (ハ)木鐵交造船 一五八 (ニ)木船 一五八 (三)推進力ニ關スル種類 一五八

(イ)汽船 一五九 (ロ)帆船 一五九 (三)型式ニ關スル種類 一五九 (甲)全通甲板ノ層數

ニ由ル區別 一六〇 (イ)一層甲板船 一六〇 (ロ)二層甲板船 一六〇 (ハ)三層甲板船

一六〇(三)四層甲板船一六〇(乙)甲板ノ強弱ニ由ル區別一六〇(イ)重甲板船一六〇
 (ロ)輕甲板船一六一(ハ)覆甲板船一六一(ニ)庇護甲板船一六一(ホ)遮陽甲板
 船一六二(ヘ)特設肋骨船一六二(ト)平等甲板船一六二(チ)「ウエル、デッキ、シッ
 プ」一六三(四)綱具裝置ニ關スル種類一六三(イ)シッポ一六三(ロ)バーク一六三(ハ)
 ハーケンタイン一六三(ニ)ブリッグ一六三(ホ)プリガンタイン一六三(ヘ)スクー
 ナー一六三(ト)ラッガー一六四(チ)カッター一六四(リ)スループ一六四(ヌ)ヨッ
 ト一六五(五)航路定限ニ關スル種類一六五(イ)遠洋航船一六五(ロ)近海航船一六五
 (ハ)沿海航船一六六(ニ)平水航船一六六(六)用途ニ關スル種類一六六(イ)郵便
 船一六六(ロ)旅客船一六六(ハ)貨物船一六七(ニ)旅客貨物兼用船一六七(ホ)移民
 船一六七〇第二 船舶ノ積量——(一)總噸數一六八(二)登簿噸數一六九(三)載
 貨噸數一七〇(四)排水噸數一七一(五)石數一七一〇第三 船舶ノ設備——(一)
 法定ノ設備一七二(二)任意ノ設備一八六

第三篇 海員

(一八九頁……三〇八頁)

第八章 海員養成及保護

(一八九頁……二二六頁)

第一節 海員ノ養成

(一八九頁……二〇二頁)

○第一 海員養成ノ要旨一八九 ○第二 官立商船學校——(一)組織一九三
 (二)東京本校一九四(イ)目的一九四(ロ)學科一九四(ハ)脩業年限一九五(ニ)學生
 採用法一九五(ホ)練習船一九六(ヘ)本校卒業者就職別一九七(三)大阪及函館分
 校一九七(イ)目的一九七(ロ)學科一九八(ハ)修業年限一九八(ニ)生徒採用方一九九
 (ホ)水産講習所卒業生授業一九九○第三 公私立商船學校——(參照)商船學校
 規程二〇〇○第四 海員養成所二〇二

第二節 海員ノ保護

(二〇三頁……二二六頁)

○第一 海員保護ノ要旨二〇三 ○第二 日本海員救濟會——(一)目的二〇六
 (二)組織及役員二〇七(三)事業一班二〇九(イ)海員ノ媒介及懲戒二〇九(ロ)海
 員寄宿所二一〇(ハ)海員ノ施療二二一(ニ)海員風儀ノ矯正二二二(ホ)海員ノ貯
 金二二三(ヘ)海員ノ媒介、寄宿及施療人員二二三○第三 大日本帝國水難救濟

會——(一)目的二二四(二)組織及役員二二五(三)救難所及其ノ組織二二七
 (四)事業一斑二二九(イ)救難成績二三〇(ロ)救護者ノ賞與及扶助二三二(ハ)救
 難電報二三三(ニ)救命砲及附屬具ノ寄贈二三三〇第四 水難救護法二三四

第九章 海員ノ資格

(二二七頁……二五三頁)

○第一 海技免狀ノ種類 二三七 ○第二 受験履歴 二三八 ○第三 海技試験
 ノ場所及期日——(一)場所 二三二(二)期日 二三二 ○第四 受験申請手續二三三
 ○第五 海員試験——(一)試験ノ種別 二三四(二)試験科目 二三四(三)試験手
 料 二四三(四)試験ノ停止 二四三 ○第六 海技免狀ノ授與等——(一)免狀ヲ受有
 スヘキ資格 二四四(二)免狀ノ申請 二四五(三)免狀ノ授與、書式、保管等 二四六
 (四)海員ノ登録稅等 二四八 ○第七 海員昇進ノ順序 二四九 ○第八 外國海
 員ノ資格 二五一

第十章 水先人ノ資格

(二五四頁……二六一頁)

○第一 水先人タルヘキ條件 二五四 ○第二 受験履歴 二五五 ○第三 試験

ノ場所、期日、并ニ受験申請手續 二五五 ○第四 試験——(一)試験ノ種
 別 二五六(二)試験科目 二五七(三)試験手數料 二五七 ○第五 水先免狀ノ授與
 等——(一)免狀ノ申請、授與、書式、保管等 二五七(二)水先人ノ登録稅等 二六〇
 ○第六 水先法令書 二六〇 ○第七 船長又ハ運轉士ニ水先免狀ヲ授與スル
 コト 二六〇

第十一章 船員及其ノ職掌

(二六二頁……二八〇頁)

○第一 船員ノ名稱 二六二 ○第二 乗組定員 二六三 ○第三 法定ノ船舶職
 員 二六五 ○第四 船務ノ區別——(一)甲板部主管ノ業務 二六七(二)機關部主
 管ノ業務 二六八(三)事務部主管ノ業務 二六八(四)衛生部主管ノ業務 二六九 ○第
 五 船員職務ノ分擔——(一)船長 二六九(二)一等運轉士 二七一(三)二等運轉士
 以下 二七二(四)機關長 二七四(五)一等機關士以下 二七四(六)事務長 二七五(七)
 事務員 二七五(八)船醫 二七六(九)甲板部屬員 二七六(十)機關部屬員 二七七(十
 一)事務部屬員 二七八(十二)衛生部屬員 二八〇

第十二章 船内ノ紀律

(二八二頁……二八八頁)

○第一 紀律ノ須要二八二 ○第二 紀律ノ要素——(一)服従二八一(二)秩序二八二(三)誠實二八三(四)忍耐二八二(五)品位二八三 ○第三 紀律ヲ涵養維持スル手段——(一)船内ノ條規二八四(二)各部各員間ノ調和二八四(三)上下ノ區別ト疏通二八五(四)當直ノ區分、操練ノ部署及總員ノ配置二八五(五)賞罰ヲ明ニスル事二八六(六)紀念日ニ於ケル訓示二八六(七)監督ノ巡視二八七

第十三章 海事審判及普通裁判

(二八九頁……三〇八頁)

第一節 海事審判

(二八九頁……二九六頁)

○第一 懲戒ヲ受クヘキ行爲二八九 ○第二 懲戒ノ種類二九〇 ○第三 審判所ノ組織二九二 ○第四 地方海員審判所ノ管轄區域及管轄權二九二 ○第五 審判前ノ手續二九三 ○第六 地方海員審判所ノ審判二九三 ○第七 高等海員審判所ノ審判二九五 ○第八 補佐人二九六

第二節 普通裁判

(二九七頁……三〇八頁)

第四篇 船主、船員間ノ關係
第十四章 船長ト船主トノ關係

(三〇九頁……三七五頁)
(三一〇頁……三三七頁)

○第一 雇傭契約——(一)報酬三二〇(二)雇入期間三二一(三)解雇條件三二一

○第一 民刑事制裁ノ大要二九七 ○第二 海員ニ關スル罰則——(一)必要書類ニ關スル犯則二九九(二)發航準備ノ検査ヲ怠リ、交代者ヲ置カス上陸スル等ノ事二九九(三)海難救護ノ義務ヲ怠ル事三〇〇(四)懲戒處分ノ助力ヲ拒ム事三〇一(五)去船、脱船三〇一(六)海員ヲ遺棄スル事三〇二(七)船内ニ危險物ヲ

携帯スル事三〇三(八)故意ニ船舶ヲ毀損若クハ沈没セシメ又ハ人ヲ殺ス事三〇二(九)上長ヲ脅迫、歐打スル事三〇三(十)船長職權ノ濫用三〇三(十一)結黨暴動ノ事三〇四(十二)職務ノ懈怠三〇四 ○第三 水先人ニ關スル罰則——(一)業務ノ懈怠三〇五(二)公權又ハ免狀停止中ノ營業三〇五(三)水先人ニ非サル者ノ營業三〇五(四)水路嚮導ニ關スル犯則三〇六 ○第四 國旗ニ關スル罰則三〇六

○第五 船舶検査ニ關スル罰則三〇七 ○第六 航路標識ニ關スル罰則三〇七

(四)船長ハ自己ノ爲ニ商賣スヘカラサル事 三二二(五)船内賄及航海用具ノ事 三二三〇第二 船長ハ船主ノ代理人ナリ 三二三〇第三 船長ノ權利、義務 三二四(甲)權利 三二四(一)旅客及貨物ノ運送契約ヲ結フ事 三二五(二)船舶ノ修繕又ハ艤装ヲ爲ス事 三二六(三)船舶又ハ積荷ヲ處分スル事 三二六(四)給料其他ノ請求權 三二八(五)海員ノ雇入及雇止ヲ爲ス事 三二九(六)船長ノ指揮權 三二九(七)船長ノ懲戒權 三二九(乙)義務 三三〇(一)船舶并ニ船内ノ人命及財産ヲ保全スヘキ事 三三〇(二)海員ノ職務ヲ十分監督スヘキ事 三三一(三)航海ノ準備ヲ整頓スヘキ事 三三一(四)妄ニ船舶ヲ去ルヘカラサル事 三三二(五)妄ニ豫定ノ航路ヲ變更セス又豫定外ノ港ニ寄航セサル事 三三二(六)航海中危險ノ虞アル場合ニハ自ラ甲板上ニ在ルヘキ事 三三三(七)積荷ノ處分ニ關シ關係人ノ利益ニ最モ注意スヘキ事 三三三(八)船主ニ報告及計算ヲ爲スヘキ事 三三四(九)船舶放棄ノ場合ニハ最後ニ去ルヘキ事 三三四(十)海難救助ノ事 三三五(十一)航海ニ關シ官廳ニ届出ツヘキ事 三三五(十二)船内死亡者ノ始末 三三七(十三)在外日本人送還ノ

事 三三七〇第四 船長ノ行爲ニ關スル船主ノ責任 三三七〇第五 船主ノ船長解雇權 三三八〇第六 船主ノ船長處分法 三三〇〇第七 船主ノ變更 三三二〇第八 恩給 三三三〇第九 船長ト傭船者又ハ船舶賃借人 三三三六

第十五章

船長船主ト海員トノ關係

(三三八頁……三五六頁)

〇第一 海員ノ雇入及雇止——(一)海員雇入契約及記載事項 三三八(二)海員ノ雇止 三四〇(三)雇入契約ノ終了 三四二(四)海員雇止ノ請求 三四二(五)海員雇入期間 三四二(六)海員職務證明書 三四二〇第二 海員ノ權利及義務——(甲)權利 三四三(一)食料ヲ受クル事 三四三(二)治療費及看護費ヲ受クル事 三四四(三)葬式費ヲ受クル事 三四五(四)給料及無償送還請求權 三四五(五)債權ノ時効 三四七(乙)義務 三四七(一)妄ニ船舶ヲ去ルヘカラサル事 三四七(二)妄ニ雇止ヲ請求スヘカラサル事 三四九(三)上長ニ從順ナルヘキ事 三四九〇第三 船長ノ懲戒權——(一)懲戒權ノ行使 三五〇(二)懲戒ノ種類及適用 三五二(一)監禁 三五二(二)上陸禁止 三五二(三)加役 三五二(四)減給 三五二(三)公權ノ援助 三五二〇第四 船主ノ變

更 三五二〇第五 海員給料ノ支拂ニ關スル便宜 三五三 (甲)英國現行法 三五四
 (一)給料前渡法 三五四 (二)給料内渡法 三五四 (三)海員爲替 三五四 (乙)日本郵船會社
 内規 三五五 (一)遠洋航船屬員給料前渡ノ事 三五五 (二)遠洋航船役員給料家族渡
 ノ事 三五五 (三)金圓仕拂通知書 三五六

第十六章

船長、船主ト水先人トノ關係并ニ水先事務ニ關

スル規定

(三五七頁……三七五頁)

○第一 水先區 三五七 ○第二 水先人ノ雇用 三五九 ○第三 水先人ニ對ス
 ル船長ノ權限 三六〇 ○第四 水先人ニ對スル船長ノ義務 三六一 ○第五 水
 先人雇用ノ場合ニ於ケル船主及船長ノ責任 三六二 ○第六 水先船、水先旗、水
 先信號等——(一)水先船 三六五 (二)水先旗 三六六 (三)水先信號 三六六 (四)水路
 嚮導ノ證明 三六八 (五)水先人報告ノ義務 三六九 ○第七 水先案内料 三六九 ○第
 八 水先人組合 三七二

第五篇 航海

(三七六頁……四九六頁)

第十七章 航海ノ準備

(三七六頁……三九八頁)

○第一 準備ノ大要 三七六 ○第二 船員ノ乗組并ニ雇入雇止等ノ公認 ——
 (一)海員雇入ノ場合 三七九 (二)海員雇止ノ場合 三八〇 (三)海員雇入契約更新
 又ハ變更ノ場合 三八二 (四)手数料 三八三 (參照)船員手帖 三八四 (イ)船員手帖
 ノ申請、返納等 三八四 (ロ)船員手帖ノ様式 三八四 ○第三 船用品ノ準備——(一)
 屬具 三八五 (二)備付品 三八六 (三)燃料石炭 三八六 (四)贈品 三八六 (五)消耗品 三八七
 (六)旅客需用品 三八七 ○第四 必要書類ノ備付——(一)船舶國籍證書 三八八
 (二)海員名簿 三八九 (三)屬具目錄 三九〇 (四)航海日誌 三九二 (五)旅客名
 簿 三九三 (六)運送契約并ニ積荷ニ關スル書類 三九四 (七)稅關ヨリ交附セラレ
 タル書類 三九五 (八)船舶検査證書 三九五 (九)船舶健全證書 三九六 ○第五 準備
 金 三九七

第十八章 航海中ノ業務

(三九九頁……四五〇頁)

○第一 業務ノ大要 三九九 ○第二 船長船橋ニ在ルヘキ場合 四〇一 ○第三
 目次

命令簿 四〇二 ○第四 航海ニ關スル注意——(一)海圖及水路誌ノ撰用 四〇三
 (二)航路及通航時間ノ撰定 四〇四 (三)陸地、岩礁等ノ近傍ヲ航行シ又ハ未測
 港等ニ入港スルキ 四〇五 (四)水先人ヲ雇用スルトキ 四〇五 (五)衝突豫防ノ注意
 四〇六 (六)航路ノ變更等 四〇七 ○第五 原基羅針盤、時辰儀取扱方ノ注意 四〇八
 ○第六 本船ノ位置及速力ノ測定(一)——海上氣象ノ觀測(二)——航路標
 識ノ異狀(三)——海圖水路誌ニ關スル新發見(四) 四〇八 ○第七 甲板部當直
 及當直員ノ職責——(一)當直ノ組織 四二〇 (二)當直ヲ置クヘキ場合 四二一
 (三)當直運轉士ノ職責 四二二 (イ)職責一班 四二二 (ロ)命令ノ遵守 四二二 (ハ)急迫
 ノ場合 四二二 (ニ)舵取及看守ノ監督 四二三 (ホ)船燈ノ監視 四二三 (ヘ)速力、位置、
 漏水等ニ關スル注意 四二三 (ト)碇泊中ノ注意 四二四 (チ)交代 四二五 ○第八 看
 守 四二五 ○第九 機關長ノ機關室ニ在ルヘキ場合 四二六 ○第十 機關要部
 并ニ石炭庫等ニ關スル注意——(一)指壓圖ヲ寫シ取ル事 四二七 (二)蒸氣ヲ常
 用定度ニ保ツ事 四二七 (三)一方ノ汽笛ニテ運轉スル事 四二七 (四)曲拐軸、トスラス

ト」軸、中間軸、及螺旋軸 四二八 (五)正副汽鐘及加熱器 四二八 (六)安全瓣 四二八
 (七)驗汽器及驗空器 四二九 (八)石炭庫并ニ焚火室ノ附近 四二九 (九)船底「セメ
 ント」 四三〇 (十)船内機械類 四三〇 (十一)凍冷機 四三二 ○第十一 機關部當直
 及當直員ノ職責——(一)當直ノ組織 四三二 (二)當直ヲ置クヘキ場合 四三二 (三)
 當直機關士ノ職責 四三三 (イ)職責一班 四三三 (ロ)命令ノ遵守 四三三 (ハ)急迫ノ
 場合 四三三 (ニ)軸受、硝子驗水器、排水嘴子及滲水溜ニ關スル注意 四三四 (ホ)
 交代 四三五 ○第十二 旗章及信號——(一)旗章 四三五 (イ)一般船舶 四三六
 (ロ)郵便船及外國航船 四三六 (ハ)貴顯ノ乘船スルトキ 四三七 (ニ)軍艦ニ出逢ヒ
 又ハ燈台前ヲ通航スルトキ 四三七 (ホ)滿船飾又ハ半旗ノ禮 四三八 (ヘ)旗章ノ
 掲降時刻 四三三 (二)信號 四三三 (イ)旗信號 四三三 (ロ)望樓前ヲ通航スルトキ 四三三
 (ハ)軍港、要港ニ入港スルトキ 四三三 (ニ)港則實施ノ開港場ニ出入スルトキ
 四三三 (ホ)危險物積載ニ關スル信號 四三四 (ヘ)傳染病ニ關スル信號 四三四 (ト)航
 路信號 四三四 (チ)露中信號 四三五 (リ)難船信號 四三六 (ヌ)港内非常信號 四三七

○第十三 操練——(一)操練ノ目的 四三七 (二)操練ノ方法 四三八 (イ)防火操練 四三九 (ロ)端艇操練 四三九 (三)操練部署表 四三九 (イ)防火操練部署表 四三九 (ロ)端艇操練部署表 四四一 ○第十四 航海日誌及機關室日誌——(一)日誌ノ種類及其ノ保管者 四四二 (二)日誌ニ記載スル事項及方法 四四三 (イ)航海日誌 四四三 (ロ)甲板部當直日誌 四四三 (ハ)船用航海日誌 四四五 (ニ)機關日誌 四四六 (ホ)機關日誌 四四七 (ヘ)甲板部機關部兩日報ノ交換 四四八 (三)日誌ニ關スル一般ノ注意 四四九 (イ)日誌ノ記事ニ關スル注意 四四九 (ロ)日誌ノ始末ニ關スル注意 四四九

第十九章 着港ノ手續

(四五二頁……四八〇頁)

○第一 手續ノ大要 四五二 ○第二 港則ニ關スル手續——(一)着港届并ニ交通證書 四五二 (二)出港届 四五二 (三)着發届 四五三 (四)港内ニ於ケル注意 四五三 (イ)碇泊區域及航路 四五三 (ロ)速力 四五三 (ハ)進路横切等ノ禁止 四五四 (ニ)双錨泊 四五四 (ホ)船燈 四五四 (ヘ)曳船 四五四 (ト)「スウキンギング、ブーム」ノ使用

禁止 四五五 (チ)灰燼其他汚穢物ノ投棄 四五五 (リ)位置變更ノ爲メ綱ヲ執ルトキ 四五五 (ヌ)繫船浮標及其ノ使用料 四五五 (ル)浮標ニ繫留スル船舶ノ投錨 四五六 (オ)應急準備 四五六 (ツ)避難 四五六 (カ)夜間ノ入港 四五七 (五)危險物ヲ積載シタル船舶ノ入港手續 四五七 (イ)爆發物 四五七 (ロ)容易ニ燃燒スヘキ物料 四五七 ○第三 船舶ニ關スル關稅手續——(一)手續ノ大要 四五八 (二)入港及出港届 四六〇 (三)積荷目録 四六〇 (四)艙口申告書 四六一 (五)船用品目録 四六一 (六)旅客氏名表 四六一 (七)出港免狀 四六一 (八)外國貿易船ト不開港場 四六一 (九)外國貿易船ト船用品積入 四六三 (十)沿海通航船ト外國ノ港 四六三 (十一)船舶資格ノ變更 四六三 (十二)稅關棧橋ノ使用 四六四 (參照)帝國開港場 四六四 ○第四 噸稅——(一)噸稅ノ納付 四六六 (二)除外例 四六六 (三)積量測定ノ事 四六七 (四)証明手数料 四六七 (五)罰則 四六七 ○第五 外國諸港ニ於ケル稅目、料金等 四六八 ○第六 管海官廳ニ對スル手續——(一)航海日誌其他ノ書類提出ノ事 四六八 (二)海難其他ノ事故報告ノ事 四六九 (イ)海難其他事故ノ報告 四六九

(ロ)報告書ノ認証 四七〇 (ハ)報告書ノ書式 四七〇 (三)海員不始末届出ノ事 四七〇 (四)船内ニ於ケル死亡、出生 四七二 (イ)海員ノ死亡及遺産目録ノ作成 四七二 (ロ)船内ニ於ケル出生死亡ノ戸籍手續 四七二 (ハ)遺産目録ノ提出 四七二

○第七 檢疫手續——(一)手續ノ大要 四七三 (二)檢疫港、檢疫所及檢疫病 四七五 (三)傳染病ニ關スル檢疫官吏ノ處分權 四七六 (四)檢疫所ヘノ移轉 四七八 (五)傳染病死亡者ノ處分 四七八 (六)消毒費ノ定額及支辨方 四七八 (七)傳染病患者等ニ關スル費用 四七九 (八)事實隱蔽ノ罰則 四八〇

第二十章 難船及其ノ救護

(四八一頁……四九六頁)

○第一 海難ノ種類 四八一 ○第二 救護及退船ノ心得 四八一 ○第三 投荷及荷卸 四八二 ○第四 軍艦ノ援助 四八三 ○第五 他船ノ救護 四八四 ○第六 海難ノ認證 四八五 ○第七 海難ノ報告 四八八 ○第八 水難救護ノ義務 四八九 (一)市町村長及警察官ノ救護義務 四九〇 (二)市町村長ノ權利及之ヲ冒ス者ニ對スル罰則 四九〇 (三)船難報告書 四九〇 (四)救護物件引渡ノ手續 四九二 (五)漂流

物及沈没品ノ取扱手續 四九三 ○第九 水難救濟會救難所 四九五

第六篇 運送

(四九七頁……五八五頁)

第二十一章 旅客ノ運送

(四九七頁……五二四頁)

○第一 乗船切符——(一)性質 四九七 (二)種類 四九八 (三)書式 四九九 ○第二 船主、船長ト旅客トノ關係——(一)船主ノ責任 四九九 (イ)旅客航海中ノ食料ヲ負擔スル事 五〇〇 (ロ)航海ノ途中ニ於ケル船舶修繕中旅客ニ住所及食料ヲ供給スル事 五〇〇 (ハ)天災等ノ爲メ航海ヲ遅延シタルトキ旅客ニ食料ヲ供給スル事 五〇一 (ニ)船主又ハ船員ノ不注意ニ原因スル損害賠償 五〇二 (一)船長ノ權利及義務 五〇二 (イ)危險物ヲ所持シ又ハ不穩ノ舉動アル旅客ニ對スル事 五〇二 (ロ)疾病ニ罹レル旅客ニ對スル事 五〇二 (ハ)不行跡ノ旅客ニ對スル事 五〇三 (ニ)非常ノ際旅客ニ對スル命令 五〇三 (ホ)運送賃ヲ仕拂ハサル旅客ニ對スル事 五〇三 (ヘ)旅客ノ健康及安全ニ關スル注意 五〇四 (三)旅客ノ義務 五〇四 (イ)出帆時刻前ニ乗船スヘキ事 五〇四 (ロ)船内ノ紀律ヲ守リ且ツ非常ノ際船

務ニ助力スヘキ事 五〇五 ○第三 船主ト備船者トノ關係 五〇五 ○第四 旅客運送契約ト運送賃 五〇六(一)契約ノ取結 五〇六(二)契約ノ解除 五〇六(三)契約ノ停止 五〇七(四)契約ノ終了 五〇七(五)船中取運送賃 五〇八(六)中途ノ上陸 五〇九(七)無賃渡航者 五〇九 ○第五 旅客運送賃ノ割引 五二〇(一)小兒 五二〇(二)家族 五二二(三)軍人、外交官、宣教師等 五二二(四)僕婢 五二二 ○第六 旅客手荷物——(一)無賃手荷物ノ制限 五二二 (二)手荷物ト爲スヘカラサル性質ノ物品 五二三(三)手荷物ニ對スル責任 五二三(四)遺留手荷物ノ處分 五二四 ○第七 旅客定員——(一)普通旅客 五二六 (二)別種旅客 五二六 ○第八 旅客名簿 五二七 ○第九 船房規則 五二八 ○第十 船醫——(一)船醫ノ乗船 五二九(二)船醫ノ職務 五三〇 ○第十一 旅客ノ待遇及旅客申告簿 五三一 ○第十二 移民等運送ニ關スル注意 五三三

第二十二章 郵便物ノ運送

(五二五頁……五二九頁)

○第一 郵便物ニ關スル政府、船主間ノ關係 五三五 ○第二 郵便物ノ受渡手

續 五三五 ○第三 郵便物ノ保管取扱ノ注意 五三六 ○第四 船内ノ郵便函 五三七 ○第五 郵便官吏ノ乗船 五二七 ○第六 郵便物ノ處分 五二八 ○第七 郵便旗章 五二八 ○第八 外國艦隊又ハ軍艦ニ發着スル郵便物ノ取扱方 五二九

第二十三章 貨物ノ運送

(五三〇頁……五八五頁)

○第一 貨物運送契約 五三〇 ○第二 運送契約當事者ノ關係 五三一(一)船主ノ責任及債權 五三一(イ)船主、船員ノ不注意又ハ大過失ト損害賠償 五三二(ロ)船主ノ責任期間 五三三(ハ)運送賃其他ノ請求權 五三三(ニ)船積又ハ陸揚ノ延滞ニ對スル報酬 五三五(ホ)船主債權ノ有効期間 五三五(二)船長ノ權限 五三六(イ)不法船積物品ヲ處分スル事 五三六(ロ)航海中荷主ノ爲メ積荷ヲ處分スル事 五三六(ハ)航海繼續ノ爲メ積荷ヲ處分スル事 五三七(ニ)共同ノ危險ヲ避クル爲メ積荷ヲ處分スル事 五三八(ホ)運送品ヲ供託スル事 五三八(三)備船者又ハ荷送人ノ義務 五三九(イ)船積ヲ怠ルヘカラサル事 五三九(ロ)運送ニ必要ナル書類ヲ船長ニ交附スヘキ事 五三九(ハ)貴重品ヲ明告スヘキ事 五三九(四)荷受人ノ義務 五四〇

(イ)陸揚ヲ怠ルヘカラサル事 五四〇 (ロ)運送賃等ヲ仕拂フヘキ事 五四〇 ○第三 貨物運送賃——(一)運送賃ノ説明及仕拂期 五四一 (二)運送賃ノ定メ方 五四二 (三)積荷滅失ノ場合ニ於ケル運送賃 五四二 (四)傭船者又ハ荷送人カ船積ヲ怠リ發航シタル場合ノ運送賃 五四三 (五)運送契約ノ解除ト運送賃 五四四 (六)運送契約ノ終了ト運送賃 五四八 ○第四 船荷證券ノ發行者及記載事項 五四八 ○第五 船荷證券ノ効力 五五一 ○第六 船荷證券ト運送品トノ引換 五五二 ○第七 貨物受渡手續ノ大要 五五四 ○第八 貨物ノ積付——(一)積付ノ要義 五五六 (二)積付方一班 五五七 (イ)御用品、郵便物、貴重品 五五七 (ロ)危險物 五五八 (ハ)發火ノ虞アル物品 五五九 (ニ)加害物 五五九 (ホ)毀損シ易キ物品 五五九 (ヘ)腐敗シ易キ物品 五五九 (ト)穀物 五五九 (チ)家畜 五五九 (リ)石炭 五六〇 (ヌ)口物類 五六一 (ル)材木 五六一 ○第九 貨物ニ關スル税關手續——(一)關稅ノ稅率、納付及徵收ノ標準 五六三 (二)輸出及積戻手續 五六五 (三)輸入手續 五六七 (四)回漕手續 五六九 (五)収容及競賣手續 五七〇 (六)異議及訴願手續 五七三

(七)不開港場ニ於テ貨物ヲ輸出入スル事 五七四 (八)税關執務時間外ニ於テ貨物輸出入ノ手續ヲ爲ス事 五七五 (九)税關指定ノ場所外ニ於テ貨物積卸ノ手續ヲ爲ス事 五七七 (十)税關構外ニ於テ貨物檢査ヲ受クル事 五七七 (十一)税關證明手数料及船舶貨物統計表 五七八 (十二)罰則 五七八 (十三)保稅倉庫 五七九 (十四)保稅倉庫ニ於ケル庫入庫出手續 五八一 (十五)税關假置場 五八二 (十六)税關假置場ニ於ケル移入移出手續 五八四 (參照)税關及其支署 五八五

第七篇 海損及海上保險

(五八六頁……六二二頁)

第二十四章 海損

(五八六頁……五九六頁)

○第一 海損ノ三種 五八六 ○第二 共同海損トハ何ソヤ 五八六 ○第三 共同海損タル損害高ノ定メ方 五八七 ○第四 共同海損ノ分担方 五八七 ○第五 共同海損ノ分担ニ算入スヘカラサルモノ 五八九 ○第六 共同海損ノ分担ヲ免ルヘキ場合 五八九 ○第七 積荷價格ヲ僞ルトキノ制裁 五九〇 ○第八 共同海損ノ時効 五九一 ○第九 不可抗力ニ基因スル船舶碇泊費ノ負擔方 五九一

○第十 單獨海損及小海損 五九一 ○第十一 船舶ノ衝突ヨリ生シタル損害
 —— (一)衝突ノ原因及損害負担方 五九二 (イ)兩船何レニモ過失ナカリシ場
 合 五九三 (ロ)兩船双方ノ過失ニ出テタル場合 五九三 (ハ)兩船一方ノ過失ニ出テ
 タル場合 五九四 (ニ)債權ノ時効 五九六

第二十五章 海上保險

(五九七頁……六二二頁)

○第一 海上保險契約 五九七 ○第二 海上保險證書ノ交附及記載事項 五九八
 ○第三 保險者ノ責任 —— (一)保險者カ損害ヲ負担スヘキ範圍 五九九 (二)
 保險者責任ノ始期及終期 六〇一 (三)保險價格ノ定メ方 六〇二 (四)保險者填補
 高ノ算定法 六〇二 ○第四 保險契約者(又ハ被保險者)ノ義務 六〇三 (一)一定
 ノ保險料ヲ仕拂フ事 六〇三 (二)保險ノ目的物ニ生シタル損害ヲ保險者ニ通知
 スル事 六〇四 (三)保險ノ目物ニ對スル損害ノ防止ヲカムル事 六〇五 (四)保險者
 担保ノ危險ノ變態ヲ保險者ニ通知スル事 六〇五 ○第五 海上保險契約中ノ事
 項カ變更シタルトキノ影響 —— (一)航海ヲ變更シタルトキ 六〇六 (二)航海

ヲ遅延シ又ハ航路ヲ變更シタルトキ 六〇七 (三)船舶ヲ變更シタルトキ 六〇七
 (四)船長ヲ變更シタルトキ 六〇八 (五)保險價格カ著ク減少シタルトキ 六〇八
 ○第六 保險契約ノ解除 —— (一)保險契約者隨意ノ解除 六二〇 (二)保險者又
 ハ保險契約者カ破産ノ宣告ヲ受ケタルトキ 六二〇 (三)保險者担保ノ危險カ生
 セサルニ至リタルトキ 六二〇 (四)保險者担保ノ危險カ著ク變態シタルトキ
 六二一 ○第七 保險契約ノ無効 六二二 (一)契約ノ當時事故ノ生セサルヘキコ
 ト又ハ既ニ生シタルコトヲ知レルトキ 六二二 (二)契約ノ當時保險契約者カ事實
 ヲ偽リタルトキ 六二二 (三)保險金額カ保險目的物ノ價格ニ超過シタルトキ 六二三
 (四)保險ノ目的物ヲ他人ニ讓渡シタルトキ 六二三 (五)保險者担保ノ危險カ保險
 契約者等ノ過失ノ爲メ著ク變態シタルトキ 六二三 ○第八 海上保險ノ種類
 (前述單獨保險ノ外) —— (一)再保險 六二四 (二)共同保險 六二四 (三)重複保險 六二五 (四)以
 上三保險ノ圖解 六二五 ○第九 委付 —— (一)委付トハ何ソヤ 六二八 (二)委
 付ヲ爲シ得ヘキ場合 —— (三)委付ノ手續 六二九 (四)委付ノ結果 六三〇

帝國海事總覽附錄

目次

| | | |
|----|--|----------------|
| 第一 | 帝國海事法令一覽 | (一頁)……………三頁) |
| 第二 | 海海上重要事件ノ紀念日 | (四頁)……………一〇頁) |
| 第三 | 世界商船表 | (一〇頁)……………一二頁) |
| 第四 | 世界主要汽船會社表 | (一二頁)……………一四頁) |
| 第五 | 本邦内外定期航路表 <small>(但シ政府ノ補助ヲ受クルモノ)</small> | (一四頁)……………一九頁) |
| 第六 | 列國東洋定期航路表 | (一九頁)……………三三頁) |
| 第七 | 本邦船渠表 | (三三頁)……………三五頁) |
| 第八 | 東洋船渠表 | (三五頁)……………三八頁) |
| 第九 | 本邦造船所船渠料表 | (三八頁)……………四四頁) |
| 第十 | 本邦船舶噸數別及航路別表 | (四四頁)……………四六頁) |

| | | |
|------|-----------------|-----------------|
| 第十一 | 本邦主要船主及所有船舶一覽 | (四七頁)……………四九頁) |
| 第十二 | 造船規程合格船表 | (五〇頁)……………五三頁) |
| 第十三 | 本邦海員表 | (五三頁)……………五四頁) |
| 第十四 | 世界水難救護會社表 | (五四頁)……………六〇頁) |
| 第十五 | 世界海底電線一覽 | (六〇頁)……………六三頁) |
| 第十六 | 本邦及英國海上保險會社表 | (六三頁)……………六五頁) |
| 第十七 | 本邦重要輸出入品表 | (六五頁)……………六八頁) |
| 第十八 | 「ヨーク、アントゥアープ」規程 | (六八頁)……………七九頁) |
| 第十九 | 内外主要港間漚程表 | (七九頁)……………八六頁) |
| 第二十 | 海軍武官官階表 | (八六頁)……………八八頁) |
| 第二十一 | 海軍卒職名等級表 | (八八頁)……………八九頁) |
| 第二十二 | 海軍武官俸給及航海加俸表 | (八九頁)……………九八頁) |
| 第二十三 | 世界軍艦表 | (九八頁)……………一〇〇頁) |

附録目次

第二十四 列國東洋派遣艦隊表
 第二十五 列國代用巡洋艦表

三十
 (一〇〇頁……一〇七頁)
 (一〇八頁……一二〇頁)

目次終

帝國海事總覽

工學博士 須田利信
 船長 茂木鋼之闔
 寺島成信著

第一篇 海運

第一章 海運と帝國

第一 日本ノ國是ト海運

我が日本は、恰も是れ太平洋上に浮遊する一個の扁舟に似たり、四千萬の同胞は、乃ち之を操轉する舟子たらずむは非ず、扁舟を驅て彼岸に安着せしめむには、偏に操轉の熟練に惟れ頼る、我國をして國是の大計を果さしめむと欲せば、須く海運の振興を圖らざるへからず。

蓋し我が帝國致富の本は、通商立國の主義に在り、強兵の術は、海軍を國防の主幹

と爲すに存す、加ふるに過剰の人口を配通し、進て氣焰を海外に吐かむか爲には、又殖民政策の實行を要す、是等の三大策は、實に日本國是の宿る所、之か消長は我が隆替興廢の係る所、而して其の由來を質せば、一に海運の補助媒介を得て始めて成功を期すべきものとす、

右ノ二節ハ、拙著「日本海運論」ノ冒頭ニ特筆シタル所ニシテ、辭句簡ナリト雖モ、以テ國是ト海運トノ關係ヲ指摘シ、百年ノ大計トシテ帝國ノ當ニ探ルヘキ方針ヲ推知スルニ足ラント信ス、

第一 帝國ノ形勝

日本ノ地位タルヤ、亞細亞大陸ノ東端、太平洋ノ北西隅ヲ占メ、西ハ一羣帶水ヲ隔テテ近ク支那、朝鮮ニ臨ミ、東ハ煙波千里、遠ク南北亞米利加ニ對シ、北ニ露領西伯利亞控エ、南ニ南洋諸島及濠洲ヲ抱ク、又其ノ地形ヲ按スルニ、大小四百八十七ノ嶋嶼ヨリ成リ、海岸ノ延長七千五百餘里ニ亘リ、良港佳灣ノ數一百有餘ニ上ル、加フルニ汽船鐵道ノ如キ交通機關及一般製造業ノ起動力タル石炭ハ、國內到處ニ產出シ、造船造兵其他大

小工業ノ主要材料タル銅鐵モ其ノ埋藏額亦尠シトセス、實ニ海國トシテハ宇内無比ノ形勝ヲ有スルモノニシテ、之ヲ彼ノ英國カ歐洲ノ西陲、大西洋ノ北東縁ニ崛起シテ、北東ハ近ク大陸諸邦ニ隣シ、西面遙ニ米洲ヲ擁シ、南ニ亞弗利加ヲ控ユルニ比スルモ毫モ遜色ナシ、地理上ノ形勝カ一國ノ運命ニ大關係アルハ、古來ノ歴史ニ晰然タリ、我カ國民タルモノ奮發一番、飽迄天賦ノ形勝ヲ利用シテ、所謂地ノ利ト人ノ和ヲ兼ネ、以テ海國ノ實ヲ擧ケ東洋ノ英國タルコトヲ期セサルヘカラサルナリ、

第二 海運ノ任務

海運ノ關係ハ廣クシテ之ヨリ胚胎スル利益ハ大ナリ、世界ノ海國カ國家事業トシテ海運保護ノ獎勵ニ努ムルモノハ、畢竟之カ任務ノ公益的ナルニ歸セスンハアラス、茲ニ其ノ任務ヲ概括スレハ大要左ノ如シ、

第一、内外貿易ノ機關ニシテ富國ノ淵源タル事

第二、郵政ノ機關ニシテ通信ノ利器タル事

第三、運輸交通ノ機關ニシテ貨物ノ運搬及旅客ノ往來ヲ便ニシ今日ノ汽船航路ハ恰モ

海上ニ鐵道ヲ敷設シタルモノナル事

第四、外交政略ノ機關ニシテ鞏固ナル定期航路ハ公海上ニ國家的私道ヲ印スルモノニ外ナラサル事

第五、軍備殊ニ海軍ノ後援ニシテ有事ノ日海陸軍ハ商船及船員ノ助力ヲ待ツコト大ナルヘキ事

第六、殖民政策ノ媒介ト爲リ海外移民ヲ誘掖擴充スルニ與テ力アルヘキ事

(備考)

紐青海事協會ハ本年ノ米國議會ニ提出セラレタル航海法案ニ關シ一片ノ請願書ヲ兩院ニ呈シ協賛ヲ求メタルモノ

、内海運業ノ利益ヲ指摘シタル數句ヲ左ニ轉載スヘシ

一、國旗ヲ掲ケ郵便物ヲ遞送スル船舶ハ世界ノ市場ニ向ケ國產物ノ販路ヲ求ムル好廣告ニシテ本國過剩ノ物

產ハ之カ爲メ益、需要ヲ増進スヘシ

二、海運業ハ諸般ノ商工業ヲ兼併スルモノニシテ各種ノ産業何レモ皆船舶ノ製造及其ノ維持運航ニ關係ナリ有

セサルハ無シ

三、商船ハ海軍ノ豫備ナリ是レ南北戰爭及米西戰爭ニ徴シテ明ナリ

四、國家ハ平時常ニ造船所、技師、職工及海員ノ供給ヲ充實ニシテ戰時咄嗟ノ用ニ供シ防備保全ノ途ヲ確

立スルコト肝要ナリ

五、本案ハ米國商船ノ擴張ヲ圖ル最良案ニシテ以テ國產物ノ發達及分配ヲ補助シ外國トノ通商貿易ヲ一層繁

榮ナラシムヘシ

第四 世界航海業ノ變遷

世界ノ航海業ハ之ヲ四期ニ區分スルコトヲ得ヘシ、即チ第一期ハ地中海航海期ニシテ、往古世界ノ貿易ハ小亞細亞ヨリ起リ、地中海方面、獨リ航海ノ隆盛ヲ擅ニシ、フェニシヤ、アゼンス、コンスタンチノープル、プロレンス等ノ諸市前後世界ノ商權ヲ握レリ、第二期ハ大西洋航海期ニシテ、十五世紀ノ末亞米利加發見ニ連レテ、新舊兩大陸間ニ航海行ハレ、西班牙、葡萄牙、佛蘭西、英吉利等ノ諸國之ニ從事シ、爾來益、盛ニシテ、現ニ世界中最も發達シタル航路トシテ優ニ一頭地ヲ拔ケリ、第三期ハ印度洋航海期ニシテ、十八世紀ノ半頃ヨリ和蘭、葡萄牙、西班牙等ノ諸國喜望峰ヲ廻航シテ印度方面ニ往復シ、英佛兩國ノ如キモ之ニ加ハリ、一八六九年蘇士運河ノ開通ニ伴フテ益、繁榮ニ赴キ、終ニ日本、支那マテモ航路ヲ延長セリ、第四期ハ所謂太平洋航海期ニシテ、一三三〇年前ヨリ英米ノ銳意着手スル所ト爲リ、近來東亞ノ局面殆ト一變シタルヨリ、俄ニ航路發達ノ機運ヲ早メ、^正來^下ニ二十世紀ハ太平洋ノ全盛時代ナラントハ、蓋シ各國民ノ刮目シテ待

設クル所ナラン、左レハ東洋南洋及北太平洋航路ノ咽喉ヲ扼スル我國ハ、最モ多望ナル太平洋ノ將來ニ就テ、豈ニ豫メ拮据籌畫スル所ナクシテ可ナランヤ、

第五 太平洋ノ將來

歐米諸國カ近來眼ヲ太平洋ニ轉シテ、其ノ勢力ヲ此ニ張ラントカムルハ、今更喋々ヲ待タサル所ニシテ、日清戰役ノ結果ハ、殆ト東洋ノ局面ヲ一變シ、支那又ハ朝鮮問題ヲ續出シテ、或ハ版圖分割ヲ主張スル者アリ、勢力區域ヲ劃定スル者アリ、門戶開放主義ヲ唱フル者アリ、其他鐵道ノ敷設ヤ鑛山ノ採掘ヤ、列強既ニ其ノ權利ヲ推占シタルモノ甚タ多シ、加フルニ米西戰爭ノ餘波ハ、布哇合併ト爲リヒリッピン占領ト爲リ、露政府ノ兀々經營シタル西伯利鐵道ハ、昔年ナラスシテ全通スヘク、滿州鐵道ハ工事意外ニ進捗シテ其ノ落成近キニアリ、朝鮮諸鐵道モ亦遠カラス敷設セラルヘク、而シテ是等ハ何レモ貨客聚散ノ門戶ヲ將ニ本邦對岸ニ開カントスルモノナリ、更ニ海上ノ施設ヲ觀察スレハ、彼ノ年來世評ニ噴々タリシ尼加拉瓦運河ハ、愈々米國ノ國家事業トシテ開鑿セラルヘク、巴拿馬運河亦佛國ノ後援ニ依テ開鑿工事ヲ繼續スルアリ、是等ノ運河ニシテ竣工セハ、

航路短縮ノ結果、忽チ米國東岸及西印度諸島ト東亞諸國トノ交通ヲ一層緊切ナラシムヘク、而シテ近來合衆國ノ進取政畧ト南米諸國ノ開發トハ、益々此ノ趨勢ヲ助長スヘキヤ必然ナリ、又米國西岸ヲ顧ルニ、露國ハ西伯利鐵道ノ全通ヲ待テ、年來ノ宿望タル太平洋航路ヲ開キ之ヲ北米鐵道ト聯絡セント欲シ、今ヤ協議中ニ在リト聞ク、桑港ノ「ビー、エム」會社ハ一萬八千五百噸ノ巨船ヲ注文シ、加拿陀ノ太平洋鐵道會社亦之ト同種ノ計畫アリ、其他英ノ「ビヤノ」ト云ヒ獨ノ「ロイド」ト云ヒ、佛ノ「エム、エム」ト云ヒ、皆太平洋航路ヲ新開スルノ希望ヲ抱キ、着々之カ準備ヲ怠ルモノニ非ス、將來太平洋カ世界交通貿易ノ本道トシテ、海面ニ幾十條ノ航路ヲ刻ミ、彼ノ往復船舶毎月一千隻ヲ下ルコト無キ大西洋ト、其ノ盛ヲ競フノ日モ爾カク遠キニ非サルヲ知ルヘシ、要スルニ歐米諸國カ政治上又通商上ニ、東亞ニ向テ逼迫シ來ル壓力ハ、年一年増進スルモノニシテ、中ニモ大鐵道ト大運河ノ竣工ハ、世界ヲ三四十日程ニ短縮シ、國際間ノ關係ヲ愈々密着ナラシメントス、諺ニ曰ク「勢に順ふ者は榮へ之に逆ふ者は衰ふ」ト、我カ國民タル者豈ニ此ノ趨勢ヲ利用セスシテ可ナランヤ、ギッピンス博士自著「萬國商業史」ニ特書シテ曰

ク、「日本は地理上より論するも商業國たるに最も適合せり、彼の西伯利鐵道及尼加拉瓦運河にして開通せん乎、日本は將に世界商業界の中心たるへし云々」ト、將來太平洋及東南洋ノ樞機ヲ制シ、其ノ商權、航海權ヲ掌握シテ、博士ノ此ノ豫言ヲシテ的中セシムルモ或ハ一片空想ニ屬セシムルモ、一ニ帝國民ノ覺悟如何ト顧ル耳、

第六 海外航路ト直輸貿易

(一) 海外航路助成ノ要旨

海外航路ヲ開設シテ航路ノ實權ヲ我手ニ握リ、直輸貿易ヲ獎勵シテ通商ノ實益ヲ我手ニ收ムルハ、蓋シ海國必須ノ政策ニシテ、國ヲ富マスノ基亦此ニ存ス、列國政府カ海外航路助成ノ爲メ、年々巨萬ノ保護金ヲ投シテ曾テ惜ムノ色ナキハ、豈ニ管ニ郵便機關ヲ整備スルカ爲ノミナランヤ、國民ノ直輸貿易ヲ鼓舞發達シテ、商利ヲ博シ國富ヲ増サシメント欲スルモノ亦主タル理由タルナリ、蓋シ外國貿易ノ利益ハ直輸業、即チ我カ貿易商カ外國ノ需用者若クハ供給者ト直接ノ取引ヲ爲スニ在リ、之ヲ我國既往ノ經歷ニ徴スルニ、遠洋航路未タ開ケスシテ唯、清韓近海ニ僅ニ二三ノ定期線ヲ通シタ

リシ當時ニ於テハ、海岸一步ヲ踏ミ出セハ、全ク異域ニ入ルノ感ヲ爲シ、言語慣習ノ異ナル外國人ノ支配ヲ受ケサルヲ得サリシカ故ニ、邦人躬自ラ海外ニ渡航シテ實地商業ノ事情ヲ探リ、又直接ニ住民ニ近適シテ嗜好ヲ知り流行ヲ察スルノ便少ナク、從テ內國商カ外國商ト直取引ヲ爲シ、若クハ自ラ海外ニ開店放資シテ、消費者又ハ生産者ト直接ニ貨物ヲ授受スルノ自由ヲ得ス、名ハ均ク外國貿易ト云フト雖モ、其ノ過半ハ夫ノ居留地商人ト稱スル一種ノ取次人ヲ經テ取引スルノ例ト爲リ、彼等ノ爲メ利益ノ多分ヲ壟斷セラレタルモ亦已ムヲ得サリシナリ、是レ畢竟遠洋航路ノ開設ナキカ爲メ、海外ノ運輸交通ハ殆ト之ヲ擧ケテ外國船ニ委託セサルヲ得サリシニ由ラスンハ非ス、左レハ之カ弊根ヲ艾除シテ直輸貿易ヲ盛ナラシムルニハ、所謂「國旗の向ふ所貿易之に隨ふ」ノ主義ヲ探リ、第一着手トシテ海外航路ヲ擴張シ、日本船舶ノ往復ヲ繁クシ、內國商ノ爲メ內國船ニ依リ、低率ノ運賃ヲ以テ安全ニ運送セシムルノ便利ヲ啓クニ若カサルナリ、

(二) 日本ノ商權及航海權

開國以來四十餘年、日本ノ外國貿易ハ十中八九歐米人ノ取扱ニ係リ、商權及航海權ノ實力ハ一ニ彼等ノ掌握スル所ト爲リタリシモ、日清戰役ノ影響ハ、海運社會ニモ勃興ノ動機ヲ與ヘ、頓ニ船舶ノ數量ヲ増シ、航海及造船ノ獎勵法實施セラレ、又特定航路助成ノ特典モ設ケラレタリ、此間ニ日本郵船會社ハ一躍シテ歐米濠孟ノ四大航路ヲ開キ、次テ大坂商船會社ノ台灣、朝鮮及支那航路ヲ擴張スルアリ、加フルニ東洋汽船會社亦創設セラレテ新ニ桑港航路ヲ開設セリ、左レハ是等ノ進取策ノ結果トシテ、外國貿易ノ上ニモ着々進歩ノ特色ヲ呈シ、年々我カ商權及航海權ノ歩武ヲ進メツ、ナルノ事跡歴然タリ、試ニ最近四年間ノ統計ニ依リ之ヲ觀察センニ、左表ノ如ク内外ノ商人又ハ船舶ノ比較ニ於テ、毎年平均夫々三分三厘又ハ六分九厘ノ増長アリ、慥ニ旭日ノ曙光ヲ東天ニ現シタルモノニシテ、以上ノ諸航路力愈々基礎固マリ内外ノ信用ヲ博スルニ至ラハ、必スヤ顯著ナル成效ヲ統計上ニ示スコトナラン歟、

(甲) 内外商取引貿易高ノ比較

| | 外國貿易高 | | 百分比 | |
|--|-------|------|-----|----|
| | 内商取引 | 外商取引 | 内商 | 外商 |

| 明治 | 外國貿易高 | | 百分比 | |
|------|-------------|-------------|-------|-------|
| | 内商取引 | 外商取引 | 内商 | 外商 |
| 二十九年 | 八〇、七七七、一九三 | 一〇三、七二一、〇八六 | 二八・三九 | 七一・六一 |
| 三十一年 | 一一三、九三五、〇七〇 | 一一五、三八九、九七九 | 三三・八一 | 六六・一九 |
| 三十三年 | 一四五、五三三、八一八 | 一九一、八六三、〇九四 | 三三・七 | 六六・七三 |
| 三十二年 | 一六四、六〇〇、五九九 | 二二六、一三三、四三三 | 三三・三三 | 六六・七八 |

(乙) 内外船取扱貿易高ノ比較

| 明治 | 外國貿易高 | | 百分比 | |
|------|-------------|-------------|-------|-------|
| | 内船取扱 | 外船取扱 | 内船 | 外船 |
| 二十九年 | 三三、七二一、七二七 | 二五〇、八〇〇、七八四 | 一一・九〇 | 八八・一〇 |
| 三十一年 | 六八、八〇〇、五四八 | 三〇一、六二九、八一 | 一八・六〇 | 八一・四〇 |
| 三十三年 | 一〇六、三三三、〇二四 | 三三六、〇九五、一六二 | 二四・六四 | 七五・三六 |
| 三十二年 | 一三九、四三七、九五二 | 二八八、八〇五、九五八 | 三三・五六 | 六七・四四 |

然レトモ吾人ハ決シテ今日ノ状態ヲ以テ沾々満足スヘキニ非ス、日本ノ外國貿易ハ年々駁々トシテ増進シ、今ヤ優ニ四億圓臺ニ上レリト雖モ、其實外國商ノ取引高ハ仍ホ六割餘ニ上リ(甲表)又外國船ノ取扱高ハ七割前後ニ達スル(乙表)ニ反シテ内國商ハ僅ニ三割強、内國船ハ唯ニ三割内外ヲ占ムルニ過キス、即チ直輸業ノ利益ハ勿論、旅客貨物ノ運送賃、保険料、倉敷料、口錢等ハ、其ノ十中六七マテ外人ノ囊中ニ吸收セラル

、モノニシテ、内外主客相顛倒スルノ甚シキヲ見ルヘシ、本來ヲ云ヘハ、日本ノ如ク海國トシテ天然ノ形勝ヲ占ムルモノニ於テハ、須ク英國ニ倣ヒ、營ニ自國ノ輸出入品ヲ大約我手ニテ運送スルニ止マラス、尙ホ進テ四隣諸邦ノ貨物ヲ媒介シ、所謂通過貿易(トランシット、トレード)ノ利益ヲモ獲得スヘキ筈ナルニ、實際商權及航海權ノ不振今仍ホ此ノ如シ、國民タルモノ須ク心ヲ此ニ留メ、海外航路ノ擴張ト直輸貿易ノ振作トヲ相併行セシメ、一日モ早ク内外主客顛倒ノ勢ヲ挽回シ、少ナクモ我ハ七割彼ハ三割ノ程度ニ達スルコトヲ期セサルヘカラス、

(三) 定期航海ト不定期航海

海外航路ノ擴張ト直輸貿易ノ振作ト相併行セシムルノ必要ナルハ前述ノ如シトシテ、扱航路ヲ助成スルノ方針ニ關聯シ茲ニ定期航海ト不定期航海トノ利害得失ヲ一應説述セント欲ス、蓋シ定期航海トハ一定ノ航路ニ付テ寄航スヘキ港ヲ定メ、一定ノ時日ニ於テ此間ヲ往復スルモノニシテ、之カ爲ニ噸數、速力ニ制限アル船舶若干隻ヲ用意シ、又倉庫、棧橋、小蒸氣、解舟等海陸ノ接續ニ要スル設備ヲモ整ヘサルヘカラス、故ニ定期

航海ハ船主營業ノ利不利ヲ問ハス、常ニ相當ノ準備ヲ整ヘ豫定ノ定期發着ヲ履行セシムヘキモノニシテ、要ハ社會公衆ノ便利ヲ圖ルニ在リ、其ノ結果トシテ郵便物ハ一定ノ期限ヲ誤ラスニ發着スヘク、旅客ハ一定ノ時日間ニ往復スヘク、又貨物ハ一定ノ時期ニ於テ一定ノ場所ニ聚散スヘシ、即チ運輸交通ノ機關先ツ整備シテ賣買取引圓滑ニ赴キ需要供給亦自ラ平均ヲ得テ、茲ニ始テ商工業ノ發達ヲ期スヘキナリ、而シテ世ノ船主カ定期航海ヲ履行シテ斯ル重責ヲ果サント欲セハ、之ニ要スル經費ハ通例其ノ航海ニ由ル所得ヲ償フニ足ラサルカ故ニ、政府ハ船主ニ對シテ其ノ不足額ヲ補給シ、以テ國家須要ノ航路ヲ助成スルモノナリトス、然ルニ不定期航海ハ全ク之ニ反シ、所謂自由航海ニシテ船舶ノ發着不定ナルハ勿論、必スシモ航路、寄航地ヲ定ムルノ必要ナク、又海陸接續ノ設備ヲ整フルニモ及ハス、唯、利益アレハ往キ利益ナケレハ往カス其ノ撰擇一ニ船主ノ意中ニ存スルノミ、即チ船主一個ノ利益ヲ旨トシテ社會公衆ノ便否ノ如キハ之ヲ顧慮セス、其ノ一國商工業ノ爲メ裨益スル所鮮ナキヤ知ルヘキナリ、我國戰後ノ經營トシテ海外航路ヲ獎勵スルノ急務ヲ感スルヤ、政府ハ曩ニ航海獎勵法ヲ設

ケテ、定期不定期ノ別ナク苟モ造船規程ニ合格スル船舶ヲ以テ海外ニ往來スルモノアラハ、一定ノ獎勵金ヲ給與スル事ト爲シタリシモ、是レ畢竟國家ニ須要ナル海外航路ヲ確立セシムルノ途ニ非サルヲ以テ、爾來政府ハ定期航海助成ノ方針ヲ採リ、歐米航路ノ如キモ一般獎勵ノ範圍内ヨリ脱シテ命令航路ニ指定シ、定期發着ヲ厲行セシムルト共ニ一定ノ年月間一定ノ補助金ヲ與フル事ト爲セリ、要スルニ一國ノ政府タルモノハ、商賣上及外交上ヨリ觀察シテ國家須要ノ航路ヲ指定シ、其間ノ寄航地、航海回數并ニ船舶ノ資格等ヲ制限スルノ代リニ、相當ノ恩典ヲ垂レテ其ノ基礎ヲ鞏固ナラシメ、以テ運輸交通機關ノ整備ヲ努ムルト共ニ富國ノ源タル外國貿易ノ發達ヲ圖ラサルヘカラス、彼ノ往復常ナク一ニ自家ノ營利ヲ目的トスル不定期航海ノ如キハ、格別之ヲ保護獎勵スルノ必要ナカルヘキナリ、

第七 海外航路ト殖民政策

(一) 殖民政策ノ必要

由來我國ノ人口ハ年々非常ノ繁殖力ヲ有シ、世界中人口最モ稠密ナリト聞ユル白耳

義、和蘭ノ次ニ位スルノミ、去ル明治十三四年頃迄ハ三千五百萬ノ同胞ト唱ヘタリシモノ二十三年ニハ四千萬ト稱シ、更ニ七八年後ノ今日ニハ無慮四千五六百萬ニ上レリ、而シテ人口繁殖ノ割合ハ復合法ノ原則ニ從フモノナリト云ヘハ、其ノ五千萬、六七千萬ノ聲ヲ聞クモ亦將ニ遠カラサラントス、然ルニ一方ヲ顧ルニ、國民隨一ノ食料ニシテ又最モ主要ノ物産ナル米穀ハ、例年四千萬石ノ定量ヲ稍ト上下スルニ止マリ、如何ニ耕作ニ注意シ肥料ヲ改善シタリトテ、元來天候溫度等ノ適否ニ依リ豊凶ノ岐ル、モノナレハ、人力ハ到底自然ニ勝ツコトヲ得ス、人口ノ繁殖ニ伴フテ米穀ノ產出高ヲ増スコト能ハサルハ、炳焉疑ヲ容レサル所ニシテ、縱令高價ノ輸入米アリトスルモ、貧者ハ之ヲ購フノ餘力ナク、畢竟人口過殖ノ結果トシテ、糊口ニ窮スル者ヲ頻出シ、或ハ餓孚途ニ接スルノ慘劇ヲ演スルヤモ亦保スヘカラス、故ニ海外殖民ノ事ハ、我國ノ早晚依頼セサルヲ得ル一ノ政策ナリト謂フモ、固ヨリ誇張ノ言ニ非サルナリ、

(二) 殖民ノ利益

殖民ヲ爲スノ途ニ二種アリ、一ハ契約移民ニシテ、約定ノ年月間其地ニ移住シテ、

一種ノ勞働ニ服シ定額ノ報酬ヲ受クルモノナリ、一ハ自由移民ニシテ、天涯萬里何レノ邦土ヲ問ハス開放セル土壤ニ往キ、随意ノ業務ヲ營ミ土着永住スルモノナリ、我カ國民ノ布哇、南洋及南米ニ移住スル者ハ前者ニ屬シ、支那人カ足跡天下ニ普ク、多年辛苦ノ末所在家族ヲ構ヘ支那町ヲ立ツルカ如キハ後者ニ屬ス、而シテ兩者ノ利害得失ノ如キ今茲ニ論スルノ必要ヲ見ス、轉シテ殖民ノ利益ヲ舉示センニ、契約移民ナリ自由移民ナリ其ノ結果タルヤ、即チ過剩窮困ノ人民ヲ、戸口粗ナル沃土ニ配通シテ、晏然生業ヲ營マシムルノミナラス、移民ノ居住スル處ニハ、家庭ヲ造リ村落ヲ成シ、本國トノ運輸交通開ケ本國トノ商賣取引起リ、本國ノ好花客トシテ寄與スル所多ク、終ニハ本國ノ勢威ヲ海外ニ扶植シ、獨立不羈ノ新領土ヲ建立シテ本國ト母子ノ關係ヲ生スルニ至ルヘシ、歐洲列國カ殖民政策ヲ採ルノ目的蓋シ此ニ外ナラサルナリ、

(三) 日本殖民ノ現狀

北海道、臺灣ノ如キ國內殖民ノ狀況ハ、茲ニ説述スヘキ限ニ在ラス、試ニ三十一年末ノ統計ヲ按スルニ、農漁其他雜業ノ爲メ海外ニ移住スルモノ大約四萬七千人、其他

商用ノ爲メ海外ニ在留スルモノ一萬人アリ、而シテ其ノ主要ノ場所ヲ擧クレハ大約左ノ如シ、

- 布 哇 二萬七八千人
- 桑港以北加拿陀方面 五六千人
- 朝鮮 一萬三千人
- 支 那 一千人
- サガレン嶋及浦潮方面 二千六七百人
- 香港以西海峽殖民地 二千人
- 南洋諸島及濠洲 三千六七百人

右ノ内布哇又ハ南洋諸島及濠洲ニ移住スルモノハ、大概移民會社ノ手ヲ經テ、或契約ノ下ニ一定ノ業務ニ服スルモノナレトモ、其他ハ何レモ自由移民ニシテ、多クハ利益ヲ逐フテ其ノ住所ヲ轉スル無賴ノ徒輩ヨリ成リ、國家ノ眼ヨリ觀レハ移民事業トシテ深ク重ク措クニ足ラス、其他ブラジル、ペルー及メキシコノ如キ南米諸國ニモ、移

民事業ノ企畫セラレタルコト再三ナリト雖モ、失敗ニ終フルニ非サレハ前途ノ成功覺東ナキモノ多シ、蓋シ邦人カ概シテ土着心ニ乏ク、動モスレハ懷郷病ニ罹ルノ弊アルハ、殖民政策上最モ憂フヘキ缺點ニシテ、既往ノ歴史ヲ繙クニ「チユートニツク」人種ヲ代表スル英國ハ殖民政策ニ成功シ、「ラテン」人種ヲ代表スル佛國ハ殆ト失敗セリ、而シテ之カ成敗ノ跡ヲ尋ヌルニ、施政ノ當否ニ由ル固ヨリ多シト雖モ、國民ノ氣風性質亦主タル原因タラスンハ非ス、此點ハ我カ官民ノ大ニ注目シ、飽マテ救濟策ヲ講スヘキ所ナリトス、

(四) 海外航路開設ノ影響

人口繁殖ノ大勢上海外殖民ノ已ムヘカラサルハ前述ノ如シ、更ニ個人的ニ觀察スルモ、國內ニ居リ粗衣粗食ニ甘ンセンヨリモ、寧ロ勞力需用ノ多キ海外ノ沃野豊地ニ渡航シテ、一臂ノ力以テ萬金ノ資ヲ獲ルコト、豈ニ男兒ノ快事ナラスヤ、然レトモ移住ニ適スルノ土地、多クハ絶海ノ孤島、蠻土ノ寒村ニシテ往來容易ナラス、縦ヒ一タヒ渡航シタリトスルモ、風土習慣ノ異ナル異域ニ住シ、遠ク故國ノ山河ニ離ル、ハ人情

ノ忍ヒ得サル所亦幾分カ恕スヘキナリ、若シ夫レ自國ノ海外航路開ケテ、同胞ノ支配スル船舶頻々外領ニ出入スルニ至ラン平、自然渡航者ヲ増シ移住民ヲ生スヘキハ勿論外國ノ事情ニ適スルニ從ヒ、異域ヲ履ミ遺利ヲ探ラント欲スル企業冒險ノ精神モ亦大ニ興ルヘシ、思フニ海外航路カ殖民政策ノ先驅ト爲リ、又保護者ト爲ルハ多言ヲ要セサル所ニシテ、近ク台灣占領後ノ例ヲ見ルモ、内地トノ定期航路一タヒ通シテ運輸交通ノ便開クルヤ、男女貧富ノ別ナク移住又ハ行商スル者頓ニ増加シタルニ非スヤ、

第八 日本ノ商港

(一) 商港トハ何ソヤ

我國ニシテ果シテ天賦ノ形勝ヲ利用シ、東南洋及太平洋貿易ノ中心トシテ、四隣諸國ニ出入スル船舶貨客ノ聚散場ト爲ラント欲セハ、先ツ港灣ヲ修築シ陸上ノ設備ヲ整頓シテ、眞ニ商港タルノ資格ヲ具備セシムルヲ急務トス、近ク香港ノ經歷ニ鑑ミヨ、今ヲ距ル五六十年前ニ於テハ、眇乎タル孤島、蕭條タル漁村ニ過キサリシモ、一タヒ英國ノ手ニ歸スルヤ、自由港ノ方針ヲ以テ港灣ヲ修メ港則ヲ敷キ、陸上諸般ノ設備ヲ整

へタルノ結果ハ、乍チ東洋貿易ノ關門ト爲リ、歐米貨客ノ輻湊點ト爲リシニ非スヤ、英語ニ Harbour 及 Port ト云フ語アリ、邦人均ク之ヲ「港」ト譯スト雖モ、Harbour トハ自然地理ニ謂フル海港ニシテ、海岸ノ彎入シ相當ノ面積ト水深トヲ保チ且ツ風波ヲ防クヘキ天然ノ保障アリ、以テ船舶ノ安全碇泊スルニ足ルヘキ場所ヲ謂フ、故ニ寧ロ之ヲ「天然ノ錨地」ト稱スル方、却テ適切ノ意義ヲ表ハスヘシ、然ルニ Port トハ斯ル天賦ノ形勝ノミヲ以テ足レリトセス、之ヲ商賣用ニ相應スル様人工ヲ以テ恰好ノ設備ヲ施シ、船舶貨客ノ聚散スル一種ノ市場ト爲リタル後、始テ此ノ稱呼ヲ附スヘキモノニシテ、本來「商港」ノ意義ヲ有ス、而シテ完全ナル商港トシテ内外貿易ノ鑰鑰ヲ握ラント欲セルモノハ、蓋シ左記ノ諸條件ヲ具有セサルヘカラス

商港ニ缺クヘカラサル條件

- 一、港内風波ヲ避ケ船舶ノ碇泊ニ安全ナルコト
- 二、港内廣クシテ水底深ク數多ノ船舶同時ニ碇泊スヘキコト
- 三、水底ニ岩礁又ハ沙洲ナク底質ハ錨ヲ抓キ止ムルニ適スルコト

四、燈臺其他ノ航路標識並ニ繫船浮標ヲ設クルコト

五、棧橋ヲ架シ波止場又ハ長波止場ヲ築キ船舶ヲ之ニ横附シテ旅客ノ上下貨物ノ積卸ニ便ナラシムルコト

六、港岸便宜ノ場所ニ起重機ヲ据付ケテ重量物ノ揚卸ニ便ニシ又數多ノ倉庫殊ニ保税倉庫ヲ設ケテ貨物ノ保管ニ十分ナラシムルコト

七、港岸ニ幾條ノ鐵道ヲ敷キ之ヲ内地鐵道ト接続シテ海陸運輸ノ聯絡ヲ通スルコト

八、船舶ヲ修繕スル船渠、船架ノ設アルコト

九、石炭、飲用水、食品及他ノ船用品一切ノ供給ニ差支ナキコト

十、港則ヲ設ケテ船舶ノ錨地ヲ指定シ其他港内ノ公安、衛生等ヲ掌ル機關ヲ整備スルコト

右ノ條件中第一號乃至第三號ハ主トシテ天賦ノ形勝ニ胚胎シ、稀ニ是等ノ資格ヲ具フル港ナキニ非サレトモ、宇内商港ノ多クハ風波ノ侵入ヲ避クル爲メ防波堤又ハ制水堤ヲ築キ、又水底ノ障害ヲ排除シ一定ノ水深ヲ保タシムル爲メ絶エス浚渫機械ヲ使用

スルノ常ニシテ、而モ第四項以下ノ條件ニ至テハ、何レモ人カノ施設ヲ待タサルヲ得サルナリ、我國沿岸到處ニ港灣アリト云フモ、是レ自然地理上ヨリ觀察シタル言ニシテ、一モ完全ナル商港ト稱スヘキモノナシ、試ニ横濱、神戸ヲ始メ從前ノ七開港場若クハ新ニ開放セラレタル二十三ノ港ニ付キ、右列示ノ各條件ニ照ラシテ查察セヨ、遺憾ナカラ日本ニハ是等ノ資格ヲ具備スルモノ、未タ一港タモ無之キヲ知ルベシ（尤モ大阪ノ築港、長崎、函館ノ修港ニシテ愈、竣工ヲ告ケ又神戸、東京其他諸開港場ノ築港計畫成リ之ヲ實行シ得タル曉ニハ言フ迄モナク舊觀ヲ一新スヘキニセヨ）

(二) 國港ノ撰定

貿易上ヨリ商港ヲ大別セハ、對外商港ト對內商港ト二種ト爲スコトヲ得ヘシ、甲ハ我カ新舊開港場ノ如ク、外國貿易ヲ主トシテ國民利福ニ關係スル所多ク、又乙ハ內國貿易ノミニ限ラル、不開港場ヲ指スモノナレトモ、其實ヲ云ヘハ是等ノ港ニ出入スル沿岸航船ハ、亦隨意ニ開港場間ニ往來シテ、其地ニ湊合スル海外航路ヲ給養シ其ノ發達ニ資スルコト、恰モ幾多ノ細流カ江河ニ注瀉シテ益、其勢ヲ増スカ如ク、兩者ノ關

係ハ須臾モ離ルヘカラサルモノトス、而シテ茲ニ吾人ノ主張セント欲スルハ、本邦ノ如ク通商立國ノ主義ヲ採リ、大ニ海外港路ヲ振作シテ東南洋及太平洋ノ中心市場ヲラシコトヲ期スルモノハ、須ク對外商港ノ中ヨリ特ニ一二ノ良港ヲ撰定シテ、「國港」(National Port)ト爲スヘキコト是テリ、「國港」トハ商港ニ缺クヘカラサル前文列示ノ諸條件ヲ具備スルノ外ニ、内外貨物ノ聚散上最モ便宜ノ位置ヲ占メ、港内ノ修築、陸上ノ設備其ノ規模俱ニ廣大ニシテ、船舶出入ノ便利遠ク四隣ニ卓越スルモノナラサルヘカラス、按スルニ英ノ倫敦、佛ノ馬耳塞ハ東洋及濠洲貿易ニ對シテ、英ノリヴァプール、佛ノハーヴルハ南北兩米貿易ニ對シテ國港タルノ資格ヲ有シ、又獨ノハムブルヒ及ブレーメンハ東西洋貿易ニ對シテ、米ノ紐育ハ大西洋貿易ニ桑港ハ太平洋貿易ニ對シテ、同ク國港ノ資格ヲ備フルヲ見ル、是等ノ數港ハ何レモ世界第一流國ニ於ケル貿易ノ鎖鑰ヲ握リ、年々出入スル船舶貨物ノ數量ヲ以テ、直ニ其國ノ繁否盛衰ヲトスヘキ程重大ナル國家的ノ關係ヲ有スルモノナリ、若シ夫レ我國ニ於テモ亦此例ニ倣フテ、國港ヲ撰定スルノ必要アリトセハ、主トシテ太平洋貿易ニ對スルモノト、主トシ

テ東洋及南洋貿易ニ對スルモノト、少ナクモ二港アルヲ要ス、而シテ前者ニ於テハ東京又ハ横濱ヲ推シ、後者ニ付テハ大坂又ハ神戸ヲ推スコト其當ヲ得タルモノナラン歟、今ヤ横濱ノ築港ハ既ニ成リタルモ規模過小ノ故ヲ以テ非難セラレ、大坂ハ目下工事中ニシテ、其ノ規模頗ル廣大ナレハ竣成ノ上ハ大ニ見ルヘキモノアラン、其他神戸及東京ハ尙ホ築港計畫中ニ在リ、要スルニ是等ノ四港ハ、内外貿易ノ關係上國港タルノ地位ヲ占ムルモノナルヲ以テ、眞個ニ其實ヲ擧クルヤ否ヤハ、一ニ人事ノ施設如何ニ依リテ定マルヘシ、是レ港民又ハ市民タル者ノ大ニ奮發ヲ要スル所ニシテ、亦政府及議會ニ於テモ宜ク審議輔翼スル所ナカルヘカラス、況ヤ我カ隣邦ニハ上海、香港ノ如キ蒲潮、大連、天津ノ如キ良港ヲ控エ、何レモ將來ニ對スル經營措畫ヲ怠ルモノニ非サルヲヤ

(三) 海陸運輸ノ聯絡

日本ノ港灣ハ未ダ一トシテ完全ナル商港ノ資格ヲ具備セサルハ前述ノ如シト雖モ、就中内外ノ通商ヲ阻碍シ社會ニ不利不便ヲ醸スノ最モ大ナルハ、海陸運輸ノ聯絡ナキ事、即チ海上ノ船舶ト陸上ノ鐵道ト更ニ聯絡ヲ通セサル事ニ若クハナシ、今ヤ我國ノ

鐵道ハ線路ノ延長無慮三千六百哩ニ亘ルモ、其ノ大部分ハ縱貫鐵道ニシテ横ニ港門ト接續スルモノ甚々稀ニ、海陸聯絡ノ要義ノ如キハ殆ト之ヲ度外ニ置ケルヤノ感ナキ能ハス、是レ創業ノ際先ツ内地ノ開發ヲ主トセルニ由ルト雖モ、海國ノ鐵道ハ沿岸ノ門戸ト接續スルニ非サレハ、折角ノ利器モ其用ヲ完ウスヘカラサルノ理ヲ看過セラレタルハ遺憾ノ極ナリ、又港内ノ現狀ヲ觀ルニ、多クハ棧橋及波止場ノ設備ナク、偶之カ設備アルモノニ於テモ、極テ僅少ナルカ若クハ頗ル不完全ナルヲ以テ、船舶ハ入港スルモ陸岸ニ横付スルノ便利ヲ得ス、港ノ中央ニ投錨ノ儘、旅客ハ總テ小蒸氣又ハ舢板(通船)ニ依テ送迎セラレ、貨物ハ大半舢舨ニ積移シタル上船積又ハ陸揚セラル、ノ順序ナルヲ以テ、爲ニ無用ノ時間ヲ費シ多少ノ危険ヲ伴フハ數ノ免レサル所ニシテ、或ハ荒天ニ會シ荷役荷捌ニ差支フルカ爲メ、定期發着ノ時日ヲ誤リ延テ公私ノ損失ヲ醸スカ如キ亦珍ラシカラサル次第ナリ、

之ヲ横濱、神戸ノ實際ニ徴セン乎、甲ハ百四十五萬ノ人口ヲ有スル東京ヲ後ニ控エ、乙ハ六七十萬ノ商估ノ住メル大阪ヲ左ニ擁シ、何レモ日本ノ最大市場ニ對スル殆ト唯

一ノ門戸タルニモ拘ラス、東京市ト横浜港トノ間ニハ、未タ一條ノ「レール」ヲモ敷設シラレス神戸ニハ一ノ鐵道棧橋アレトモ、此便ニ依リ大阪市ニ出入スル貨物ハ一日僅ニ六七十噸ニ過キサルノ有様ニシテ、兩市、兩港ノ間ニハ殆ト海陸ノ連絡ヲ欠キ、相互間ノ運搬ハ十中八九舁舟便(小蒸氣ニテ曳船スルモノ)ニ依ルノ習慣ト爲レリ、今日日本郵船會社ノ取扱ニ屬スルモノノミニテモ、京濱間ハ一年六七十萬噸、阪神間ハ二十五六萬噸ニ上ルト云フ、時事新報記者ハ會テ痛快ナル筆鋒ヲ揮フテ、此ノ舁舟便ノ不便不安ニシテ且ツ不經濟ナルヲ指摘シテ曰ク、

東京横濱間にては少なくも曳船を三度變へざるヘカサ、即ち東京市中より永代橋までを第一とし、永代橋より羽田までを第二とし、羽田より横濱までを第三として、其間にも若し潮の干満に遭へば市中の橋々に喰止めらるゝ事あり、又船底間へて動かさる事あり、春先より秋末までは東南の風にて東京灣内曳船には困難する事少なからず、總て一年間全く曳船を爲し得る日は凡そ二百日なる由、斯く曳船に困難したる揚句漸く本船に移して神戸に廻送すれば、之を大阪に運ぶに鐵道の便を借る能はざる爲め、曳船にて矢張同様に苦心し、而も此間の事情は一層甚しくして西南の風吹けば天保山にて覆没の難を受くること頻々なる爲め、近來海上保險會社之が保險を謝絶するもの多しといふ。

舁舟に依りて陸地を往復するか爲め、荷役の時間を延ばし滞港日數を多くし、一日走れば數千金若くは數萬金の收入あるものか、終日港内に滞泊しなから安閑

として唯、舁舟の往復を俟ち、當に收むべき利益を收めずるに費用は更に減せざるか故に、船主に取りては莫大の損耗なり、即ち之を數に積れば、神戸横濱間を二十四時間に必ず航行し得る船ありと假定せんに、此船の荷役双方の港にて四十八時間つゝを要すすれば、片道一航海七十二時間にして往復百四十四時間即ち六日を要する勘定なれども、若し荷役の時間を半減するを得ば四日にて済む可く、尙ほ又四半減して十二時間なれば三日にて済み、更に兩港の荷役六時間つゝにて完了するを得ば二日半に往復するを得可く、從て此間に四隻の船を要したるものは二隻にて事を辨す可し、世人動もすれば航業者を責むるに専ら其船舶の速力を以てし、一時間に一節半節の増減を論ずと雖も、船の速力如何に大なればさて、港の設備不完全にして荷役或は旅客の送迎に暇取らば、航行中急きたる速力も途中の寄港若くは兩極港の爲め無益に費消されて、船主は寧ろ損害を受け、旅客貨物は何等の利益をも蒙らざる可し、是れ港灣設備の完全せざるに依り直接に起る損得の勘定なり云々、

同記者ハ更ニ又本土ノ首尾ト九州及北海道トノ接續點ナル馬關、津輕兩海峽ニ付テ、連絡交通ノ不充分ナルヲ論シ、左ノ如ク言ヘリ

津輕の海峽も馬關の海峽と同じく國道の聯絡點にして、其完全せざることは、兩極の鐵道に直接の損得あるのみならず、國の爲めにも永久の損害少なからず、例へば今日沖撃りなる爲め三箇所に碇泊す可き通船が、一箇所六時間の荷役時間を要するものとすれば、都合十八時間を要する譯なれども、岸着にして鐵道の停車場より直に乗船し得るとすれば、一箇所一時間にして事足るべく、即ち一回の通船は十五時間を節し得る事と爲り、此間には室蘭より札幌へ往復して尙ほ餘りある可し、日本の中央を貫きて北海と九州とを聯絡せしむる要所の通航すら、其不完全なる斯の如き仕儀なれば其他の事情は推して知るへし。

思フニ日本ノ港灣カ、第一ニ船ト陸トノ聯絡ヲ欲キ、一旦旅客貨物ヲ上陸セシメタル

後ニ於テモ、海岸ヨリ内地ニ通スル直接ノ鐵道ナキヲ以テ、如何ニ多クノ時間ヲ徒費シ公私一般ノ經濟ヲ傷フヘキヤ、實ニ察スルニ餘アル所ニシテ、這般ノ缺點コソ文明進歩ノ大障礙トシテ、一日モ早ク吾人ノ排斥スヘキモノト謂フヘシ、

(四) 自由貿易區ノ設置

港灣ヲ修築シ陸上設備ヲ整頓シテ眞ニ商港ノ資格ヲ具備セシメ、加フルニ四隣諸國ノ中心市場トシテ東京、橫濱、大阪、神戸ノ四港中ヨリ「國港」ヲ撰定スルノ必要ナル事ハ上來之ヲ縷述セリ、而シテ此ノ國港撰定ト同時ニ尙ホ一事ノ勸説スヘキモノアリ、即チ「自由貿易區」(Free Zone)ヲ設置スルコト是ナリ、自由貿易區トハ保税倉庫ノ制度ヨリ一段進化シタルモノニシテ、保税倉庫ニ於テハ輸入手續未済ノ貨物ニ對シテ一定ノ期限内倉庫ニ保管シ其間輸入税ヲ徵收セサルノ便宜ヲ與フルモ、該貨物ニ手工ヲ加ヘ若クハ荷造ヲ變史スルコトヲ許サス、然ルニ「自由貿易區」ナルモノハ一種ノ免稅區域ニシテ、其ノ指定セラル、區域内ハ全然稅關ノ管轄以外ニ獨立セシメ、其地ニ出入スル貨物ハ或ハ他ノ方面ニ再輸出スルカ爲メ或ハ内地ノ市場ニ輸入ノ準備ヲ爲スカ

爲メ、該區域内ニ於テ更ニ精製スルトモ又ハ唯、包裝ノミヲ變更スルトモ一ニ貿易商ノ隨意ニシテ、消費ノ爲メ内地ニ輸入セラル、貨物ノ外ハ一切關稅ヲ賦課セサル特典ヲ與フルモノナリ、今日世界ニ於テ此ノ制度ヲ採用スルハ、獨逸ノハムブルヒ、ブレイメン及ステツチン、丁抹ノコツペーヘーゲン、白耳義ノアントウエルプ、以太利ノゼノア等ニシテ、中ニモ獨逸ノ外國貿易カ近來動モスレハ英佛ヲ凌駕シ、ハムブルヒ、ブレイメン兩港ノ隆昌前古比ナク一躍シテ宇内第一流ノ大貿易港ト爲リタルモノハ、本ト獨逸官民カ各般ノ事業ニ就テ進取ノ主義ニ熱中スルノ致ス所トハ云ヒナカラ、「自由貿易區」ノ新制度ヲ採用シタルコト亦重ナル一因タラスンハアラス、佛國ノ如キモ輒近此ノ大勢ニ驅ラレ、從來巴里ノ一部ベレー市ニ於テ葡萄酒及酒精ニ對シ此ノ制度ヲ行ヒ市稅免除ノ特典ヲ與ヘ居リタルニ満足セス、昨年(一八九九年)ノ議會ニ於テマルセーユ、ハーブル及ホルドーヲ代表スル議員等ハ連署シテ一建議案ヲ提出シ、國內ノ商港及都府ニ外國輸入品ニ對スル「自由貿易區」ヲ設ケ、向後二十年間地方官廳又ハ商業會議所ニ該區域設置ノ權能ヲ附與セラレントヲ主張シタリト云フ、我國

ノ如キ前文叙述シタルカ如ク、天賦ノ形勝ヲ利用シ太平洋及東南洋貿易ノ焦點トシテ南北亞米利加ヨリ東南洋ニ又亞細亞濠洲諸國ヨリ米國ニ輸入スル貨物ノ中繼所ト爲リ所謂通過貿易ノ利益ヲ収メント欲スルモノハ、國內主要ノ商港ニ須ク此ノ制度ヲ施行シ外國貿易品ノ爲メ特ニ輸出入ノ便利ヲ開クヘキハ亦多言ヲ要セスシテ炳然タリ、我カ政府カ今回新ニ税關假置場法ヲ制定シ、横濱、長崎ノ兩港ニ於テ自由貿易區ニ類似スル便宜ヲ與フルニ至リタルハ、大ニ吾人ノ意ヲ得タルモノナリ(第二十三章第九ノ十五及十六參看)

第二章 商船と海軍

第一 海上權ノ要素

今ヲ距ル二百年前、英國ノ政治家兼航海者「サーウオルター、ラレー」颯言シテ曰ヘラク「海上權を握る者は能く商權を掌にすへし、世界の商權を掌にする者は能く世界の富を左右すへし、已に世界の富を左右し從て世界其者をも左右すへきなり」と、是レ海上權ノ價值ヲ發揮シ得テ遺憾ナシト謂フヘシ、抑、海上權トハ海上ヲ制壓スル權力ヲ云ヒ、其ノ効力ノ廣大無邊ナルハ實ニ「ラレー」氏ノ言ノ如クニシテ、世界列國海軍政略ノ目的トスル所ハ、此ノ權力ヲ建設シ之ヲ維持シ且ツ助長スルニ外ナラサルナリ、而シテ殊ニ吾人ノ注意スヘキハ、海上權 (Sea power or Command of the sea) ナルモノハ廣キ意義ヲ有シ、單ニ武力ヲ以テ海上ヲ制壓スル軍事的勢力ヲ云フニ非ス、更ニ通商航海業ノ如キ平和的勢力ヲモ包含スヘキコト是ナリ、換言セハ海軍 (Navy) ト商船 (Mercantile Marine) トハ、此ノ權力ヲ形造クル兩要素ニシテ、兩者相待ツニ非スンハ海上權ノ圓滿ヲ望ムヘカラサ

ルナリ、

通商貿易ノ事ハ前章ニ於テ殆ト説キ悉クセリ、茲ニ筆ヲ轉シテ先ツ海軍ノ任務及其ノ勢力ヲ擴張維持スヘキ程度ヲ論シ、次ニ海上權ノ兩要素カ如何ニ痛切ナル關係ヲ相互ノ間ニ有スルカラ述ヘ、更ニ兵商併ヒ進ムノ主義ニ依テ、此ノ關係ヲ事實ニ現ハスノ方法ニ説キ及ホサント欲ス、

第二 海軍ノ任務

(一) 平時ノ任務

軍備ノ本旨ハ内、國民ヲ保護シ外、國家ノ獨立ヲ維持スルニ在リ、海軍ノ任務モ畢竟之ニ外ナラス、國民カ年々海軍ノ爲メ負擔スル所ノ租稅ハ、國家及人民ノ爲メ生命、財産ノ危險ヲ担保スル保險料ト思惟シテ可ナリ、而シテ海軍ノ任務ナルモノハ必スシモ戰時ニ限ラス、平素事ナキノ日ニ、國際上ノ地歩ヲ固クシ通商航海ノ利益ヲ收メメントスルニハ、殊ニ平時ノ任務ニ重キヲ措クヘシ、是レ陸軍ト本來ノ性質ヲ異ニスル所以ナリ、茲ニ平時任務ノ一斑ヲ列擧セハ左ノ如シ、

一、國家ノ權利ヲ維持スル事

開港場出入ノ船舶ニ關稅、噸稅又ハ他ノ入港稅ヲ課シ、港則又ハ檢疫規則ヲ設ケテ港内ノ秩序、衛生ヲ維持シ、水上警察ヲ置テ港内ノ公安ヲ掌ラシメ、不開港場ニ妄ニ外國艦船ノ出入スルヲ禁シ、又締盟國ノ間ニ交戰ノ事アルトキ嚴正局外中立ヲ守ル等ハ、獨立國タルモノ、當然保有スヘキ權利ニシテ、若シ之ヲ侵害スル者アルトキハ、獨立國ノ軀面上之ヲ詰責處分シ、必要アレハ軍艦ノ援助ヲ以テモ、飽マテ是等ノ權利ヲ維持セサルヘカラサルナリ、

二、國家ノ利益ヲ保護スル事

通商、航海、魚獵、移住等ノ事業ハ、國家ノ生存ニ欠クヘカラサル事業ナリ、然ルニ海洋若クハ外國領海内ニ於テハ、本國法律モ畢竟恃ムニ足ラス、生命財産ノ安全ヲ依頼スヘキハ、獨リ本國ノ軍艦アルノミ、是レ各國カ其ノ商船航路ノ通スル場所及臣民ノ移住スル土地ニ、軍艦ヲ派遣シテ警備ニ任セシメ、又遠洋漁業ノ行ハル、區域ニ、軍艦ヲ巡邏セシメ以テ自國漁民ヲ保護スルト共ニ、外國漁船ノ密獵ヲ取

縮ラシムル所以ナリ、

三、外交政略上ニ援助ヲ與フル事

外交談判ノ際軍艦カ公使ノ後楯ト爲リテ、或ハ示威運動ヲ試ミ、暗黙ノ中樽組ノ間ニ功ヲ奏セシムルノ常ナルハ人ノ能ク知ル所ナリ、

四、公館及居留民ヲ保護スル事

外國ニ事變アレハ、其地ニ駐泊スル警備艦(警備艦在ラサルトキハ本國ヨリ直ニ軍艦ヲ派遣スヘシ)ヨリ直ニ水兵ヲ上陸セシメテ、公使館、領事館并ニ居留民ヲ保護シ、以テ一ハ駐在官ヲシテ運動其宜ヲ得セシメ、一ハ居留民ヲシテ安心自ラ恃ム所アラシムルハ、是レ亦吾人ノ常ニ耳ニスル所ナリ、

五、海難ヒ罹リ又ハ行衛不明ナル内外艦船ヲ救助又ハ搜索スル事

是レ萬國ニ共通ナル軍艦ノ義務トモ謂フヘキモノニシテ、斯ル實例ハ帝國軍艦ニ付テモ往々聞ク所ナリ、

六、海圖ヲ刊行シ并ニ水路告示ヲ發布スル事

海軍省ニ水路測ヲ置、沿海、港灣等ヲ實地測量ノ上、海圖ヲ刊行セシメ又水路告示ヲ發布セシムルハ、各海軍國ノ務ムル所ニシテ、之カ爲メ内外ノ軍艦及商船ハ、航海上其ノ恩惠ニ浴スルヤ極メテ大ナリ、

七、海上氣象ノ觀測、陸地嶋嶼ノ發見等學術上ノ探究ニ裨益スル事

(二) 戰時ノ任務

戰事海軍ノ目的ハ、優勢ノ艦隊ヲ以テ敵ノ艦隊ヲ打破リ、同時ニ敵ノ商船ヲ捕獲シ航路ヲ杜絶シテ、全然海上ノ權力ヲ占ムルヲ主眼トス、然レトモ敵國海軍ノ強弱ニ由リテハ、或ハ攻勢ヲ採リ進テ攻撃スルノ策ニ出ツル乎、或ハ守勢ヲ採リ退テ沿岸海港ヲ防禦スルノ術ニ出ツル乎、是レ戰略上ノ問題ナルヲ以テ俄ニ判定スヘキニ非ス、今優勢ノ艦隊ヲ備フル邦國ニ於テ、戰時海軍ノ任務トスル所ヲ括約セハ大要左ノ如シ、

一、一旦緩急ニ臨メハ軍艦ヲ以テ巧ニ敵ノ舉動ヲ偵察シ外交上及戰略上機先ヲ制スル事
日清戰役ノ當初、我カ海軍ハ逸早ク陸戰隊ヲ京城ニ上陸シ、次テ仁川ヲ根據トシテ、絶エス對手國ノ動靜ヲ偵察謀報シ、以テ本國ニ在ル外務及海陸軍當局者ヲシテ、

着々成算アラシメタリ、

二、敵ノ艦隊ヲ打破リ或ハ之ヲ根據地ニ封鎖シテ海上權ヲ握ル事

是レ海軍主要ノ目的ニシテ、日清戰役ノ經歷ニ徴スルニ、豊島沖ノ初陣ハ、敵ヲシテ我カ海軍ノ勢威ニ畏縮シテ退守策ヲ採ルニ至ラシメ(我ハ朝鮮海ヲ制壓ス)、次ニ黄海ノ大海戰ニ於テ、敵海ヲ制壓シテ勝敗ノ大勢ヲ定メ、更ニ威海衛ヲ封鎖シテ敵ヲ降服スルニ至ラシメタリ、

三、敵ノ商船ヲ捕獲シ航路ヲ杜絶スル事

敵ノ艦隊殲滅セラル、モ、海上貿易ニシテ依然タル以上ハ、仍ホ敵ノ勢力ヲ持續スヘキヲ以テ、是レ亦一掃セサルヲ得ス、日清戰役ノ際我國ニハ巡洋艦不足ナリシヲ以テ、敵ノ商船ヲシテ外國々旗ノ下ニ運送ヲ繼續セシメタリシハ遺憾ナリキ、

四、敵ノ砲臺ヲ攻落シ軍港要港ヲ占領スル事

敵艦隊ノ主力ヲ打破リ海上貿易ヲ一掃セハ、海軍ノ能事畢レリト謂フモ可ナレトモ、尙ホ必要アラハ進テ砲臺ヲ陷レ防禦港ヲ占領スルコト容易ナリトス、即チ黄海ノ

戰後 難ナク大連、旅順、威海衛ヲ攻落占領シタルカ如シ、

五、陸兵ヲ敵地ニ護送シ其ノ陸揚ヲ掩護シ且ツ背後ノ聯絡ヲ鞏固ナラシムル事

是レ海軍ノ補助的任務ナレトモ、敵海制壓ノ後尙ホ陸地ニ侵入スルノ必要アラハ、海軍ハ陸軍ノ爲メ先ツ適當ノ上陸點ヲ撰ヒ、兵馬、糧食、武器其他一切ノ需用品ヲ積載スル運送船ヲ護送シ、之ヲ陸揚スル際ニハ見張ヲ嚴ニシテ、萬一不意ノ襲撃ヲ受クルコトナカラシメ、次テ陸兵ト協力シテ、海岸要塞ヲ攻落シ且ツ本國ト聯絡ヲ固クシテ、陸兵ヲシテ背後ノ憂ナカラシムル等、其ノ任務ヤ甚タ重シ、日清戰役ノ際、陸兵ノ旅順ヲ陷レ威海衛ヲ占領シタルハ、甚タ嘉スヘキモ、之ト同時ニ海軍ノ護送掩護等ノ力亦大ナリシコトヲ忘ルヘカラス、

六、自國ノ商船ヲ保護シ航路ヲ安全ナラシムル事

戰時ニ於テモ自國ノ通商航路ヲ維持スルハ極テ必要ナリ、殊ニ我國ノ如キ島國ニ於テハ、英國ト均ク外國トノ運輸交通一ニ海ニ依ルヲ以テ、此ノ任務ハ一層緊切ヲ覺ユヘキナリ、日清戰役ノ當時ニハ、一ハ我國ノ遠洋航路未ダ開ケス海上ノ交通徹々

タリシト、一ハ清國カ絶對的ノ守勢ヲ採リ黃海々戰ノ後彼ノ軍艦皆港内ニ屏息シタリシトニ依リ、我國ノ商船ハ別ニ軍艦ノ保護ヲ仰クノ必要ヲ感スルニ至ラス、郵船會社上海航路ノ如キハ、該港及其ノ通路ノ局外中立地ナルヲ利用シテ安全開通シタリシト雖モ、今日ハ狀勢全ク一變セルヲ以テ、一タヒ開戰ニ會セハ、商船保護ノ任務ハ、海軍ノ大ニ意ヲ用フル所ト爲ルヘキヤ必セリ、

七、中立國ノ商船ヲシテ嚴正中立ノ義務ヲ守ラシムル事

嚴ニ局外中立ヲ守リ交戰國ノ一方ヲ利スル行爲アルヘカラサルハ、中立國ノ義務ナリ、然ルニ中立國ノ商船カ、私カニ戰時禁制品又ハ戰時禁制人等ヲ搭載スルハ古來其例甚ナシトセス、日清戰役中、我カ軍艦カ英船高陞號ヲ轟沈シ、益生號ヲ捕獲シ、又佛船「シドニー」號ヲ搜索シテ中立違反ノ疑アル米人二名ヲ拘引審問シ、其他米佛獨ノ商船若干隻ヲ前後臨檢シタルハ、即チ此ノ目的ニ外ナラサルナリ、

第三 海岸封鎖ノ影響

前項海軍戰時ノ任務ハ、優勢ノ艦隊ヲ所有セル場合ニ付テ説述シタルモノナレトモ、

若シ右ニ反シ我カ艦隊微力ニシテ敵ト戰テ敗衄スルカ、若クハ最初ヨリ港内ニ屏息シテ出テ、戰ハサルカ、兎ニ角敵ヲ防禦スルノ力ナキトキハ如何ン、言フ迄モナク海上ノ權力忽チ敵ノ手ニ落ち、敵ハ先ツ便宜ノ岬嶼ヲ占領シ根據ヲ定メテ海岸封鎖ノ策ヲ採リ、或ハ港灣ヲ扼シ航路ヲ杜絶シテ通商航海ノ利ヲ妨ケ、或ハ鐵道ヲ破壞シ電線ヲ切斷シテ運輸通信ノ便ヲ絶チ、隱現出沒我ヲ苦メ、囊中ノ鼠ト同一ノ苦境ニ陥ラシムヘシ、夫ノ一部ノ人士カ想像スル如ク、陸兵ヲ輸送シ來テ我カ境土ニ侵入スルカ如キハ、素ト絶海ノ島國ニ對スル戰略ノ得タルモノニ非サレハ、斯ル拙策ハ決シテ敵ノ取ラサル所ナラン歟、

斯ノ如ク敵ハ海岸封鎖策ヲ探ルモノト假定シ、其ノ影響如何ンヲ考察スルニ、吾人ハ實ニ悚然トシテ懼レサルヲ得サルモノアリ、請フ少シク之ヲ陳ヘンニ、抑、今ノ日本ハ鎖國時代ト異ナリ、主トシテ内外貿易ノ利ニ依リテ生存シ、四千六百萬ノ同胞カ生活ニ必須ナル衣食ノ原料ハ、其實外國ニ仰クモノ多ク、第一ニ國民生命ノ綱ト賴ム米、麥、豆類ヲ始メ、砂糖、石油等ノ如キ日用品ノ輸入高ハ、年々増加ノ一方ニテ、鶏卵、肉類、

食鹽ノ如キサへ、今日ハ舶來品ヲ仰クコト少ナシトセス、又衣服ノ材料タル綿花、羊毛等ハ殆ト皆輸入ニ依リ、内地ノ生産ハ國內需用ニ對スル大海ノ一滴ニモ足ラスト云フ、今突然海上ノ通路ヲ絶タレ運輸交通ノ便全ク失ヒタリトセヨ、其ノ苦痛困弊ノ程想像ニ餘アル所ニシテ、畢竟國民ハ如何ニシテ生命ヲ持續スヘキヤ、又翻テ輸出ノ方面ヲ顧ルニ、生絲、製茶、絹物、綿絲、石炭等ノ如キハ、年々何千萬圓ノ商賣ヲ爲シ、富國ノ主要ト謳ハル、モノナルニ、全ク運輸ノ途ヲ鎖サレテハ空ク生産地ニ堆積シ、爲ニ富源ヲ涸渇スルノミナラス、幾多ノ職工勞夫ハ立ロニ其ノ生業ヲ失ヒ糊口ニ窮スルニ至ルハ當然ノ事ナリ、

尙ホ近キ例ヲ首府ノ東京ニ求メン乎、都下百數十萬ノ人民カ日々需用スル米、鹽、砂糖、油類、薪炭、木綿、石炭、材木等ハ、十中八九水運ノ便ニ依リ遠近ヨリ運ヒ來ルモノナルニ、今不祥ノ言ナカラ我海軍ノ力足ラスシテ、東京灣若クハ其ノ附近ヲ敵艦隊ニ封鎖セラレ、出入ノ途全ク絶エヨランニハ、市民ハ果シテ幾月間飢寒ニ耐ヘ得ヘキヤ、往年米國海軍卿ハ其ノ年報中ニ海防不充分ノ結果トシテ紐育港ノ被ルヘキ災害ヲ指摘シテ曰

ク、「内外貿易の焦點と爲り國財の收藏所たる紐育港か、防備薄弱なるか爲め一たび敵艦隊に侵入せられなば、其の影響果して如何、貿易は乍ち絶滅に歸すべく、通信は全く停止すべく、渡船は往來を絶つべく、市場は閉鎖すべく、終に鐵道の運搬交通も廢止して二百五萬の住民に供給する食物の獲路を失ふに至るへし、而して敵の要求する所は巨億の償金のみならず、港内艦船の收容と云ひ邦土の割讓と云ひ、飽迄不當の要求を爲すも未だ知るへからず、斯る場合に臨んでは如何に精銳百萬の陸兵あるも、前示不幸の結果を避くること能はず、徒らに海岸を睥睨し奔命に疲るゝわらんのみ」ト、是レ移シテ以テ均ク海岸ニ瀕スル我國ノ都府商港ヲ警ムヘキモノナリ又英國ハ夙ニ外國貿易ヲ以テ國ヲ立テ、「三ヶ月間海外の交通を絶たるゝときは國民擧て餓死すへし」トハ、居常英人ノ腦裏ニ刻スル警語ニシテ、食料ノ輸入ト海上權ノ維持トノ關係ハ、國民死活ノ岐ル、問題トシテ寤寐ノ間モ忘ル、コトナシ、是レ亦英國ト國柄ヲ等ウスル日本國民ノ夙ニ着眼スヘキ要點ナラスヤ、

第四 海軍擴張ノ程度

海軍力戰時平時ニ別ナク重大ナル任務ヲ有スルコトハ、前文ニ述フル所ノ如シ、思フニ強大優勢ノ艦隊ヲ海上ニ浮戈セシムルトキ、ハ自カラ國際間ニ重キヲ置カレ、國民亦海外ニ在リテ肩幅廣キ感ヲ爲シ、諸般ノ關係ニ於テ裨益スル所多キハ絮說ヲ須キス、且夫レ戰爭ヲ未發ニ防キ國際ノ平和ヲ維持スルハ、職トシテ列國ノ勢力相平均シ互ニ罅隙ニ乘スルノ機會ナキニ由ルモノニシテ、泰西ノ語ニ「平和を欲せば先づ軍備を修めよ」ト云フモ此意ニ外ナラサルナリ、日清戰役後帝國カ一躍シテ歐米強國ノ伍伴ニ列シ、所謂外交ノ檜舞臺ニ上リタルモノナレハ、我カ海軍ノ勢力ハ彼等強國ト平均ヲ保ツヲ目度トシテ、少ナクモ東洋及太平洋ノ海上ニ優勢ヲ占ムルニ足ルヘキ程度マテ、之ヲ擴張維持セサルヘカラス、此ノ十數年來列國ハ何レモ財貨ヲ吝マスニ汲々海軍ノ擴張ヲ勉メ、彼レ五隻ヲ造レハ我レ十隻ヲ造リ、彼レ二十隻ヲ造レハ我レ三十隻ヲ造ルト云フノ有様ニシテ殆ト底止スル所ヲ知ラス、試ニ列國軍艦表ヲ見ルニ(卷末附録 第廿三參看)我カ海軍擴張案(第一期及第二期計畫)完成後ノ勢力ハ大約二十二萬噸ニシテ、僅ニ英ノ七分一、佛ノ三分一、露ノ二分一ニ過キス、尤モ獨、伊、米ニハ殆ト肩ヲ比フル迄ニ至リタレトモ、獨逸ハ皇帝陸

下自カラ海軍擴張ニ御熱心ニシテ、陸軍ト均ク海軍ニ於テモ一等國ニ進マサルヘカラストハ陛下ノ毎々公言セラル、所、現ニ本年ノ議會ニ提出セル大擴張案ノ如キハ列國ヲ喫驚セシメタルニ非スヤ、米國ニ至テハ西班牙戰爭ノ結果トシテ益々軍艦増製ノ計畫アリ、本年度ノ豫算ニ依レハ新製艦費ノミニテ三億六千萬圓ニ上ルト云ヘハ、是レ亦永ク歐洲強國ノ後ニ落ルモノニ非サルヤ知ルヘキナリ、其他最モ畏ルヘキ兇器ト稱シ威海衛ニ於テ空前ノ奇功ヲ樹テタル水雷ノ種類ニ於テモ、我國ハ迥ニ他ノ國々ヨリ劣レリ、次ニ我國ノ爲メ直接ノ痛宰ヲ感スヘキ列國東洋派遣艦隊ニ付テ、彼我ノ現在勢力ヲ對照スルニ左ノ如シ

列國東洋艦隊表 (明治三十二年十二月現在)

| 國名 | 艦種 | 戰闘艦 | 海防艦 | 巡洋艦 | 報知艦 | 砲艦 | 合計 |
|----|----|--------|-------|--------|-----|--------|--------|
| 英國 | 三隻 | 三六、四〇〇 | 一 | 二七、五〇八 | 一 | 九四、七九三 | 八八、〇六九 |
| 露國 | 二隻 | 一九、〇八六 | 六 | 四六、六七一 | 九 | 九七、三五七 | 七五、四八三 |
| 米國 | 一 | 一〇、二八八 | 八、〇四三 | 一一、七三三 | 三 | 一五、〇八三 | 四五、一六七 |

| | | | |
|--------|--------|--------|-----------|
| 獨 | 佛 | 伊 | 日 |
| 國 | 國 | 國 | 本 |
| 一 | | | 四 |
| 七、三九 | | | 五、八〇五 |
| | | | 一〇、一八、〇四四 |
| 五 | 五 | 六 | 一六 |
| 二六、四八八 | 二六、四三六 | 三三、一三三 | 七二、二七六 |
| | | | 二 |
| | | 五 | 二四七 |
| 一、七九〇 | 四、六二八 | 六 | 九、三三八 |
| 八 | 一〇 | 六 | 四三 |
| 三五、五九七 | 三一、〇五四 | 三三、一三三 | 一三七、九三四 |

右六強國ノ内、東亞ノ方面ニ利害ノ關係最モ深キ者ハ、言フ迄モナク英露二國ニシテ、從テ二國ヨリ派遣スル軍艦ハ、比較上他ニ一頭地ヲ拔クノ理ヲ知ルヘシ、而シテ二國ハ決シテ現在ノ勢力ヲ以テ満足スルモノニ非ス、着々増派ノ計畫アル由ハ毎々聞ク所ニシテ、今後我カ新造軍艦ノ續々回航スルニ至ラハ、彼等亦勢力ヲ増スニ勉ムヘキハ火ヲ賭ルヨリ明ナリ、蓋シ未來ノ敵ハ俄大老耄支那ノ如キモノニ非スシテ、亦必スシモ一國ヲ相手トスルモノト限ラス、或ハ二國三國ニモ對抗スヘキ場合ナキニ非サレハ、我國ハ常ニ之ニ應スルノ用意ヲ整フルコト肝要ナリ、歐米強國ハ已ニ幾十百隻ノ軍艦ヲ所有シ、一旦東洋局面ニ風雲ノ變アラハ、本國若クハ最寄ノ海鎮ヨリ軍艦ヲ分遣シ、出來得ル限リ勢力ヲ注キテ、飽迄死命ヲ争フヘキコト理ノ當然ナルヲ以テ、我カ海軍ヲ擴張維

持スルニ方テモ、勿論此邊ノ餘裕ヲ見積ラサルヲ得ス、單ニ目前ノ東洋艦隊ヲ日安トシテ、海上ノ優勢ヲ占メント欲スルモ能ハサルナリ、今ヤ第一期、第二期ノ擴張案ニ依リテ、遠カラス二十二萬噸ノ海軍ヲ得ヘシト雖モ、將來四圍ノ形勢如何ニ由リテハ、更ニ第三期、第四期ノ擴張案ヲ立ツル必要ヲ見ルヤモ測リ知ルヘカラス、苟モ帝國民タルモノハ我カ國柄ニ鑑ミ、十分ノ決心ト覺悟トヲ以テ、海軍擴張ノ爲ナシハ如何ナル租稅ヲモ忍ビ、平時戰時ヲ問ハス、常ニ東洋及太平洋ノ海上權ヲ握ルノ必要ヲ、深ク膠裏ニ刻ミテ片時モ忘ルヘカラサルナリ、

第五 商船と海軍ノ骨肉的關係

軍艦ハ武裝儼然トシテ霸氣凛々タル勇士ノ如ク、商船ハ花顏盛粧ヲ凝テセル嬋媚タル少女ノ如シ、由來海軍ト商船トハ、兄妹ノ間柄ノ如ク骨肉的關係ヲ有スルモノニシテ、海軍ハ商船ヲ視ルコト猶ホ愛妹ヲ視ルカ如ク、憐愛扶翼ヲ旨トセサルヘカラス、又商船ハ海軍ニ對スルコト恰モ仁兄ニ對スル如ク、飽迄尊敬信賴セサルヘカラス、而シテ海軍カ商船ノ後援ナクンハ眞ニ其ノ成功ヲ望ムヘカラサルト均ク、商船モ亦軍艦ノ保護ナク

ンハ其ノ安全ヲ保スヘカテサルハ、最モ見易キ道理ニシテ、列國政府カ動モスレハ海上貿易ト海軍費トノ比例、又ハ商船ト軍艦(殊ニ巡洋艦)トノ割合ヲ計算シテ、海軍擴張ノ資料ニ供スルモ、其ノ旨意畢竟此ニ歸セスンハアラス、故ニ或ル論者カ「海軍の必要は商船の存在と共に生し其の消滅と共に失ふ」ト謂ヘルモ、亦一種ノ見解トシテ首肯スヘキモノナリ

要スルニ商船ト海軍ノ骨肉的關係ヲ有スル事ハ、識者ノ既ニ道破セル所ニシテ固ヨリ絮説ヲ要セス、著者ハ茲ニ海軍社會ノ「オーソリティー」トシテ、内外海軍社會ニ最モ推重セラル、マハン、コロム兩將軍ノ提言ヲ抄録シテ自説ヲ確メント欲ス、

夫ノ「海上ノ權力史論」ヲ以テ著名ナル米人マハン海軍大佐ハ、同著書中ニ海上權、兩要素カ併進セサルヘカラサル所以ヲ論シテ曰ク、

海運業の振張を闢らすして、海軍は果して能く永久に持續するを得べきや、之を歴史に徴するに、單純なる軍事的海上權は、夫の佛國ルイ十四世時代の如く、專制君主の力に依りて或は一時建設せらるゝを得へしと雖も、斯る海軍は宛も根なき草木と同様

にして、一時美觀を呈するも日ならず枯凋し去らんのみ、要するに海軍は通商航海の振張に伴ふて、始て自然に且つ健全なる發達を爲すべく、而も唯、此の方法に頼りて其の基礎鞏固なるを得べきなり、

又英國兵學ノ泰斗トシテ仰カル、コロム海軍中將カ、海戰ノ性質ヲ論スル一節ニ曰ク、凡そ邦國の貿易發達して、其國富力の大部分は商業に發し、其國船舶か能く大海遠洋を保制するの地位に達するに非されば、真正の戰は起ることを得ず、是れ我かエリサヘス女王の時代(千五百六十年代)以前に在りては、真正の海戰未だ曾て成立せざる所以なり、

第六 兵商併進ノ手段

(一) 要旨

海軍ハ仁兄ノ如ク商船ハ愛妹ノ如シ、一國海上權ノ要素タル兩者ノ骨肉的關係ヲ事實ニ現ハサント欲セハ、須ク長短相賴リ緩急相扶クルノ精神ヲ以テ、步調ヲ揃ヘテ併進ムノ手段ヲ取ラサルヘカラス、然ルニ平素是等ノ用意ヲ等閑ニ附シ、一朝事アルニ臨テ咄嗟ノ間ニ、提携扶助ノ方法ヲ講スルカ如キハ事已ニ晚シ、或ハ海軍當事者ト商船

所有主トノ間ニ意思ノ融會セサルコトアラン、或ハ折角商船ヲ徵集スルモ海軍ノ用途ニ適セサルモノアラン、或ハ商船ノ乘組員ハ其儘軍役ニ服スルヲ忌避スル者アラン、則チ斯ル故障ノ爲メ、當路者胸中ノ計畫ハ満足ニ執行スルコトヲ得ス、臍ヲ嚙テ後毎スルモ亦應ニ及ハサルヘキナリ、蓋シ健全ナル海事思想ヲ普及シ、有事ノ日之ヲ利用セントスルニハ、一面ニ國民ノ氣風ヲ陶冶シテ、深ク海軍ヲ信任シ之ニ依頼セシムルト共ニ、一面ニハ海軍豫備ノ制度ヲ起シテ、平素豫メ有力ノ船舶ト有爲ノ船員トヲ準備シ、戰時ニ召集スヘキ海軍ノ淵源ヲ涵養スルニ若カス、而シテ吾人ノ見ル所ヲ以テセハ、我國目下ノ事情ニ應シ先ツ取ルヘキ手段ハ、左ノ三策ニ外ナラサルヲ信ス、

一、海軍ノ平時任務ヲ發揮スル事

二、海軍豫備船及豫備員ノ制度ヲ起ス事

三、商事ト海軍トノ關係ヲ親密ナラシムル事

(二) 海軍ノ平時任務ヲ發揮スル事

海軍ノ目的ハ、平和ノ綱絶エテ勝敗ヲ一戰ニ決スル時ノ用意ニ止マラス、寧ロ國

力ノ平均ヲ保テ永ク平和ヲ持續シ、國家ノ權利ト利益トヲ助長スルヲ以テ主眼ト爲スヘシ、今日世界列國カ海軍ヲ擴張維持スルノ精神モ畢竟此ニ在リ、若シ戰時ノ用意一方ニ偏シテ平時ノ任務ヲ疎ニスル者アラハ、是レ國民ノ希望ニ反スルモノト謂フヘシ、思フニ海軍ノ平時任務ヲ發揮シテ國民ヲシテ洽ク海軍ノ効力ヲ理會セシメ、益々海軍ヲ信任シ嗜好セシメ、海軍志望者ヲ多ク輩出セシメ、國會ヲシテ海軍擴張案ニ協賛セシムルカ如キハ、海軍長官ノ力ムヘキ唯一ノ政略ニシテ、輿論ニ依テ事ヲ決スル代議政治ノ今日ニ於テハ、殊ニ然ラサルヲ得サルノ感アリ、而シテ海軍ノ平時任務ト云ヘハ、前文ニ述ヘタルカ如ク諸種アリト雖モ、公館及居留民ノ保護、又ハ通商航海ノ安全ヲ圖ルヲ以テ最モ重ナルモノトス、從來朝鮮ノ釜山、仁川、支那ノ天津、上海、厦門ノ如キ數港ニハ、常ニ砲艦ヲ派遣シテ警備ニ任セシメ、又毎年漁獵期ニ至レハ、一隻ノ軍艦ヲ以テ北海ヲ巡邏セシムルノ例アリト雖モ、吾人ノ希望スル所ハ、軍艦ノ次第ニ増加スルト共ニ此種ノ任務ヲ擴張シ、現ニ幾千ノ同胞往住スルノミナラス旭日旗ノ翻々灣頭ニ翻ル左記ノ方面ニ向テ、少ナクモ一二隻ノ軍艦ヲ絶エス巡邏或ハ定繫セシメ

以テ保護警備ノ任ヲ完ウセシメラル、ニ在リ、尤モ之カ爲メ經費ヲ増加スヘキハ理ノ當然ナレトモ、是等ノ土地ニハ、帝國領事館ヲ始メ幾千ノ居留民アリ、且ツ内外船舶常ニ往來シテ本邦トノ貿易高年々幾百萬乃至幾千萬圓ニ上ルコトナレハ、之カ保護警備ノ任ニ當ル軍艦ノ經費ハ、固ヨリ國民ノ甘シテ負擔スヘキ所ナリ、且ツ夫レ軍艦警備ノ効力ハ冥々ノ中ニ慮外ノ潛勢力ヲ有スルモノニシテ、之カ爲メ日本居留民ハ安全ニ營業スルヲ得ルノミナラス、自然日本人ヲ信用シ日本商品ヲ嗜好シ、彼我ノ商賣ヲ繁榮ナラシムヘキヲ以テ、結局得ル所ヲ償フテ餘アリ、終ニハ國益ヲ増進スルニ至ルコトヲ忘ルヘカラサルアリ、

- 一、布 哇 日本居留民概數 日本トノ貿易高概算
- 二、桑港方面 三萬人 五六十萬圓
- 三、タコマ、シヤトル及ウアンクローヴァー方面 六千人 七千萬圓
- 四、浦鹽及サガレン嶋方面 三千人 二百萬圓
- 五、香港乃至新嘉坡及マニラ方面 三千人 五六千萬圓
- 六、濠洲東南岸 四千人 三百萬圓

(三) 海軍豫備船及豫備員ノ制度ヲ起ス事

(甲) 海軍豫備船

戰時帝國ノ海軍ハ、戰艦、甲鐵巡洋艦等ヲ以テ主戰艦隊ヲ編成シ、正々堂々ノ陣ヲ張テ敵ニ對抗スヘキハ勿論、又海防艦、砲艦等ヲ以テ沿岸港灣ノ警備ニ當ラシムヘシト雖モ、更ニ偵察、見張、通信、運送、工作、商船保護、病傷者輸送等ノ如キ補助的任務ノ爲ニ、多數ノ艦船ヲ要スヘキコト明ナリ、然ルニ是等ノ任務ニ對シテ不足ナキ様平時ヨリ海軍ノ艦船ヲ充分ニ保有スルコトハ、國家經濟上素ト容易ナラサル所ニシテ亦決シテ策ノ得タルモノト謂フヘカラス、左レハ平素事ナキノ日、通商貿易ニ從事スル所ノ快速堅牢ノ船舶ヲ、海軍豫備ニ編入スルノ制度ヲ設ケ、一朝事アレハ直ニ之ヲ徵用シテ前線ノ任務ニ充ツルノ方法ヲ立ツルハ、一舉兩得ノ政策トシテ、効力ト經濟トヲ兼ヌルモノナラント思惟ス、

論者或ハ曰ハン、今日政府ヨリ保護ヲ受クル汽船會社ノ船舶ハ、戰時又ハ事變ノ際直ニ徵用ニ應スルノ義務アリ、其他一般船舶ト雖モ徵發令ニ依テ徵發使用スルヲ得ヘシ、今更海軍豫備船ノ制度ヲ起スノ必要ナカラント、吾人答ヘテ曰ク然ラス、今日政府ヨリ某々汽船會社ニ保護ヲ與フルモノハ、何レモ遞便補助^{ハスメルサアシデ}ヲ旨トシ、遞信省ト會社ノ間ニ契約ヲ結フモノニシテ、軍用ニ應スルノ事ハ固ヨリ會社ノ主タル義務ノ一ニ相違ナシト雖モ、海軍省ト汽船會社トノ關係ハ間接ニシテ、平素無事ノ日ニハ兩者ノ意志十分疏通セルヤノ憾アリ、故ニ非常ノ際商船カ海軍ノ後援タル實ヲ舉クルニ於テ、又海軍カ戰時平時ヲ問ハス商船ノ良友トシテ之ヲ保護指導スルノ重任ヲ盡クスニ於テ、果シテ遺憾ナキヲ得ヘキ乎蓋シ疑ナキヲ得ス、即チ平素ノ用意最モ肝要ナル所以ニシテ、完全ナル豫備制度ヲ設クルハ、事ノ萬全ヲ期シ海上權ノ圓滿ナル發達ヲ希望スルニ外ナラサルナリ、

論者又曰ハン、海運業ハ元來營利的事業ナリ、之カ機關タル船舶ハ輕便ニシテ費用ノ少ナキヲ尙フ、殊更ニ巨金ヲ投シテ武裝的ノ汽船ヲ製造スルニ及ハスト、吾人亦答

ヘテ曰ク何ソ夫レ然ラン、試ニ思ヘ、内國鐵道ヲ敷設スルニ方リ、軍用ノ一事常ニ觀察ノ要点ニシテ、亦國有鐵道主張者ノ重ナル論據ナルニモ拘ラス、外國トノ關係一層痛切ナル海外航路ニ付テ、爭テカ軍事上ノ觀察ヲ不問ニ附スヘケンヤ、且夫レ日本ノ如ク四面環海、外國トノ關係一ニ海ニ賴ルヘキ國柄ニ在リテハ、獨、佛ノ如ク軍事鐵道ヲ左程重ンスルニ及ハス、寧ロ英、米ニ倣フテ商事ヲ主トシ敢テ不可ナカルヘキモ、商船ノ航路ニ至テハ然ラス、一時一刻モ外交及軍事ノ觀念ヲ離ルヘカラサルナリ、是レ各國政府カ海運業ヲ保護スルニ、單ニ郵政ノ整理、通商航海ノ獎勵ノ如キ利益一方ヲ目的トセス、更ニ軍備ノ後援テフ戰時利用ノ點ヨリ之ヲ保護スル所以ニシテ、殊ニ代用巡洋艦(又假裝巡洋艦ト稱ス)ノ如キハ、偵察、通信、敵船ノ捕獲、味方船ノ保護等、當ニ軍艦ノ爲スヘキ任務ヲ果スト共ニ、元來自ラ衛リ自ラ防シノ餘方アルヲ以テ他ノ軍艦ヲシテ本務ニ一意ナラシムル利益アリ、今ヤ海軍擴張ノ結果トシテ、快速精銳ノ艦隊ヲ編成セラル、モ遠キニアラス、從テ是等ノ艦隊ト運動ヲ與ニスヘキ速力快捷ニシテ相當ノ兵器ヲ備フヘキ、代用巡洋艦ノ資格ヲ具有スル船舶ノ必要ヲ感スルハ

論ヲ埃タサル所ナリ、此議ハ曾テ海軍當路者間ニ行ハレ、目下着々計畫中ニ在ルコトナラン、而シテ之ト同時ニ内國主要ノ汽船會社ニ於テモ、世界ノ大勢ニ應シ今後東洋及太平洋ノ航海權ヲ握ランカ爲ニハ、必スヤ斯ル資格アル新式優良ノ旅客船ヲ要スルコト疑ヲ容レヌ、歐米列國カ夙ニ此種ノ船舶ヲ製造シテ其ノ特長ヲ利用スルニ努メ、近來相競テ之ヲ増製スルノ風アルモノ亦偶然ニ非サルナリ、

本年英國工學協會ノ總會ニ於テ、「グラスゴー」大學造船科教授ジョン・ハイル博士カ、「商船ノ海軍補助任務」ト題シ講演シタル論文ハ、斯途ニ取り好參考ト爲ルヘキヲ以テ、其中二三ノ要點ヲ左ニ抄録スヘシ、

過る米西の戰爭中、米國海軍省ハ商船を巡洋艦として武装し、戦闘線内に入らせしめたる結果を見れば、純然たる軍艦と拮抗するに足ることを證明せり、
一等巡洋艦は艦内に除砲臺の設かれども、商船は之を設備することを得ず、然れども俯付大砲ならば充分之を搭載するを得べきが故に、其の積量及甲板の廣大なるを利用せば、二等巡洋艦に比し一層多数の大砲を備ふべく、從て寧ろ優勢を占むるものと謂ふべし、
船舶の舷側（軍艦ならは鐵帶を施すべき部分）に細長き凹所を刻み、平時は木片にて之を埋め、一旦戦闘の準備を爲すに臨めば木片を取去り、其の代りに鋼鐵板を嵌入すべし、
戰時の用途に應ずる商船の資格に付て注意すべき要點は、即ち如何なる船舶を問はず、其の浮沈力と復元力

とは難破の際船体の沈没せんとする傾向に對し均く著大の抵抗力を呈するものなるを以て、結局大砲及砲手に十分の保護を與ふる以上は、軍艦に比し全然同等ならずとも、左程劣らぬ勢力を具備せしむるを得べき事是なり、

依テ著者ノ私案ヲ提出スルコト左ノ如シ、

- (イ) 政府ハ新ニ海軍豫備船規程ヲ設ケ豫備船ヲ區別シテ
 - (一) 敵艦隊ノ偵察、味方艦隊間及味方艦隊ト陸地トノ通信、味方船ノ保護、敵船ノ捕獲等巡洋艦代用ノ任務ニ當ルヘキモノ
 - (二) 兵員、軍需品又ハ文書ノ運送（運送船）、艦船及兵器ノ修理（工作船）、醫療及藥品ノ準備供給（病院船）等ノ任務ニ當ルヘキモノ
- 右ノ二種ト爲シ、該二種ノ船舶ニ就テ、船體ノ構造、機關部ノ保護、速力、防水區劃ノ數、石炭ノ積載量、兵器、旗章、海軍検査官ノ検査等ニ關スル要件、并ニ乗組員ノ若干ハ海軍豫備員又ハ海軍豫備役軍人ヲ充ツル等ノ件ヲ詳細規定スヘシ、

(備考)

代用巡洋艦と爲るべきものは、全般の構造に付て海軍検査官の検査に合格するものにして、甲板には砲座を固定し、速射砲及機關砲若干門を搭載し得べき様充分堅牢にし、又彈藥庫を設くべし、推進機は

水線以下に在り、機關は水線以下又は水線上餘り隔らざる處に在りて石炭庫を以て保護せられ、速力は航速速力十五節以上、防水區劃の數は可成多く、一區劃に停水するも他の區劃に由て依然船体が浮泛せしむる様にし、石炭積載量は平均十節の速力にて五六千海里を航続するに足るべく、旗章は普通の商船旗と稱し、異なるを可さず、其他乗組員は戰時艦長以下の要職は海軍々人を以て補充せらるべきも、大部分は固有の船員を其儘に據置くこと利便なるを以て、平素の乗組員中少なくとも三分一位は海軍豫備員を以て充つへし、

(ロ) 海軍省ニ海軍豫備船名簿ヲ備へ國內ノ船舶中前示二種ノ豫備船ト爲スヘキ資格ヲ有スルモノヲ撰定シ、夫々種類ヲ分テ登録シ、同時ニ船主ニ其旨ヲ通知シテ、豫メ戰時ノ用途及徵用ニ應スル準備方ヲ心得シメ置クヲ要ス

(ハ) 船舶ノ改善ハ戰時ニ應スル準備ノ爲ノミナラス、平和的通商航海ノ爲ニモ亦最も希望スヘキ所ナルヲ以テ、在來ノ優等船舶ニシテ修繕改造ヲ要スル時ニ至ラハ、海軍省ヨリ船主ニ交渉シテ、商賣上ニ差支ナキ限り軍用ニ利便ナラシムル目的ヲ以テ工事ヲ加ヘシメ、又新造船ヲ注文スル者アル時ハ、三十一年七月發布海軍省令第七號(總噸數七百噸以上の船舶の製造に着手する者若しくは購入する者は)ノ精神ヲ擴充シ、工事ニ着手スル前海軍省ヨリ船主ニ交渉ノ上、可成戰時ノ用途ニ都合ヨキ様製造セシムルコ

トヲ勉ムヘシ、例ヘハ大砲ヲ搭載セシムル爲メ甲板上ノ構造ヲ堅固ニスルコト、燃料石炭ヲ以テ機關部ヲ保護スルコト、若クハ石炭糧食等ノ軍需品ヲ海上ニ於テ軍艦ニ直接積換ヘ得セシムル特別裝置ヲ設クルコトノ如キハ、船舶製造ノ初メ相當ノ注意ヲ加フレハ格別ノ面倒ナク又費用ヲモ掛ケスシテ能ク成就スルヲ得ヘシト云フ、而シテ代用巡洋艦ノ資格ヲ有スル船舶ニ至テハ、比較上高額ノ製造費ヲ要シ、且ツ航海費モ割合多分ナルヲ以テ、是等ノ船舶ニ對シ海軍省ハ、夫ノ郵便契約ノ下ニ遞信省ヨリ支給スル補助金ノ外ニ特別ノ保護ヲ與フルコト英國ノ例ニ倣フノ必要アラシク歟、

(乙) 海軍豫備員

海軍豫備船ノ制度ヲ起スニ付テハ、該船舶乗組員ノ幾部分ハ、必スヤ海軍的ノ訓練アリ自重ノ風、自衛ノ力ニ富メル者ナラサルヲ得ス、且ツ海軍ノ方面ヨリ觀察スルモ、海軍々人ノ員數ハ戰時海軍ノ艦船及諸部隊ニ要スル人員ニ充タサルノ例ニシテ、從來ノ經驗上、豫備役及後備役ノ軍人ハ、疾病其他ノ故障ノ爲メ戰時ノ召集ニ應スルコト能

ハカル者多ク、又戦時ニハ多少ノ死傷者ヲ生スルコト當然ナルニ由リ、之カ補充ノ急要ヲ感スヘシ、加フルニ海岸防禦ニ關スル諸般ノ役務ニ付テモ、之ニ當ルヘキ素養アル人員ヲ要スヘキナリ、英國ノ如キハ既往ノ經驗上ヨリ戦時海軍ノ人員ヲ補充スルニハ、少ナクモ常備員ノ半數ヲ下ラサル豫備員ヲ平素養成シ置クノ必要ヲ認メタリト云フ、即チ是等ノ需用ニ應スルカ爲メ、茲ニ海軍豫備制度ヲ設ケ、商船ノ船長、運轉士、機關士、水火夫、並ニ廣ク舟子、漁夫ノ如キ海事ノ心得アル沿海居住ノ壯丁ヲ、海軍豫備員籍ニ編入シ、一定ノ訓練ヲ施シテ一種ノ有力ナル豫備團隊ヲ組織スルコト最モ急務ナリト信ス、歐米諸海國ニ於テハ、戦時補充ノ準備トシテ夙ニ斯ル組織ヲ立テ、英米二國ハ志願主義ニ依リ、當人ノ任意軍籍ニ編入スル者ヲ採用シテ所要ノ豫備員ヲ養成スルモ、大陸諸國ハ強制主義ヲ採リ、一般ニ商船乗組員及沿海住民ノ海軍服役義務ヲ規定シテ、何時ナリトモ所要ノ人員ヲ召集スルヲ得ヘキ様ニス、蓋シ其ノ國柄ニ從テ主義ヲ異ニスルモ、相當ノ海軍的訓練ヲ施シテ有力ナル豫備團隊ヲ造ラント努ムルハ一ナリ、我國ニ在リテハ未タ曾テ此種ノ組織ナク、只僅ニ東京商船學校生徒及卒業

生ニ對スル海軍豫備規定アルノミ、思フニ商船ニ付テハ、郵便契約又ハ徵發令ニ依リ軍用ニ應スルコトヲ強制スルヲ得ヘキモ、之カ乗組員ニ對シテハ、何等ノ制束法モ無し、一旦非常ノ時ニ臨テ之ヲ召集スルモ或ハ忌避スル者ナキヤヲ保セス、尤モ奉公ノ念深キ帝國國民タル者ハ、危ニ臨テ之ヲ避クルモノニ非サルハ吾人ノ萬々信スル所ナレトモ、元來訓練ナキ人員ハ烏合ノ衆ニ均シキヲ奈何セン、今ノ時ニ及テ前示海軍豫備船ノ制度ト相待テ、海軍豫備員ノ組織ヲ設ケ、所謂海軍ノ後援タル兵源ヲ綽々涵養スルノ急要亦多言ヲ須ササルナリ、

依テ著者ハ之カ方案ヲ立ツルコト左ノ如シ、

(イ) 政府ハ新ニ海軍豫備員法ヲ制定シ、商船々長以下海技免狀ヲ有スル高等海員及水火夫等ノ如キ下級海員、公私商船學校、水産學校及工業學校(造船科及機關科)ノ卒業生ニシテ身軀健全、技能優良ノ者ハ、今後海軍豫備員ニ採用スルコトヲ定メ、之ヲ第一種海軍豫備員ト爲シ、且ツ其ノ官等、任免、服役年限、操練、召集、服制、俸給、手當、恩給等ニ關スル要件ヲ詳細規定スヘシ、

(備考)

官等ハ海軍佐尉官、准士官、及下士卒相當ト爲シ、任用法ハ甲種船長ニシテ拔群ノ履歴ヲ有スル者ハ特ニ少佐ニ初任シ(從軍履歴ハ資格ヲ豫考ス)、水夫長ニシテ優等ノ者ハ特ニ一等下士ニ初任スル等、此際被擧動ノ方針ヲ以テ可成優待スルコト肝要ナルヘシ、又操練ハ可成實習ヲ旨トシ、毎年適當ノ時期ヲトシ、軍艦又ハ砲台ニ於テ海軍ノ砲銃、機關、水雷等ニ關スル一般ノ訓練ヲ施スヘシ(海員カ下船上陸シテ新ナル職務ヲキル期ノ)、其他ノ事項ハ本邦ノ現狀ヲ基トシ、外國ノ事例ヲ參照シテ適宜之ヲ定ムルヲ可トス、

(ロ) 第二種豫備員トシテ、各海軍鎮守府管區内ニ居住スル舟子、漁夫ノ如キ海事ノ心得アル壯丁ニシテ、海軍徵兵ノ抽籤ニ洩レタル者ニ對シ、海軍豫備員タルノ義務ヲ定メ、第一種豫備員ニ準シテ其ノ採用、服役年限、操練、進級、手當、恩給等ニ關スル詳細ヲ規定スヘシ、之ニ就テ各鎮守府ハ、所管ノ軍艦又ハ海兵團ニ於テ、最初相當ノ期間内一通リノ操練ヲ爲シ、其後年々召集シテ實習セシムヘク、而シテ當人ノ素養、慣習ニ從ヒ、砲兵、水雷兵、機關兵等適宜科ヲ分テ其ノ系統ヲ追ハシムルノ必要モアルヘシ、

(ハ) 海軍省及各鎮守府ニ海軍豫備員名簿ヲ備ヘ第一種豫備員ハ海軍省備付ノ名簿ニ、第二種豫備員ハ所管鎮守府備付ノ名簿ニ登録シ、海軍演習等ノ際ニハ、全部又ハ一

部ヲ召集シテ艦隊ニ乗組マシムヘシ、而シテ代用巡洋艦以下ノ海軍豫備船、水雷敷設隊、海岸望樓、燈臺、水難救濟所其他戰時特設ノ部隊ニハ、必ス是等ノ豫備員ヲ使用スルコト、爲シ、且ツ必要アレハ軍艦ノ乗組員ニモ臨機補充スヘキモノトス、

(四) 商事と海軍との關係ヲ親密ナラシムル事

世ニ軍備ト經濟ト互ニ利害ヲ異ニスト思惟スル者アリ、是レ甚シキ謬見ニシテ、軍備薄弱ニテハ平和ヲ保チ獨立ノ面目ヲ立ツルヤ難ク、商工業繁昌セスンハ財源欠乏シ武力ヲ維持スルコト亦均ク難キニ非スヤ、一國海陸軍ノ長官タル者ハ、平素國際間ノ關係上國民ノ權利ト利益トヲ保護シ助長スルヲ以テ先要ノ目的ト爲シ、世ノ實業家タル者、常ニ此ノ目的ニ適應シ此ノ目的ヲ果スニ不足ナキ程度ノ軍備ヲ維持スルニ咨ナラサルトキハ、忽チ海岸ヲ封鎖セラレ内外ノ航路ヲ杜絶セラルヘク、其ノ塗炭ノ苦痛ヲ最初ニ感スルモノハ實ニ商工業者ナルヲ念ハ、豈ニ翻然自ラ悟ル所ナクシテ可ナランヤ、英國ノ商業會議所カ常ニ海軍擴張ノ首唱者トシテ、輿論ヲ喚起シ政府ヲ刺激

スルハ如何ニモ當然ノ次第ナルニ、我國ニ於テハ封建武士ノ遺習尙ホ存シ、軍人ト云ヘハ世俗ニ縁ナキモノト自信シ、世人亦軍人ヲ待ツニ敬シテ遠サクルノ傾向アルハ、抑々全國皆兵ノ主義ニ違反スルモノニシテ、斯ル弊風ハ一日モ早く根本ヨリ芟除セサルヘカラサルナリ、

去ル三十年十二月ノ事ナリキ、日本經濟會カ、我國最初ノ新造甲鐵艦富士、八島二艦回航員ノ歡迎會ヲ帝國「ホテル」ニ催シタル際、著者ハ同會ノ盛舉ヲ贊シテ寄稿シタル一篇中ニ、海外ノ事例ヲ引用シタル左ノ一段アリ、

試ニ之を列國の事蹟に徴せむ乎、英國の商業會議所は常に海軍擴張の首導者を爲り、一方には時の政府を刺衝し一方には國民の輿論を鼓舞して倦まず、又近年來海軍同盟會を設け、朝野知名の紳士、軍人、豪商を之が會員に充て、普く制海權の必要を一般衆庶に鼓吹し其運動極て快活なるが如き、獨帝が毎期の國會に海軍擴張案を提出せしめ、殖民政策の助成、海外貿易の獎勵を以て之が理由を爲し、又南米に居留する獨商等に當船局並に海軍高等會議を置き、商船及漁業に關する一切を管理せしめ、又海軍勤務令中に「司令長官及び艦長は貿易を保護すへし且自己の見聞に係る事實にして自然佛國通商上の利益に關し貿易の擴張に必要なるものあるときは之を佛國航海者に譲示すへし」の一章を規定せるが如き、露國の製艦案提出の際紳商自ら進て資金を義捐し、又同國有名の海運獎勵會には先帝親く總裁に當らせ玉ひ、次て海軍元帥アレキセツフ

親王之が名譽の職を承けられたるが如き、又米國の海軍水陸部に於て、外國商港の形況を調査編纂し、之を貿易商にも頒布するの計畫あり、而も國內の商船學校は公然海軍官より練習用の機器圖書を借用するが如き蓋しその重なるものにして、尙ほ這般の類例は枚擧するに遑なし、其他政治的若くは經濟的の關係ある海外方面に遠く艦隊を派遣し、又巡洋艦代用船、海軍豫備員の制度を盛に施行するが如きも、列國皆軌を一にする所なり、

亦以テ海外諸國ニ於テ、海軍ト商事トノ關係カ、如何ニ深ク且ツ密ナルカヲ知ルニ足ルヘシ、著者ハ更ニ篇末ニ至リ希望ノ一端ヲ述ヘテ曰ク、

今日軍艦と通商航海の機關たる商船との關係を見るに、何れも擴張の高潮期に在りて、一は遠からず二十餘萬噸に上り、一は今年中には四五十萬噸をも數ふへしと云ふ、双方自家の經營に忙殺せられて亦他を顧るの閑なきもの、如くは雖も、余輩を以て之を見れば、今の時こそ眞に兩者兄妹の關係を實にし、互に補翼扶持するの方針を立つべき好機會なれ、戦時或は事變に臨て始めて唯唯事を處し、平素無事の日に相互の關係を等閑視するは、蓋し智者の業にあるまし、其の折角咲き初めたる花も或は美菓を結ふこと能はざらむ乎を恐るゝなり、

吾人ハ世ノ實業家ト海軍々人ト互ニ昵近シ、帝國海軍ト一般商事ト相密接センコトヲ希望スル中ニモ、先ツ第一着ニ國內ノ船主ト海軍當路者トノ意思十分ニ疏通シテ、相頼リ相扶クルノ方法ヲ立テ、所謂帝國海事ノ健全ナル發達ヲ圖ルノ急要ナルコトヲ主張セント欲ス、蓋シ日清戰役後ノ帝國海軍ハ、其ノ進歩驚クヘク、造船、造兵ノ術ヲ

除ケハ一モ外國人ノ手ヲ假ラスシテ自ラ經營シ、一萬數千噸ノ一等戰艦モ何ノ苦モナク日本軍人ノ手腕ニテ繰繰セラレ、殆ト自主獨立ノ體面ヲ具備スルニ至レリ、我國ノ海運業モ亦此ノ期間ニ長足ノ進歩ヲ呈シ、歐、米、濠ノ三大航路ノ如キ既ニ開設セラレタリト雖モ、是等ノ航路ニ用ユル船舶ノ船長機關長等ノ要職ハ何レモ外國人ノ手ニ歸シ、而モ優良ノ内國海員頗ル不足ヲ感スルノ現狀ナルヲ以テ、其ノ進歩發達ノ程度ニ於テ到底一步ヲ海軍ニ讓ラサルヲ得ス、由來國家ノ事業タル海軍ハ、私民ノ營業機關タル商船ニ比シ、諸般ノ點ニ於テ一日ノ長タルヘキハ當然ノ事ニシテ、特ニ紀律、訓練ノ二點ニ付テハ、商船ハ常ニ海軍ヲ師トシ就テ學フノ必要アルヲ信ス、日本水夫ノ不行跡ハ往々聞ク所ニシテ、延テ旅客、荷主ノ感情ヲ傷フヤモ知ルヘカラス、是レ勿論船長ノ懲戒權ヲ以テ抑制スヘキ事ナリト雖モ、初ヨリ船内ノ紀律肅然トシテ上長ノ恩威行ハレ、下級海員舉テ從順ノ途ヲ守リ、一船和氣洋々タルノ美觀ヲ示スニ若カス、又船員カ普通ノ技能ノ外、海軍的ノ訓練ヲ積ミ號令嚴明ニシテ坐作進退ノ整々タルハ最モ望マシキ所ニシテ、爲ニ船務ノ秩序立チ直接間接ニ裨益スル所亦尠ナカラサ

ルヘシ、加フルニ外國航路増設ノ結果トシテ、内外ノ交通益々頻繁ナラントスルノ今日ニ方リ、紀律アリ訓練アル海員ヲ要スルコト一層痛切ナルニ於テヲヤ、其他内國船主カ新ニ僱聘セント欲スル外國船長ノ引見、若クハ外國ニ注文シタル新造船ノ監督方ヲ、其地駐在ノ帝國海軍武官ニ依託スルノ途ヲ開クモ亦今日ニ處スル一ノ方便ニシテ、是等ノ點ニ付テハ恰モ外國駐在領事カ、本國商人ノ爲メ諸種ノ利益ヲ與フルカ如クナランコトヲ切望セサルヲ得ス、又遞信省内ニ高等海事會議ヲ置キ、民間ニモ有力ナル海事團體ヲ組織シテ、海運海軍ノ實地問題ニ關シ調査研究スルノ必要モアルヘシ、要スルニ海軍當路者ハ愛妹保護ノ精神ヲ以テ、商船ノ利益ノ爲メナラハ本務ニ差支ナキ限リ船主ノ依託ニ應シ、尙ホ進テ通商航海上ノ利益ト認ムルモノアラハ、之ヲ海商及航海者ニ通示スルノ方針ヲ採ラル、コト英佛ノ如クニシテ、始テ兵商併進ノ主義ヲ貫徹スヘキナリ、

第二篇 船舶

第二章 船舶と法律

第一 法律的觀察ノ要旨

近來本邦海運業ノ發達スルニ從ヒ、船舶、海員ニ關スル法令ノ發布セラル、モノ夥シ、加フルニ客年六七月ノ交、改正條約及修正商法ノ實施ニ伴フテ、海事ニ關スル諸般ノ法令モ亦一時ニ改新セラレタリ、蓋シ法令ノ整備スルト共ニ施行手續ノ益、錯綜複雜ヲ來スハ、固ヨリ已ムヲ得サル所ニシテ、今ヤ船舶ニ關スル日本國法ノ制定ハ、茲ニ一段落ヲ告ケタリト謂フヘシ、且ツ夫レ船舶ナルモノハ、本來國際法上ノ重要ナル問題ニシテ船舶ノ地位、行動、管理、處分等ニ就テハ、夙ニ萬國公認ノ原則アリテ存ス、日清戰役後我國ノ外交ト云ヒ商賣ト云ヒ、國際間ノ關係益々頻繁ニ赴キ、就中海外航路伸張ノ結果ハ、恰モ歐米諸國ト直接ニ土壤ヲ接スルト同一ノ觀ヲ呈スルニ至リタレハ、日本船舶ト國際法トノ關係ハ層一層切實ヲ感スルニ至レリ、則チ茲ニ國法及國際法ノ兩面ヨリ船

船舶ヲ概觀セント欲スルモノ豈ニ偶然ナランヤ、

第一節 國法上ヨリ觀察シタル船舶

第一 日本船舶ノ資格

日本船舶トハ何ツヤ、三十二年三月發布ノ船舶法ハ、第一條ニ日本船舶タル資格ヲ限定シテ左ノ四種ト爲ス、

- 一、日本ノ官廳又ハ公署ノ所有ニ屬スル船舶
- 二、日本臣民ノ所有ニ屬スル船舶
- 三、日本ニ本店ヲ有スル商會社ニシテ合名會社ニ在リテハ社員ノ全員、合資會社及株式合資會社ニ在リテハ無限責任社員ノ全員、株式會社ニ在リテハ取締役ノ全員カ日本臣民ナルモノ、所有ニ屬スル船舶
- 四、日本ニ主タル事務所ヲ有スル法人ニシテ其ノ代表者ノ全員カ日本臣民ナルモノ、所有ニ屬スル船舶

但シ舊商法ノ規定ニ從ヒテ設立シタル合資會社ニ在リテハ業務擔當社員ノ全員カ日

本臣民ナルモノ、所有ニ屬スル船舶ヲ以テ日本船舶トス

而シテ右ノ資格ヲ具有スル船舶カ、愈々日本ノ國籍ヲ得テ日本ノ國旗ヲ掲ケ又ハ航行ノ用ニ供スルニハ、左ノ手續ヲ履マサルヘカラス、

- 一、船主ハ日本國內ニ船籍港ヲ定メ其ノ船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ申請シテ船舶ノ積量測度ヲ受クルコト
- 二、積量測度ヲ受ケタル結果トシテ船舶件名書ヲ受ケ之ニ依テ管轄裁判所ニ所有權ノ登記ヲ爲スコト
- 三、登記ヲ爲シタル後更ニ船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ備フル船舶原簿ニ登録ヲ爲シ船舶國籍証書ヲ受クルコト

第二 日本船舶ノ特權

日本ノ國旗ヲ掲ケ(一)、日本ノ不開港場ニ隨意寄航シ(二)、又ハ日本各港ノ間ニ貨物又ハ旅客ノ運送ヲ爲スコト(三)等ハ、日本船舶ノ特權トスル所ニシテ、若シ外國船舶カ是等ノ特權ヲ冒スコトアランニハ、重罰ニ處セラルヘキハ論ヲ待タス、即チ國籍ヲ詐ル目的ヲ

以テ日本ノ國旗ヲ掲ケタル外國船舶アラハ、其ノ船長ヲ百圓乃至千圓ノ罰金ニ處シ、情狀重ケレハ其ノ船舶ヲ沒收スヘシ(但シ捕獲ヲ避ケントスル目)、又外國船舶ニシテ妄ニ我カ不開港場ニ寄航スルカ、若クハ我國各港間ニ貨物旅客ノ運送ヲ爲ストキハ、其ノ船長ヲ二百圓乃至二千圓ノ罰金ニ處シ且ツ船舶ヲ沒收スヘキナリ、然ルニ法律若クハ條約ニ別段ノ規定アルトキ(一)、海難又ハ捕獲ヲ避ケントスルトキ(二)、又ハ主務大臣ヨリ特別ノ許可ヲ得タルトキ(三)ハ、之カ例外ニシテ茲ニ一二ノ實例ヲ擧クレハ、外國船舶ハ元來我國各港間ノ運送事業、即チ沿海貿易ヲ營ムコト能ハサル筈ナレトモ、日英條約ヲ始メ其他ノ條約ニモ同様ノ條文アルニ依リ(即チ日英改正條約第十一條但書ニ曰ク日本國政府ハ本條約ノ期限間是トテ承諾ス尤モ大阪、新潟、)從前ノ四開港場間(橫濱、神戸)ニ於テハ、隨意ニ貨物ノ運送ヲ爲スコトヲ得ヘシ、又航海中衝突、乗揚、火災、敵ノ襲撃等不慮ノ海難ニ罹リタルトキハ、避難ノ爲メ不開港場ニ進入スルコトヲ得ルハ、各國共通ノ特典ニシテ今更絮説スルヲ要セス、其他戰時若クハ事變ノ際ニハ、外國船舶ヲ雇入レ大藏大臣ノ特許ヲ得タル上、不開港場ニ出入シ人馬又ハ貨物ノ積卸ヲ爲サシムル必要アルヘシ、即チ日清戰役中ノ事蹟

ノ如キ之カ的例ナリトス、

第三 船舶ノ検査

新陳代謝ハ數ノ免レサル所ニシテ船舶モ亦年齢ノ老ユルト共ニ老朽陳腐ニ屬スルハ當然ナリ、而シテ海上ノ危険ハ千態萬狀何時如何ナル災厄ニ罹ルモ圖ルヘカラス、昨日新タニ船渠ヲ出テタル船舶モ今日ハ早ヤ船體ヲ破リ機關ヲ傷ムルコト有リ、其ノ甚シキハ一軋ノ變ニ依リ忽チ人命財産ヲ擧テ海底ノ藻屑ト化シ去ルコトナキヤヲ保セス、是レ一ハ船體ノ保存一ハ航海ノ安全ノ爲メ、國家ノ監督ヲモ必要トスル所以ニシテ、我カ政府カ曩ニ船舶検査法ヲ設ケ、日本船舶ニ向テ當該官廳ノ検査ヲ強行スルモ、亦此ノ旨意ニ外ナラサルナリ、即チ海軍艦船艇其他小形帆船及檣權ノミニテ航行スル舟艇ヲ除クノ外總テ日本ノ船舶ハ、検査法ノ定ムル所ニ依テ船體機關ノ検査ヲ受クヘキモノニシテ、検査官ハ實地臨檢ノ上、其ノ現狀ヲ案シテ船舶ノ航路ヲ定限シ、且ツ航行ノ期間、流壓ノ定度、旅客ノ定員等ヲ制限シ、其ノ證憑トシテ船舶検査證書ヲ交附スルモノナリ(第六章第一節參照)、

第四 船舶ノ行動

軍艦其他官有又ハ公有ノ船舶、並ニ端舟其他檣權ニテ運轉スル舟艇ヲ除クノ外、總テ海上ヲ航行スル船舶ノ行動ニ付テハ、海商法(商法第五篇)ノ支配ヲ受ケサルヘカラス、即チ詳言セハ商賣的行動ノ目的ヲ以テ航海ノ用ニ供セラル、船舶ハ言フヲ待タス、其他學術研究ノ如キ、遠洋探檢ノ如キ、娯樂的周遊又ハ水路測量ノ如キ、何レモ商賣的ノ行爲ナラサルモ苟モ航海ノ用ニ供セラル、船舶ニ於テハ、船舶法第三十五條ニ依リ均ク海商法ノ規定ヲ準用セラルヘキモノトス、此ノ海商法ハ全篇百五十餘條ヨリ成リ、船舶ノ取得、移轉ヨリ船主、船長及海員ノ權利義務、旅客及物品ノ運送並ニ海損、海上保險ニ至ルマテ、船舶ノ行動ニ關聯スル百般ノ事態ニ付テ一々明確ニ規定シ、船舶法、船員法等ト相待テ、斯業ニ從事スル者ヲシテ適歸スル所ヲ知ラシムルモノナリ、

第五 船舶ハ特種ノ動産ナリ

法律上物ヲ別テ動産及不動産ノ二トス、動産トハ土地及其ノ定著物以外ノ有體物ヲ謂フモノニシテ重ニ自力又ハ他力ヲ以テ移動シ得ヘキモノヲ總稱ス、左レハ船舶ノ如キ其ノ性質上動産タルヘキハ疑ヲ容レサル所ニシテ、英、佛、獨ヲ始メ列國ノ法律ニ於テハ、

明ニ之ヲ動産ト看做セリ、我國ニ於テモ民法第八十六條ニ動産不動産ノ區別ヲ立テ、土地及其ノ定着物ハ之ヲ不動産トシ、其他ノ物ヲ總テ動産トスル旨ヲ定メアルヲ以テ、船舶モ亦明ニ動産ニシテ、動産ニ關スル諸般ノ規定ハ中八九船舶ニモ均ク適用セラルヘキモノト知ルヘシ、然レトモ其ノ積量ノ廣大ナル其ノ價格ノ高貴ナル等、一種特別ノ性質ヲ有スルモノナルカ故ニ、往々不動産ト同一視セラル、場合尠ナシトモス、例ヘハ船舶ノ登記、賣買、抵當權、強制執行等ニ付テハ、大概不動産ニ關スル規定ヲ準用セラル、カ如キ是ナリ、

第六 船舶ノ獎勵

船舶ノ獎勵ニ關スル法律ニアリ、曰ク航海獎勵法(二十九年十月一日以後十八年間有効トス)曰ク造船獎勵法是ナリ、航海獎勵法ニ依レハ、外國貿易ニ從事スル日本船舶ニシテ、總噸數一千噸以上、最快速力一時間十海里以上ヲ有シ、造船規程ニ合格シタル鐵製又ハ鋼製汽船ニ向テ(二十年十月一日以後帝國船舶ニ登記ノ際年輪五年以上ノ外國製船舶(一)、(十)五年以上ノ船舶(二)、政府ノ命令航路ニ使用スル船舶(三)ハ之ヲ除ク)左ノ割合ニ依リ航海獎勵金ヲ支給スヘシ、

一、總噸數一千噸、最快速力一時間十海里ノ汽船ニ對シ、總噸數一噸航海里數一千海里ニ付貳拾五錢ヲ支給ス、更ニ總噸數五百噸ヲ増ス毎ニ其ノ百分十、最快速力一海里ヲ増ス毎ニ其ノ百分ノ二十ヲ増給ス、但シ總噸數六千五百噸以上又ハ最快速力十八海里以上ノ汽船ニ對シテハ、六千噸又ハ十七海里ノ汽船ニ對スル割合ニ依リ支給ス、

二、航海獎勵金ハ年輪五年未滿ノ汽船ニハ全額ヲ給シ、五年以上ノ汽船ニハ一年毎ニ其ノ百分ノ五ヲ遞減ス、

三、三十二年十月一日以後帝國船籍ニ登録スル外國製ノ汽船ニハ、前二項ニ規定スル半額ヲ支給ス、

又造船獎勵法ニ依レハ相當ノ資格アル造船所ヲ有スル日本ノ臣民又ハ商事會社ニシテ、總噸數七百噸以上ノ鐵製又ハ鋼製ノ船舶ヲ、造船規程ニ從ヒ遞信大臣ノ監督ヲ受ケテ製造シタル者ニ、左ノ如ク造船獎勵金ヲ支給スヘシ、

一、總噸數七百噸以上一千噸未滿ノ船舶ニ在リテハ、一噸ニ付貳貳圓、一千噸以上

ノモノニハ同貳拾圓ヲ支給シ、機關ヲ併セ製造シタル場合ニハ、一實馬力ニ付五圓ヲ増給ス、但シ帝國内ノ他ノ工場ニ於テ機關ヲ製造セシメタルトキト雖モ、遞信大臣ノ許可ヲ得タルトキ亦同シ、

二、造船獎勵金ヲ受クヘキ船舶ノ船體機關ニハ、左ニ掲クル材料ノ外、外國製品ヲ使用スルコトヲ得ス、

- 一、船首材
- 二、船尾骨材
- 三、双螺旋軸支肘
- 四、徑七寸以上ノ諸軸
- 五、諸發條
- 六、鑄鋼、可鍛性鑄鐵、滿俺青銅及磷青銅諸製品
- 七、錐形及肋形火爐
- 八、專賣品

右航海及造船兩種ノ獎勵法ニ關聯スル造船規程ハ、全篇三百五十九條ヨリ成リ、船體機關各部分ノ製造ニ關シ據ルヘキ所ノ標準ヲ規定スルモノニシテ、船舶ノ濫造ヲ防クニ効果アルヘキハ論ヲ待タス、

第七 船舶ノ乗組員

日本船舶ノ乗組員ニ付テハ、諸種ノ法律ヲ以テ規定スル所アリ、第一、船舶職員法ヲ

以テ、職員トシテ船舶ニ乗組ムヘキ責任者ノ名稱ヲ、船長、一等運轉士、二等運轉士、機關長及一等機關士ト定メ、更ニ船舶ノ航路定限、種類、大小ニ應シテ職員ノ定員及免狀種類ヲ制限シ、第二、海員懲戒法及水先法ヲ以テ、高等海員又ハ水先人ニシテ執務中過失懈怠等不法ノ行爲アリタルトキハ、海員審判所ノ裁決ヲ以テ、免狀行使ノ禁止、停止又ハ罷責ノ如キ懲戒的制裁ヲ加フヘキ旨ヲ定メ、第三、船員法ヲ以テ、船長以下一切ノ乗組員ニ對スル公法上ノ權限義務ヲ規定シ、其中ニハ船員手帖ノ受有、海員ノ雇入、雇止、船内ニ於ケル船長ノ懲戒權、船長及海員ニ對スル刑事上ノ處分等ニ關スル事ヲ網羅セリ、

第八 船舶ニ關スル其他ノ法令

以上叙述シタル要款ノ外、尙ホ船舶ニ關スル法令告示等ハ、卷末附錄ニ掲クルカ如ク十ヲ以テ數フヘシ、今其ノ主ナルモノヲ擧クレハ、海上ノ衝突ヲ豫防セシムルカ爲ニハ萬國共通ノ海上衝突豫防法アリ、開港内ノ秩序安全ヲ保タシムルカ爲ニハ開港々則アリ、傳染病又ハ流行病ノ輸送ヲ豫遏セシムルカ爲ニハ海港檢疫法アリ、又人命、船舶、貨物

等ノ水難ヲ救護セシムルカ爲メ水難救護法ヲ設ケ、入港税及貨物輸入税ヲ課スルカ爲メ噸税法及關税法ヲ設クルカ如キ是ナリ、

第二節 國際法上ヨリ觀察シタル船舶

第九 大洋中ニ在ル船舶ト本國トノ關係

大洋ハ自由ナリ世界ノ公道ナリ、何レノ國ノ船舶ト雖モ自由自在ニ航行スルコトヲ得ヘシ、斯ク船舶ノ大洋ニ在ルトキハ、軍艦ト均ク其ノ本國領土ノ浮動スル一部ト看做サレ、本國ノ主權ニ服スル義務アルト同時ニ、亦本國ノ保護ヲ受クル權利アルモノニシテ、常ニ其ノ國籍ヲ外部ニ標示スヘキ國旗ヲ掲揚スルノ必要アリトス、而シテ此ノ國旗掲揚ノ特權ヲ得ルニハ、外國ノ例ヲ見ルニ多クハ大約左ノ條件ヲ具備セサルヘカラス、

- 一、船舶カ内國ニ於テ製造セラレタルコト、若クハ外國ニ於テ製造又ハ購求セラレタルトキハ國籍取得ノ手續ヲ了スルコト、
- 二、船舶ノ所有者カ内國臣民タルコト、然ラスンハ所有者中ノ一部ノミ外國人ナルコト、

三、船長及舵取カ内國臣民タルコト、然ラスンハ舵取中ノ一部ノミ外國人ナルコト
 四、乗組員ノ全部若クハ一部カ内國臣民タルコト、

以上ノ條件ニ付テハ各國互ニ寬嚴ヲ異ニシ、日、英、獨ノ如キハ帝國臣民又ハ帝國内ニ本店ヲ有スル商會社ノ責任者全員カ、帝國臣民ナルモノ、所有ニ係ル船舶ニ限り、帝國ノ國旗ヲ掲クル特權ヲ與ヘ、船舶ノ製造地及船長以下乗組員ノ國籍如何ハ之ヲ問ハス、然ルニ露國ニ於テハ船長ト他ノ乗組員ノ一半ハ露國臣民タルヲ要シ、又佛、伊、希ノ如キハ船長以下役員ノ全部ト水火夫ノ四分三以上、米、澳ノ如キハ同ク役員ノ全部ト水火夫ノ三分ノ二以上ハ自國々民タラサルヘカラス、然ラスンハ其ノ船舶ハ國籍ヲ得ルコト能ハサルモ、白耳義及丁抹ニ至テハ日、英、獨ト均ク乗組員ノ國籍ハ全ク之ヲ問ハサルノ例ナリ、其他船舶ノ所有權ニ付テハ、佛、希兩國ハ船價ノ一半以上自國々民ノ所有ニ屬スレハ國籍ヲ與フルモ、爾餘ノ諸國ニ於テハ船舶ノ國籍ヲ承認スルニ全部ノ所有權ヲ必要トスルモノ、如シ、

第二 外國領海内ニ在ル船舶ト該外國トノ關係

船舶カ大洋ニ在リテハ本國ノ主權ニ服スヘキコト前述ノ如シト雖モ、一タヒ外國ノ領海内ニ入レハ、夫ノ國家ヲ代表スル軍艦ト異ナリ、全然其國ノ裁判權及警察權ニ服セサルヲ得サルモノトス、是レ一國ノ領域内ニ於ケル犯罪ハ、其ノ種類ヲ問ハス其國ノ裁判權之ヲ處分ス(一)ト云フ原則ト、又一國ノ裁判權及警察權ハ其國ノ境域ヲ出テス(但シ大洋ハ自由ナルヲ以テ大洋上ニ於ケル犯罪ハ本國ノ領海内ニ於テ犯シタル行爲ト同一視ス)(二)ト云フ原則ニ基クモノナリ、本來外國ノ領海内ニ在ル船舶及乗組員ハ、該外國ノ主權ニ服従スルト共ニ、亦本國ノ主權ノ一部ニモ服従セサルヘカラサルモノニシテ、諸般ノ行爲ニ付テ其國ニ駐在スル本國領事ノ支配ヲ受クヘキコトナレトモ、領事ハ其ノ駐在國ノ法令及習慣ノ許ス範圍ニ於テ、本國ノ主權ヲ執行スルヲ得ヘキノミ、

然レトモ是等ノ規則ニ付テハ列國各、其揆ヲ同クセス、本邦及獨逸ノ如キハ、國ノ内外ヲ問ハス船内ノ懲戒權ヲ舉ケテ船長ニ委任シ、船長ノ命令ニ服従セサル者アル場合ニ及テ、軍艦又ハ官廳(海外ニ於テハ領事館又ハ貿易事務館)ニ向テ相當ノ援助ヲ請フコトヲ許セリ、又佛國法律ニ依レハ、船舶ノ乗組員カ輕罪ヲ犯シタル場合(船内ノ秩序ニ關

スル犯罪ノ如シ)(一)、若クハ乗組員ノ一人カ他ノ一人ニ對スル重罪ニシテ之カ爲メ港内ノ安寧、秩序ヲ害セサル場合(二)ニ在リテハ、該船舶ノ屬スル本國ノ法律ヲ以テ處分シ、之ニ反シテ船内ニテ犯シタル重罪ニシテ旅客ノ如キ乗組員外ノ者ニ對スル場合(三)、若クハ乗組員間ノ重罪ナルモ延テ港内及所在地方ノ安寧秩序ヲ害スル場合(四)ニ於テハ、其ノ海港ノ屬スル邦國之ヲ處分スヘキモノトス、此ノ佛國主義ハ未タ有効ナル國際法上ノ慣例ト爲スコト能ハサルモ、能ク理論ト實際トニ適合スルモノナルヲ以テ、輒近締結セラレタル領事職務條約ニ於テハ、多クハ此ノ主義ヲ採リ、單ニ船内ニ限レル不法行爲ニ對シテハ駐在領事ノ管轄權ヲ認メ、港内及所在地方ノ公安ヲ害シ秩序ヲ亂スノ行爲ニ對シテノミ、其地ノ國法ニ依テ制裁ヲ受ケシムル旨ヲ規定ス、其他英國ハ其ノ主權主張ノ程度ニ於テ稍強硬ニシテ、自國ノ領海内ニ於ケル外國船舶ノ行爲ニ向テ一層深ク干渉スルノ風ナレトモ、之ヲ要スルニ、列國ノ慣例トスル所ハ、事公ケノ秩序安寧ニ關スルカ(領海内ニテ不法ニ他船ト衝突シ又ハ沿海漁業ヲ妨害スル如キ行爲モ當然ニ之含有ス)若クハ船舶ヨリ自ラ保護ヲ請求シ來ル場合ニ限リ其ノ主權ヲ外國船舶ニ行使スルモ、單ニ船内ニ於ケル懲戒事件等ニ付テハ干渉セサルモ

ノト謂フテ可ナリ、

若シ又船舶カ外國ノ海港ニ入港スルニ方リ、其國ノ臣民ナル乗組員ニシテ重罪ヲ犯シタル者カ、船内ニ留マリ外出セサル場合ニ於テハ、其國ノ主權ノ及フ所如何ト云フニ、此際該外國ハ縱令自國臣民ヲリトモ自國ノ法律ヲ以テ處分スルコトヲ得サルモノトス、何トナレハ犯罪者ニシテ船内ニ寄泊シ居ル間ハ、該船舶ノ屬スル本國ノ法律ニ支配セラレヘキコト當然ナレハナリ、

其他定期航海ヲ營ム郵便船ハ、外國領海ニ在ルモ特別ノ取扱ヲ受クルノ例ニシテ、日佛條約第十五條ニハ、「兩締盟國ノ一方ノ保護ヲ受クル會社所屬ノ船舶ニシテ郵便事務ヲ扱フモノハ、他ノ一方ノ諸港ニ於テ、其ノ向先ヲ變シ又ハ差押、抑留、出港禁止ノ處分ヲ受クヘカラサルモノトス」ト定メタリ、此ノ條項ハ最惠主義ニ依リ各條約國ニ均霑スヘキモノナリ、

(備考)

昨三十一年八月和蘭海牙ニ於テ開會シタル、第十八回國際法協會ノ決議シタル「外國港灣ニ於ケル艦船及乗組員ノ取締法」第五條ニ、一國主權ノ自國領海内ニ及ホスヘキ範圍ヲ左ノ四項ニ分テリ、

- 一、海上領域ノ一部ニ來往スル艦船ヲシテ遵守セシムヘキ航入滯泊ニ關スル條件ヲ規定スル事
- 二、或商工業又ハ或航海業ヲ自國民ノ專業トシテ留保スル事
- 三、各官廳ノ權限内ニ於テ航海、秩序、安寧、公共衛生、及警察ニ關スル法規ヲ制定シ之ニ刑事的ノ制裁ヲ附スル事
- 四、諸種ノ稅殊ニ關稅ヲ課シ是等諸稅ノ徵收ヲ確實ナラシムル爲メ必要ノ處分ヲ設ケル事

第三 外國領海内ニ於ケル船舶ノ遭難

船舶カ暴風其他ノ危難ニ遭遇シ、避難ノ爲メ已ムナク外國海港ニ進入シタルトキハ、其國ノ船舶カ當ニ仕拂フヘキ税金ト同一ノ税金ヲ仕拂ヒ、其港ニテ更ニ機裝ヲ爲シ需用品ヲ求メ再ヒ航行スルコトヲ得ヘシ、尤モ船長カ其ノ費用ヲ支辨スル爲メ積荷ノ一部ヲ賣却セント欲スルトキハ、其地ノ規則及稅目ヲ遵守セサルヘカラサルハ當然ナリトス、船舶カ若シ外國沿岸ニテ座礁、膠沙若クハ難破シタルトキハ、其地ノ地方官廳ヨリ最寄ニ駐在スル該船舶所屬國ノ領事ニ、其旨ヲ通知スヘキモノニシテ、此際當該領事ハ自國臣民ニ必要ノ補助ヲ與フル爲メ、職權上相當ノ助力ヲ爲スコトヲ得ヘシ、又是等ノ遭難船ヲ救護スル手續ハ、遭難地所屬國ノ法令規則ニ依ルヘキコト勿論ニシテ、救上ケラレ

タル船舶、屬具、積荷、書類等ハ、船主又ハ其ノ代理人(船長等)ノ請求ニ依リ之ヲ引渡シ、船主又ハ其ノ代理人ニシテ現場ニ在ラサルトキハ、其國ノ法律ニ定メアル期間内ニ、當該領事ノ請求ニ從ヒ之ヲ引渡スヘシ、而シテ右船主、其ノ代理人又ハ領事ハ、内國船舶遭難ノ場合ニ準シテ遭難救護費等ヲ仕拂フヘキモノトス、其他遭難船ヨリ救上ケラレタル貨物カ消費ノ爲メ賣却スル場合ニハ、普通ノ國稅ヲ納ムヘキモ、消費ノ爲メニ非スシテ通關手續ヲ爲ス場合ニハ一切ノ關稅ヲ免除セラルヘシ、

第四 脱船者及逃走人

脱船ハ一種ノ犯罪行為ニシテ、此ノ罪ヲ犯シタル者ハ重キ刑罰ニ處セラル、コト各國同様ナリ、我國ニ於テモ國內ニテ脱船シタル海員ハ、十一日乃至六ヶ月ノ重禁錮ニ處シ外國ニテ脱船シタルトキハ更ニ一等ヲ加ヘ、又海員等黨與ヲ結テ脱船シタルトキハ、一ヶ月乃至一年ノ重禁錮ニ處スル旨ヲ規定セリ(船員法六十四條、及七十二條參看)、而シテ船舶乗組員カ本國ニ於テ脱船シタルトキハ、直ニ警察權ヲ假リ捕縛拘引スルヲ得ヘキハ勿論ナレトモ、外國海港内ニ於テ脱船シタルトキハ、即チ國際的關係ヲ生スルヲ以テ相當ノ手續ヲ履マサルヲ

得ス、固ヨリ夫ノ罪人引渡條約ニ依ル場合ノ如キ慎重ノ手續ヲ要セサルモ、先ツ船長ヨリ駐在領事ニ訴ヘ出テ、領事ハ其港ノ地方官廳ニ通牒シテ脱船者逮捕ノ件ヲ請求シ、地方官廳ハ此ノ依頼ニ應シテ犯罪者逮捕ノ上引渡スヲ一般ノ慣例トス、而シテ船舶ノ滯泊中脱船者ヲ逮捕シ得サルトキハ、出帆ノ後逮捕次第領事ニ引渡シ、領事ハ之ヲ館内ニ留置スルカ、然ラサレハ其地ノ監獄ニ留置ヲ依頼シ、便船ヲ待テ本國ニ送還スヘシ、尤モ監獄ノ留置日數餘リ長キニ涉ルトキハ(大約六ヶ月ヲ超過スルトキ)之ヲ放免スルヲ例トス、

(備考)

三十二年三月十五日ノ公布ニ係ル「外國艦船乗組員ノ逮捕留置ニ關スル援助法」ニ依リ、茲ニ其ノ手續ノ一斑ヲ示スコト左ノ如シ、

我方締盟各國トノ通商航海條約又ハ領事職務條約ニ依リ(日英條約第十、四條等參看)本邦領内ニ於テ外國艦船員ノ逮捕及留置ニ關シ援助ヲ爲スコトハ、本邦ニ駐在スル外國領事ノ請求ニ依リ、領事之ヲ行フモノニシテ、即チ檢事カ外國領事ヨリ斯ル請求ヲ受ケ之ヲ正當ト認ムレハ、逮捕狀ヲ發シテ犯罪者ヲ逮捕引致セシメ、一應訊問シテ人違ナキコトヲ確メタル上速ニ該領事ニ引渡スヘシ、又逮捕シタル犯罪者ニ付キ領事ヨリ留置ヲ請求シ來ルトキハ、檢事ハ之ヲ監獄ニ留置セシメ、該領事ヨリ放免ノ請求アルカ、若クハ逮捕ノ日ヨリ六ヶ月ヲ經ルモ引渡ノ請求ナキトキハ之ヲ放免スヘキモノトス、而シテ左ノ各場合ニ於テハ檢事ハ逮捕又ハ留置ニ關ス

ル援助ノ請求ニ應スルコトヲ得ス、

- 一、逮捕又ハ留置スヘキ者カ日本臣民ナルトキ
- 二、逮捕又ハ留置スヘキ者カ日本ニ於テ重罪輕罪ノ刑ニ當ルヘキ犯罪ニ付キ訴追ヲ受クルカ若クハ處刑中ナルトキ

- 三、一旦放免シタル艦船乗組員ニ對シ更ニ同一ノ事件ニ付キ請求アリタルトキ

- 四、外國領事カ援助ノ請求書ニ艦船ノ登録簿及乗組員名簿ノ正當ナル拔萃又ハ乗組員タルコトヲ證明スル公文書ヲ添付セザリシトキ

- 五、領事カ援助ニ關スル費用ノ支辨ヲ保證セザリシトキ(此ノ費用ハ檢事ニ於テ實費ヲ計算シ領事ニ請求スベキモノナリ)

次ニ逃走人ノ場合ヲ觀察スルニ、船舶カ外國海港ニ碇泊中、本船ニ逃レ來ル犯罪者アリタルトキハ、之ヲ庇護セラルヲ常トス、何トナレハ此ノ如キ輩ヲ庇護シテ法律ノ制裁ヲ免レシムルハ國際間ノ感情ヲ害スレハナリ、然レトモ其ノ犯罪事件ニシテ政治若クハ宗教ニ關スルモノナルトキハ、之ヲ庇護スルコト大ニ可ナルノミナラス、往々人類ノ義務トシテ之ヲ敢テセサルヘカラサルコトアルヘシ、而シテ其港ノ地方官廳ナルモノハ、駐在領事又ハ軍艦々長ニ通牒シタル上、船内ニ入り犯罪者ヲ搜索スルノ權利アリ、但シ其ノ船舶カ郵便船ナルトキハ、軍艦ニ特有ナル一二ノ特權ヲ附與セラル、コト有ルヘキヲ以テ(其ノ細件ハ郵便條約中ニ規定スル例ナリ)強テ右ノ搜索權ヲ執行スルコト能ハスト知ルヘシ

第五 船舶其他私有財産ノ捕獲

中立國ノ船舶ニ搭載シタル敵國ノ貨物又ハ敵國ノ船舶ニ搭載シタル中立國ノ貨物ハ、何レモ戰時禁制品ヲ除クノ外之ヲ捕獲スヘカラサル事ハ、一八五六年ノ巴里宣言ニ明示スル所ニシテ、之ニ加盟シタル世界列國(北米合衆國、西班牙、墨、西、外南米四國ヲ除ク)ハ、戰時ニ方リ縱令敵ノ貨物ニセヨ中立國ノ船内ニ在ル間ハ、戰時禁制品ノ外之ヲ犯スコトヲ得ス、又敵船ニ搭載スル貨物ニセヨ中立國ニ屬スルモノナル以上ハ、同ク禁制品ノ外之ヲ犯スヘキニ非サレトモ、敵ノ船舶及其ノ搭載シタル敵ノ貨物ニ至テハ、公有私有ノ別ナク之ヲ捕獲スルコトヲ得ルナリ、蓋シ國際法上海戰ト陸戰トハ互ニ其ノ條規ヲ同ウスト雖モ、重要ナル唯一ノ例外アリ、即チ陸戰ニ於テハ動産不動産ノ別ナク、總テ私有財産ヲ妄ニ損害セサル慣例ナレトモ、海戰ニ於テハ之ニ反シ、敵國人民ノ所有ニ屬スル船舶及其ノ積荷ヲ捕獲シ、且ツ其ノ乗組員ヲ捕虜ト爲スノ常ナルコト是ナリ(沿岸漁船、學術深究船、病傷者輸、而シテ其ノ理由トスル所左ノ如シ、送船、燈臺用船等ハ此限ニアラス)

- 一、商船ハ其ノ乗組員及積荷ト共ニ海軍ノ徵用ニ應シ、大ニ敵國兵力ノ補助ト爲ル

ヘキコト、

二、若シ商船及其ノ積荷ヲ捕獲スヘカラサルモノトセハ交戦國ハ海上ニ一ノ軍艦ヲモ使用スルヲ要セス、爲ニ海戰ノ効果ヲ失フニ至ラシムヘク、又交戦國ハ依然海上ノ貿易ヲ保持シ其ノ國富ヲ増殖シテ、戰爭ヲ永遠ニ持續スルヲ得ルノ奇態ヲ呈スヘキコト、

蓋シ私有財産捕獲ノ事ニ付テハ從來反對ノ議論世ニ少ナカラス、或ハ海戰ヲシテ單ニ交戦國相互ノ軍艦ヲ攻撃シ捕獲スルニ止マラシメ、其他ノ行爲一切ヲ制止セシメント主張スル者ナキニ非カリシモ、是レ海上戰略ヲ度外ニ措キ戰爭ノ目的ヲ無視スルモノナリトテ、今日ニ至ルマテ右ノ慣例ハ海戰ノ原則トシテ一般ニ承認セラル、所ナリ、

客年和蘭海牙ニ於テ開設シタル萬國平和會議ノ決定書案ニハ「一八六四年ノ、ジュネ

ーヴ條約（所謂赤十字條約）ヲ海戰ニ適用スルノ條約」アリ（其ノ旨意ハ、病院船、傷病者及船難者ヲ救濟シ、并ニ私人若クハ公ニ認メラレタル救濟會ノ出資ニ依リテ鐵裝シタ）又同會議ノ發表シタル希望中ニハ、「右「ジュネーヴ條約改正ノ爲メ遠カラス更ニ特別會議ヲ召集スルコト」、及「海戰ニ於ケル私有財産ノ

不可侵并ニ敵船ヨリ港市及村落ノ砲撃ニ關スル問題ヲ將來ノ會議ニ讓ルコト」ノ希望アリ、而シテ同會議ニ參列シタル各國全權委員ノ間ニ意見相和セサル所アルニ由リ、全會一致ノ決議ニ至ラス箇々調印スルコト、爲リタレトモ、右赤十字條約ヲ海戰ニ適用スルノ件ハ多數ノ代表者ニ依テ調印セラレ（本邦委員モ）（一）政府ニ屬スル救護船、（二）海軍ト陸軍トヲ問ハス其ノ病傷兵ヲ輸送スル赤十字社船、及（三）中立國ノ救護船ハ、戰時總テ局外中立ノ取扱ヲ受クヘキコト、爲レリ、

其他局外中立國ノ船舶（但シ中立國ノ軍艦ニ對シテハ此限ニアラス）ト雖モ不法ノ行爲アルトキハ、交戦國ハ之ヲ捕獲スルコトヲ得ルノ權利アリ、例ヘハ中立國ノ船舶カ敵國軍艦ノ保護ノ下ニ航海スルトキ（一）、軍艦ノ信號アルニ拘ラス進行ヲ停止セス臨檢ヲ免レントシタルトキ（二）、暴力ヲ以テ臨檢ニ抵抗シタルトキ（三）、封鎖ノ通知ヲ受ケ若クハ封鎖ノ事實ヲ知りナカラ之ヲ破ラントシタルトキ（四）ノ如シ、而シテ敵國ニ到達シ若クハ寄港スル中立國ノ船舶ニシテ、現ニ戰時禁制品ヲ搭載輸送シタル形跡明ナルモ、該船舶ノ積荷全體ニ比較シ極テ少量ナルトキハ、臨檢軍艦ハ單ニ其ノ禁制品ノミヲ沒收シ船舶ハ之ヲ解放スルノ例ナルカ

如シ、然レトモ左ノ如キ場合ニ於テハ船舶モ共ニ沒收ヲ免レサルモノトス、

- 一、船舶及其ノ積荷カ同一ノ所有者ニ屬スルトキ
- 二、積荷ノ大部分カ禁制品ナルトキ但シ其ノ大部分ナルヤ否ヤヲ決スルニ付キ英國ハ單ニ過半数 (Greater Part) ト云ヒ或ハ全貨物ノ何分ノ一以上ナルトキト規定シ佛國ハ全貨物ノ四分ノ一以下ナレハ船舶ヲ沒收スルコトナシ
- 三、船舶カ偽造書類ヲ有シ其他詐僞ノ手段ヲ用ヒタルトキ
- 四、中立國ト交戦國トノ相互條約ニ於テ明ニ禁制品ヲ規定シタル物品ヲ該中立國船舶ニ搭載シタルトキ

明治二十七年九月大本營制定ノ我カ捕獲規程ニ於テハ、船舶及貨物ヲ拿捕スルヲ得ヘキ場合ト正當ノ捕獲ト爲スヘキ場合トヲ左ノ如ク規定セリ、

- 第五條 何レノ國籍ニ屬スルナリト問ハス左記ノ船舶ハ拿捕スルコトヲ得
 - 一、敵ノ陸海軍若クハ敵國ノ津港ニ寄航シ若クハ到着スヘキ船舶ニシテ戰時禁制品ヲ搭載スルモノ
 - 二、暴力ヲ以テ臨檢ニ抵抗スルモノ
- 第六條 何レノ國籍ニ屬スルナリト問ハス左記ノ船舶ハ嫌疑アリトシテ拿捕スルコトヲ得
 - 一、船舶ノ書類ニ嫌疑有シ又ハ偽造若クハ變造書類ヲ備フルモノ

- 二、初メヨリ船舶ノ書類ヲ備ヘサルカ又ハ之ヲ隱匿シ若クハ毀壞シタルモノ
- 三、軍艦ヨリ信號アルニモ拘ハラシ進航ヲ中止セス臨檢ヲ免レントシタルモノ
- 四、暴力ヲ以テ搜索ニ抵抗スルモノ
- 五、國籍ヲ證明スル書類ヲ提供シ能ハサルモノ

第七條 左記ノ船舶及貨物ヲ以テ適法ノ捕獲ナリトス

- 一、敵船及其ノ搭載セル貨物但シ中立國貨物ニ假令敵船ニ搭載シアルモ戰時禁制品ヲ除クノ外ハ之ヲ捕獲ト爲スコトヲ得ス
- 二、戰時禁制品
- 三、戰時禁制品若クハ戰時禁制品ヲ運搬スル船舶
- 四、暴力ヲ以テ臨檢ニ抵抗スル船舶
- 五、嫌疑アリトシテ拿捕セラレ後チ嫌疑ヲ遂ニ説明シ得サル船舶

(注意) 右規程中「拿捕」トハ單ニ捕フルノ意味ニシテ「捕獲」トハ拿捕ニシテ正當ナルモノヲ意味ス

捕獲權 (Right of capture) ヲ行フコトヲ得ヘキ場所ハ、大洋并ニ交戦國若クハ同盟國ノ領海内ニ限ルモノニシテ、局外中立國ノ領海内ニ於テハ之ヲ行フコトヲ得ス、是レ交戦國ノ權利ハ中立國ノ領海内ニ及ハサルモノナルヲ以テ、該領海内ニ於テ一切敵抗ノ行爲アルヘカラサルコト勿論ナレハナリ、又英國海軍大學校講師ローレンス氏ハ、其著「國際公法要論」中ニ交戦國捕獲權ノ運用ヲ左ノ如ク區別セリ、

(一) 領海内ニ在ル敵ノ船舶及貨物

- (イ) 開戦ノ際自國ノ港内ニ在ル敵ノ船舶及貨物ハ捕獲スルヲ得ルト雖モ近來ノ戰爭ニ於テハ相當ノ時限ヲ與ヘテ出港セシムルヲ慣例トス
- (ロ) 開戦ノ後自國ノ港内ニ入ル敵ノ船舶及貨物ハ捕獲スルヲ得ルト雖モ天候ノ不穩ヲ避ケル爲メ入港スルモノナルトキハ之ヲ許シ又開戦ノ際既ニ航海シツアル商船ハ安全ニ港口ヲ出入セシムルノ慣例ナリ
- (ハ) 自國ノ港内及領海内ニ在ル船舶及貨物ハ戰時ノ條規及條約ニ依テ特別ニ保護スルニ非サレハ敵國ハ之ヲ捕獲スルヲ得ルト雖モ沿海漁業ニ從事スル船舶ニ及ホサトルヲ常トス

(二) 大洋ニ於ケル敵ノ船舶及貨物

- (イ) 敵國ノ公有船 (Public vessels) ニシテ探檢、科學的發見、若クハ正當ノ事業ニ專用スルモノニ非サレハ捕獲スルヲ常トス
- (ロ) 敵ノ商船之ニ搭載スル敵ノ貨物ハ捕獲スルヲ得ルト雖モ技術 (Works of art) ニ屬スル貨物ニ及ホサス
- (ハ) 各國ノ其ノ巡洋艦ニ與ヘタル法律ノ規定スル條件ニ依リ敵ヨリ捕獲シタル財産ハ捕獲者ニ償金ヲ渡セハ之ヲ原所有主ニ復歸スルモノトス
- (ニ) 敵ヨリ捕獲セラレタル船舶及貨物ハ國際法上之ヲ賠償スルヲ得ルトモ各國概テ其ノ人民ノ私ニ賠償スルヲ禁ス

要スルニ私有財産ノ捕獲ニ關スル國際法上ノ原則及列國ノ現狀ハ大約前述ノ如シト雖モ、交戰國ハ相互間ノ合意ヲ以テ、私有財産ニハ海戰ニ於テモ侵害ヲ加フヘカラサルコ

ト、定ムルヲ得ヘシ、即チ一八七一年二月ノ伊太利亞米利加條約第十二條并ニ一八八五年九月ノ普魯士亞米利加條約第二十三條ノ如キハ是ナリ、且ツ又將來社會道義ノ觀念益々暢發スルト共ニ海戰ニ關スル國際公法モ十分發達スルニ至ラハ、終ニハ私有財産不可侵ノ原則ハ一般ニ承認セラレヘク、捕獲權ハ殆ト有名無實ニ歸シ、陸戰ト海戰トノ重要ナル差別モ亦殆ト其跡ヲ絶ツヘキナリ、

第六 臨檢及搜索ノ權

臨檢及搜索ノ權 (Rights of visit and search) ハ交戰國ノ有スル嚴正ナル權利ニシテ、敵國船舶カ偽旗ヲ掲ケテ國籍ヲ僞ルニ非サルカ、又ハ中立國船舶カ戰時禁制品ヲ搭載スル等中立違反ノ行爲アルニ非サルカラ儘メン爲メ、其ノ船内ニ臨ミ書類、荷物等ヲ點檢搜索スルノ權利ナリ、交戰國カ此ノ權利ヲ行フハ海軍艦船ヲ以テスルノ例ニシテ、又前文捕獲權ト均ク大洋并ニ交戰國若クハ同盟國ノ領海内ニ於テノミ之ヲ執行スルヲ得ヘキモ、中立國領海内ニ於テハ臨檢、搜索又ハ拿捕ヲ爲スコトヲ得サルモノトス、

茲ニ其ノ手續一斑ヲ示サンニ、交戰國ノ軍艦カ洋上ニ於テ敵船又ハ疑ハシキ船舶ニ出

逢ヒ之ヲ臨檢セント欲スルトキハ、信號又ハ空砲ヲ以テ臨檢ノ意ヲ示シ、其ノ進航ヲ停止スルヲ待テ軍艦ヨリ若干ノ將校ヲ派シ船内ノ書類(國籍證書、航海日誌、船荷證書、積荷目録、出港證書、船員名簿、健全證書等)ヲ點檢セシムヘシ、之ヲ臨檢權ト云フ、而シテ書類點檢ノ上別ニ疑ハシキ廉ナキトキハ直ニ之ヲ解放スヘキモ、若シ疑アルトキハ船長立會ノ上船内ヲ搜索スヘシ、之ヲ搜索權ト云フ、我カ捕獲規程ニハ這般ノ手續ヲ左ノ如ク定メタリ、

第十二條 艦長ハ船舶進航ノ中止ヲ命ジ臨檢及搜索ヲ爲スニ當リ左ノ規定ニ從フヘキモノトス

- 一、艦長ハ船舶ノ拿捕ヲヘキ疑アル場合ニ限リ臨檢員ヲ任命シ臨檢ヲ行フモノトス
- 二、進航ノ中止ハ信號旗及汽笛ニ依リ之ヲ命スルモノトス但シ天候ノ爲メ信號旗ヲ以テ臨檢ノ意ヲ船舶ニ通シ得サルトキ若クハ該信號ニ應セサルトキハ空砲ニ發シ依リ之ヲ命スルモノトス
- 三、臨檢員ハ先ツ船舶ノ書類ヲ點檢スヘシ書類其他ノ點ニ於テ疑ナシト斷定スルトキハ直ニ放免スヘシ
- 四、臨檢員疑アリト思考スルトキハ船内ヲ搜索シ疑ナキトキハ直ニ放免スヘシ
- 五、搜索ハ船長若クハ其ノ代理者立會ノ上之ヲ爲スモノトス
- 六、閉鎖シタル場所及器具ハ船長若クハ其ノ代理者ヲシテ之ヲ開カシムルモノトス拒ムトキハ臨檢ノ取計ヲ爲スヘシ
- 七、臨檢士官ニ於テ戰時禁制品ノ積載ナキ事ヲ認ムルトキハ之ヲ該船舶ノ航海日誌ニ記載シ次回臨檢スル士官ノ參考ト爲スヘシ
- 八、船長ノ臨檢及搜索ニ異議ヲ唱ヘタルヤ否ヤチ該船舶航海日誌ニ記載シ異議ヲ唱ヘタルトキハ異議ノ理由

ヲ記載スヘシ
(備考)

中立國船舶カ其國軍艦ノ護送ヲ受クルトキハ、交戰國ノ臨檢ヲ免ルヘキヤ否ヤハ、公法學者中其說區々ナリト雖モ、我國ニ於テハ臨檢免除主義ヲ採リ、即チ捕獲規程第二十三條ニ曰ク「中立船舶中立國ノ軍艦ニ護送セラレトキハ護送艦ノ艦長該中立船舶内ニ戰時禁制品ナキコト及船舶書類ノ總テ完備セルコトヲ申立ツルトキハ臨檢及搜索ヲ爲サルモノトス」

若シ又軍艦ヨリ進航停止ノ信號アルモ、之ニ從ハス臨檢ヲ免レントシ、或ハ暴力ヲ以テ臨檢搜索ニ抵抗シ、或ハ書類、積荷、船員ノ証言等ニ不審アルトキハ、艦長ハ當然該船舶ヲ拿捕スルヲ得ヘキモノニシテ、一旦拿捕スヘキモノト決定スルトキハ、當該船長ニ拿捕ノ理由ヲ告ケ將校下士卒數名ヲ船内ニ派シ之ヲ占有セシメ、且ツ書類、貴重品等ノ保管方ニ注意シ、速ニ該船舶ヲ捕獲審檢所ノ所在地若クハ其ノ最寄地ニ引致シテ檢定ヲ受クヘキモノトス、蓋シ各交戰國ハ開戰ノ後其ノ領内又ハ占領地内若クハ同盟國領内ニ於テ、戰區ニ近キ海港ニ捕獲審檢所 (Prize Court) ヲ置キ、自國艦船ノ捕獲シ來ル敵國又ハ中立國ノ船舶及其ノ積荷ニ付テ捕獲ノ當否ヲ檢定シ、沒收又ハ解放ノ處分ヲ爲サシムルノ例ニシテ、該審檢所ノ檢定アルマテハ船舶其他ノ捕獲物ハ假捕獲ニ過キス、而シ

ヲ適法ノ捕獲ト檢定セラレタル物件ハ國家ノ所得ニ歸スルモ、國家ハ審檢所ノ裁決ニ對シテ責ヲ負フヘキモノナルヲ以テ、若シ其ノ裁決不當ナルトキハ政府ハ被害者ニ對シテ回復ノ途ヲ與ヘサルヘカラス、被害者ノ中立國民ナルトキハ殊ニ然リトス(二十七年八月公布捕獲審檢令參看)

第七 戰時禁制品等

戰時ニ方リ中立國ノ船舶ハ、其ノ義務トシテ戰時禁制品、戰時禁制人、又ハ戰時禁制書ヲ搭載シ交戰國ニ運送スルコトヲ得ス、若シ此ノ義務ヲ破ルトキハ乍チ局外中立ノ違反ト爲リ、其ノ物品ハ勿論、之ヲ運送スル船舶其物モ、敵手ニ捕獲セラル、虞アルヘシ、

戰時禁制品 禁制人、及禁制書トハ如何ナルモノナリヤ、此ノ問題ニ關スル學說及事實ハ區々一定セスト雖モ、或ル二三ノ場合ヲ除ク外ハ列國間ニ大約一致スルモノトス、我國ニ於テハ二十七年九月大本營制定ノ捕獲規程中ニ左ノ如ク定メタリ、

(甲) 日本法

(一) 戰時禁制品

- 一、兵器彈藥、爆發物、硝石、硫黃、其他總テ單ニ戰爭ノ用ニ供スル物品、以上ノ物品ハ、敵國ノ津港ニ寄航シ若クハ到達スヘキ、又ハ敵ノ海軍ニ到達スヘキ、一切ノ場合ニ於テ戰時禁制品トス、
 - 二、糧食及飲用品、通貨、電信架設ノ材料(電線、白金、硫酸亞鉛、有孔陶器)、鐵道布設ノ材料(軌條枕木等)、石炭、材木等
- 以上ノ物品ハ、敵ノ陸海軍ニ到達スヘキ場合、又ハ敵國ノ津港ニ到達スルモノト認ムヘキ場合ニ限リ、戰時禁制品トス、
- 右一、二、兩項ニ列記セル物品中、其ノ分量及性質ニ依リ、特ニ該運搬船ノ自用ニ供スルコト明ナルトキハ、戰時禁制品ト爲スコトヲ得ス、

(二) 戰時禁制人

戰時禁制人トハ、敵兵其他敵國ノ軍事ニ從フ者ヲ云フ、

(三) 戰時禁制書

戰時禁制書トハ敵國政府ノ官吏間ニ往復スル一切ノ公文書類ヲ云フ、但シ敵國外交官及領事官ト本國政府トノ間ニ往復スル公文書類ハ、戰時禁制書ト爲スコトヲ得ス、又英國捕獲審檢所ニ於テハ、戰時禁制品ヲ絶對的ノモノト條件附ノモノトノ二種ニ區別シ、之ニ屬スル物品左ノ如シ、

(乙) 英國法

(一) 絶對的戰時禁制品

- 一、兵器及其ノ製造用機械
- 二、彈藥及其ノ原料
- 三、火藥及其ノ原料
- 四、武器具及被服
- 五、陸軍需用品
- 六、軍艦需用品例ヘハ櫓、圓材、舵、造船材、綱具、帆布、松脂、瀝青、船底被包銅板、船用機關及其組立部分、「マリン、セメント」及其ノ原料、錨、鉸釘鐵、L字鐵、徑四分三吋以上ノ棒鐵、厚サ四分一吋以上ノ鐵板等

(二) 條件附戰時禁制品

- 一、陸海軍用飲食物
- 二、通貨
- 三、電信架設材料
- 四、鐵道布設材料
- 五、石炭
- 六、秣草
- 七、馬
- 八、樹脂
- 九、獸脂
- 十、材木

然ルニ佛國ハ英國ト反對ノ意見ヲ持シ可成通商權ノ自由ヲ發揮シテ、交戰國ノ權力ヲ

制限セントスルモノ、如シ、歐洲諸國ハ獨逸ヲ除キ概ネ佛國主義ニ傾クヲ以テ、通常之ヲ英國主義ニ對シテ大陸主義ト云フ、即チ其ノ禁制品トスルモノハ直接戰用ニ供スヘキ物品ノミニシテ、兵器及其ノ組立部分、彈藥、硝石、硫黃、爆發物、爆發器械、軍隊、砲銃ノ輸送器具、兵士ノ被服、軍艦及其ノ機裝品等トス、而シテ馬ヲ禁制品ノ一ト爲スヘキヤ否ヤハ、諸國其ノ見解ヲ異ニシ、一六五九年ノ「ピラテス」平和條約ニハ、馬及馬具ヲ禁制品ト爲シ、又一七一三年ノ「ユートレヒト」條約ニハ、馬ヲ以テ直接戰用ニ供スルモノト看做シタルモ、露國ノ如キハ近來之ヲ非認スルヲ見ルナリ、

其他尙ホ注意シ置クヘキハ、戰用材料ハ總テ禁制品ナレトモ、醫術機械、繃帶類ノ如キハ之ヲ除クコト(一)、敵兵ヲ輸送スル中立國船舶ハ適法ノ捕獲物ト爲ルヘキモノナレトモ、既ニ之ヲ上陸セシメテ歸航中ナルトキハ此限ニ在ラサルコト(二)、交戰國ハ條件附禁制品(又ハ臨時禁制品ト云フ)ニ對シ、之ヲ沒收セスニ相當ノ利益ヲ附シテ先買權ヲ行フコト有リ、或ハ又禁制品ニシテ中立國ノ主要ナル輸物産ナルトキハ、均ク此ノ特典ニ霑フコト有ルコト(三等是ナリ、

(參照)

一八九四年二月巴里開設ノ國際法協會ニ於テ決議報告シタル戰時禁制品ニ關スル條文ハ、近代國際公法學者ノ意見トシテ見ルヘキモノナルヲ以テ、其ノ二三ヲ茲ニ抄録スヘシ、

第一條 軍用品ハ交戰國ニ交附セラレトスル時ニ之ヲ禁制品ト看做スモノトス

此規則ニ於テ軍用品ト稱スルハ明ニ戰爭ノ用ニ供スルカ爲ニ作ラレ其儘ニテ特ニ戰爭ノ用ヲ爲ス物品ヲ謂フ

第二條 軍用品ノ部類ニ入ルヘキ物品ハ之ニ努力ヲ加ヘ又ハ其形狀ヲ變更スルヲ要セス唯、之ヲ組合ハセ即チ併置スルノミニシテ軍用ニ供シ得ヘキ物ヲ謂フ

第十一條 諸國ノ商議ヲ經テ新規則ノ制定迄ハ左ニ掲グル物品ヲ以テ戰時禁制品トナス

- 一、加農砲、白砲、霰彈砲、長身砲、榴彈砲、刀、小銃、拳銃、旋回短銃、爆藥筒、エペ劍、クレープ劍、サープル劍、短刀、ジャブロ擲槍、ランス擲槍、槍
- 二、爆彈、榴彈、砲彈、彈丸、水雷火皮他ノ彈丸、霰彈、小粒彈、小彈丸、火箭、導火連囊、藥筒、屬藥管、火藥、綿火藥、此他火藥ニ代用スヘキ爆發性ノ物品
- 三、武器ヲ着用シ又ハ敵ノ武器ヲ防禦スルノ用ニ供センカ爲メニ作ラレタル兜、鏡、甲冑、胸甲、盾、肩帶、革帶、佩劍、托革携帶鈎(騎兵ノ短銃掛)、鞘銷、拳銃、革鞘、銃包盒、銃包囊、棍槓、頁革、拔丸器ノ如キ軍用裝具、砲兵又ハ騎兵ノ武器、馬具、軍用綿散糸ノ拳袖
- 四、軍艦、軍用小船、軍用運送船、砲艦、モニートル艦、水雷艇、浮標、要塞砲臺、地雷火
- 五、以上列舉シタル器具器械ノ一部分ニシテ改造變形等ヲ施スヲ要セス之ヲ組立ツレハ直ニ器具器械ト爲シ得ヘキモノ
- 六、明ニ軍用ノ爲メニ作ラレ以上掲ケタル物品ニ代用スルコトヲ得ル物及以上掲ケタル軍器ノ使用ヲ容易ナラシムル爲メ特ニ作ラレタル物

第十三條 左記ノ物品ハ從來比較的禁制品又ハ臨時禁制品ト稱シ追奪シタルコトアルヘシト雖モ將來如何ナル口實ヲ以テスルモ之ヲ禁制品トシテ追奪スルコトヲ許サス

- 一、貨幣及金銀
- 二、食料及穀物
- 三、織物、羅紗、衣服
- 四、商船
- 五、櫓、帆、網具、錨輪、麻、木棉等、要スルニ純粹ナル海上用ニ供スル材料ニシテ必スシモ軍用材用タラサル物
- 六、武器又ハ所謂軍用品ヲ製造スルニ用フル原料
- 七、武器ニアラス軍用器具ニモアラサル諸器械
- 八、石炭
- 九、馬

第八 私艦及代用巡洋艦

私艦 (Privateer) トハ、戰時私人ノ所有ニ屬スル船舶ニ武装ヲ施シ、重ニ敵ノ海上貿易ヲ妨害センカ爲メ、一國政府ヨリ特ニ免許狀ヲ授與セラル、モノヲ云フ、政府カ此ノ免許狀ヲ授與スルニハ、私艦ノ行動シ得ヘキ區域、期間等ヲ定メ、且ツ其ノ違法行爲ニ對スル賠償ノ用意トシテ、相當ノ擔保金ヲ提出セシムルヲ例トス、私艦ハ恰モ陸戰ニ於テ許可

ヲ得タル義勇兵ノ如キモノニシテ、海上ヲ横行シ暴威ヲ逞ウスルヲ目的ト爲シ、敵ノ商船ヲ捕獲シ貨財ヲ掠奪スル等其ノ弊害甚シカリシヲ以テ、一八五六年巴里宣言ニ於テ、私艦ヲ捕獲ノ用ニ供スルコトヲ廢止シ、最初英、佛、普、露、澳、伊、土、七國ノ間ニ此ノ盟ヲ結ビ、次テ世界ノ諸海國之ニ加ハリ、我國モ明治十九年十月ヲ以テ加盟シタリ、然レトモ合衆國、西班牙、メキシコ及南米ノ四國(ヴェネチア、ニエーグランド、ナ、ホリビヤ及ウルグアイ)ハ未ク之ニ加盟セサリシヲ以テ、是等ノ邦國間ニ開戦アルトキ、若クハ加盟國ト雖モ是等ノ邦國ノ一ヲ敵トシテ戰ヲ開クトキハ、或ハ私艦ヲ利用シテ海軍ノ一助ニ供スルコトアルモ亦知ルヘカラサルナリ、

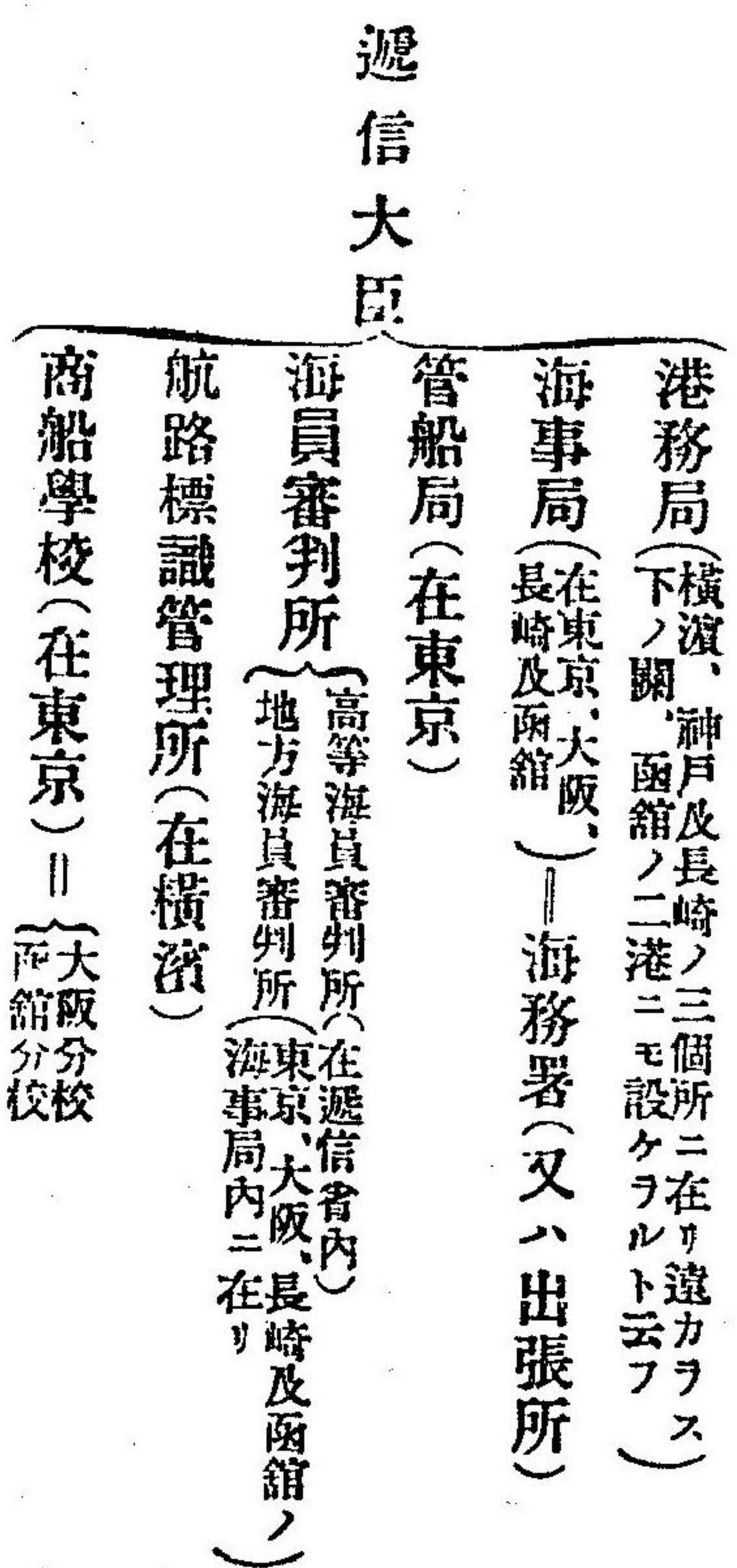
私艦廢止ノ事ハ前述ノ如ク、一部少數ノ邦國ヲ除ケハ殆ト國際盟約ト看做シテ差支ナシト雖モ、輒近列國政府ハ國內ノ重ナル船主ト特約ヲ結ビ、手厚キ保護金ヲ支給スル代リニ、其ノ所有船舶中堅牢快速ノモノヲ撰テ、海軍豫備籍ニ編入シ、乗組員ノ一部ニハ海軍豫備員ヲ充テ、平素ハ主トシテ外國貿易、郵便物運送等ニ從事セシムモ、一朝事アルハ忽チ之ヲ徵用シテ砲銃ヲ裝シ、以テ海軍ノ補助的任務ニ服セシムルヲ例トス、之ヲ代

用巡洋艦 (Auxiliary or Mercantile Cruiser) ト云フ、此ノ制度ハ今ヲ距ル凡ソ二十年前ヨリ、英、露、佛、伊、獨、班、米等ノ重ナル海軍國前後相踵テ採用シタル所ニシテ、殊ニ近年ハ列國相競テ之ヲ獎勵シ、苟モ構造堅牢ニシテ速力快捷ナル大汽船ヲ新造スル者アレハ、必ス之ヲ代用巡洋艦ニ編入スルノ趨勢ナリ、而シテ此種ノ船舶ハ前示巴里ノ宣言中ニ謂フル「私艦」ト抵觸スルコト無キヤ否ヤヲ考フルニ、元來右ノ宣言ハ單ニ原則ヲ示セル一種ノ盟約ニ過キスシテ之カ適用法ヲ明示セサルヲ以テ、之ニ抵觸スルヤ否ヤノ判斷ハ、全ク其ノ船舶ヲ使用スル邦國カ、該船舶及乗組員ニ對スル管督權ノ如何ニ屬スヘントハ、公法學者ノ均ク承認スル所ナリ、即チ代用巡洋艦ナルモノハ、平時豫メ政府ト船主トノ間ニ特別ノ規約ヲ結ビ、之ヲ海軍豫備籍ニ編入シ、其ノ乗組員ノ一部ニ海軍豫備員ヲ充ツルモノナルヲ以テ、其ノ性質タルヤ既ニ純然タル海軍豫備ニシテ、有事ノ日之ヲ軍役ニ用ユルモ、何ノ國際盟約ニ矛盾スルコトナキヲ知ルヘシ、

第四章 船政ノ系統及分掌

第一 船政ノ系統

我國ノ船政ハ遞信大臣ノ統理ニ係リ、其ノ管下ニ管船局 (Mercantile Marine Bureau) 海事局 (Marine Office) 及港務局 (Harbour Office) ノ三局并ニ海員審判所 (Marine Court, Local and Superior) 航路標識管理所 (Lighthouse Office) 商船學校 (Navigation School) リテ、各、主管ノ業務ヲ執行ス、今其ノ系統ヲ圖示セハ左ノ如シ、



第二 船政ノ分掌

茲ニハ管船局以下ノ局所及學校ノ分掌事務一班ヲ説明スヘシ、

(一) 管船局(局長勅任)

管船局ハ遞信大臣ノ管理ニ屬シ、航路標識ニ關スル事項(一)、航路、船舶、海員、水運及保護海事會社ノ監督ニ關スル事項(二)ヲ掌理スル所ニシテ、左ノ三課ニ分テ局務ヲ分掌セシム、

一、監理課

内外航路及港務ニ關スル事務(一)、海事ノ獎勵及水運并ニ海事會社ノ監理ニ關スル事務(二)、航路標識及官立商船學校ニ關スル事務(三)、本局ノ主管ニ屬スル庶務、會計、統計、人員ニ關スル事務(四)、其他局中各課ニ屬セサル事務(五)ヲ掌ル

二、船舶課

船舶ノ登録ニ關スル事務(一)、船舶ノ検査、測度及造船ノ工事監督ニ關スル事務(二)、造船規程ニ關スル事務(三)、并ニ船燈、信號器、救命具ニ關スル事務(四)ヲ掌ル

海員、水先人ノ登録及試験ニ關スル事務(一)、海員審判及水先人ノ審問ニ關

三、海員課

スル事務(二)、水難救助及難破漂流物處分ニ關スル事務(三)、海員ノ雇入雇止并ニ養成ニ關スル事務(四)、ヲ掌ル

管船局長ハ、高等海員審判所々長并ニ政府保護海事會社ノ會計下検査官及監査委員ヲ兼ヌルヲ常トス、

(二) 海事局(局長奏任)

(イ) 海事局及其ノ管轄區域

海事局モ亦遞信大臣ノ管理ニ屬シ、船舶職員及水先人ノ試験、船舶ノ測度、検査、其他法令ノ定ムル所ニ從ヒ管海官廳ノ事務ヲ掌ル所ニシテ、局務ヲ庶務、技術ノ二課ニ分ツヲ例トス、今各海事局ノ名稱及管轄區域ヲ示セハ左ノ如シ、

名稱 管轄區域

| | | | | | |
|-------|------|-----|-----|-----|-----|
| 東京府 | 神奈川県 | 新潟縣 | 埼玉縣 | 群馬縣 | 千葉縣 |
| 茨城縣 | 栃木縣 | 三重縣 | 愛知縣 | 静岡縣 | 山梨縣 |
| 東京海事局 | 岐阜縣 | 長野縣 | 宮城縣 | 福島縣 | 巖手縣 |
| | | | | | 山形縣 |

石川縣 (加賀國) 富山縣

京都府 大阪府 兵庫縣 奈良縣 滋賀縣 福井縣

大阪海事局

石川縣 (加賀國) 鳥取縣 島根縣 岡山縣 廣島縣

山口縣 和歌山縣 德島縣 香川縣 愛媛縣 高知縣

福岡縣 (筑後國) 大分縣

長崎海事局

長崎縣 福岡縣 (筑後國)

佐賀縣

熊本縣

宮崎縣

鹿兒島縣

沖繩縣

函館海事局

北海道

青森縣

秋田縣

(ロ) 海務署及其ノ管轄區域

海事局管轄區域内ニ在ル府縣須要ノ地ニハ、海務署又ハ出張所ヲ置キ局務ヲ分掌セシム、即チ左ニ其ノ名稱及管轄區域ヲ示サン、

名稱 管轄區域

橫濱海務署 神奈川縣 (三浦郡鎌倉郡ヲ除ク)

浦賀海務署

神奈川縣ノ内三浦郡鎌倉郡

清水海務署

静岡縣

鳥羽海務署

三重縣

半田海務署

愛知縣 岐阜縣

石卷海務署

宮城縣 巖手縣

新潟海務署

新潟縣 山形縣

伏木海務署

富山縣 石川縣 (加賀國ヲ除ク)

神戸海務署

兵庫縣 岡山縣 德島縣

高知海務署

高知縣

多度津海務署

香川縣

三津濱海務署

愛媛縣

糸崎海務署

廣島縣 (其他糸崎海務署出張所ヲ木ノ江ニ設ケ)

赤間關海務署

山口縣 福岡縣 (筑後國ヲ除ク)

大分縣

境海務署 鳥取縣 島根縣

若津海務署 熊本縣 福岡縣(筑後國) 佐賀縣ノ内(藤津郡、杵島郡、小城郡、佐賀郡)

鹿兒島海務署 鹿兒島縣 宮崎縣 沖繩縣

小樽海務署 北海道ノ内(後志國、石狩國、天鹽國、北見國)

ハ管海官廳事務取扱市町村長

船員法ノ規定ニ依リ管海官廳ノ行フヘキ事務、即チ船員手帖、航海中ノ事變ニ關スル船長ノ報告、海員ノ雇入雇止等ノ事ハ、海事局及海務署ノ外、遞信大臣指定ノ市町村長又ハ戶長等ニ於テモ、亦均ク之ヲ取扱フモノニシテ、既ニ指定セラレタル市町村長等ハ左ノ如シ、

北海道 岩内支廳長 室蘭支廳長 根室支廳長 稚内村戶長(宗谷)

東京府 品川町長

京都府 宮津町長

神奈川縣 三崎町長

兵庫縣 福良町長(三原郡) 阪越村長(赤穂郡)

長崎縣 佐世保村長 口ノ津村長 今屋敷町外十町村戶長(原)

新潟縣 夷町長 銚子町長 館山町長

千葉縣 湊町長

茨城縣 四日市々長

三重縣 熱田町長 坂井村長(知多郡)

愛知縣 下田町長 掛塚町長(遠江國)

靜岡縣 釜石町長

巖手縣 釜石町長

青森縣 青森市長

山形縣 酒田町長

秋田縣 土崎港町長 能代港町長

福井縣 敦賀町長 三國町長

- 石川縣 七尾町長
- 島根縣 西郷西町外二町戸長(四郷)
- 岡山縣 玉島町長(後口郡)
- 廣島縣 廣島市長 尾道市長 東野村長
- 山口縣 徳山村長 久賀村長
- 和歌山縣 湊村長 三輪崎村長
- 徳島縣 加茂村長
- 香川縣 坂出町長
- 愛媛縣 宇和島町長
- 高知縣 三里村長 甲浦村長
- 福岡縣 若松町長 門司市長 大牟田町長
- 大分縣 佐賀關町長
- 佐賀縣 滿島村長 西山代村長
- 熊本縣 三角村長

- 宮崎縣 細島町長
- 沖繩縣 那覇區長

(二) 船舶検査執行地

其他船舶検査法ニ依リ、海事局及海務署ノ検査ヲ行フヘキ船舶検査執行地ハ、第六章第一節第一項(三)ニ示スヘシ、

(三) 港務局(局長奏任)

遞信大臣ノ管理ニ屬シ、開港々則ニ關スル事務ヲ掌ル所ニシテ、港務局長ハ局中一切ノ事務ヲ掌理シ且ツ「港長」ノ事ヲ行ヒ、配下ニ港務官、港務官補、醫官、書記、技手、港吏、港吏補アリテ各自事務ヲ擔任ス、又港務局官吏(技手及書記ヲ除ク)ハ其ノ階級ニ應ジテ制服ヲ着用スヘシ、

(四) 海員審判所(高等(所長勅任) 地方(所長奏任))

海員審判所ハ地方海員審判所及高等海員審判所ノ二アリ、前者ノ裁決ヲ始審トシ後者ノ裁決ヲ終審トス、高等海員審判所ニハ所長、審判官、理事官、及書記ヲ置キ、所

長ハ通例管船局長之ヲ兼ネ、又地方海員審判所ハ目下東京、大阪、長崎、函館ノ四箇所ニ設置セラレ、各審判所ニ所長、審判官、理事官及書記ヲ置キ、所長ハ各地海事局長ニ於テ之ヲ兼ヌルノ例ニシテ、地方海員審判所ノ管轄區域ハ海事局ノ管轄區域ニ同シ、

(五) 航路標識管理所(所長奏任)

是レ亦遞信大臣ノ管理ニ屬シ、航路標識ノ工事及其ノ保守ニ關スル事務ヲ掌ル所トス、元來航路標識ハ航路ノ安寧ヲ保護スルカ爲メ、政府ニ於テ設置スルノ通則ナレトモ、土地ノ情況ニ依リテハ、地方税又ハ區町村費ヲ以テ設置スルコトヲ許ス(此ノ場合ニ於テ遞信大臣ノ許可ヲ要クヘシ)、又從來存在セル私設ノ航路標識ハ、其ノ免許年限間繼續スルコトヲ得ヘシ、而シテ管理所ニハ汽船新發田丸ヲ附屬シ、沿岸航路標識ノ巡視并ニ標識建設用材料ノ運搬ニ從事セシム、

(六) 商船學校(校長勅任又ハ奏任)

商船學校ハ遞信大臣ノ管理ニ屬シ、航海、運用、機關ニ關スル學術及技藝ヲ教授スル所ニシテ、又大阪及函館ニ分校アリ、簡易ノ學術及技藝ヲ教授ス、

第五章 船舶ノ登記、登録、國籍證書受有等

第一 船舶ノ國籍取得手續ノ大要

官有船(海軍ノ艦船ヲ除ク) 私有船タルトフ問ハス、苟モ日本ノ船舶タルモノ、國旗ヲ橋頭ニ懸シテ碧波蒼溟ノ間ヲ航駛セント欲セハ、之ニ先タチ船舶法、同施行細則及船舶登記規則ノ定ムル所ニ依リ、積量測度、登記、及登録ヲ爲シ國籍證書ヲ受クル等諸般ノ手續ヲ了セサルヘカラス、(和船即チ石數ニテ積量ヲ表示スル船舶ニハ三十四年七月一日ヨリ船舶法等ヲ施行セラルル其他噸數二十噸未満、積石數二百石未満ノ小形船等ニ付テハ特別ノ規定アリ左記備考) 今其ノ手續一斑ヲ述ヘンニ、即チ船主ハ船舶ノ新造又ハ購入後ハ、必スヤ先ツ事ノ順序トシテ日本國內ニ船籍港ヲ定メ、該船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ向テ船舶積量ノ測度ヲ申請スヘシ、管海官廳ハ右ノ申請ニ應シテ臨船検査ヲ遂ケ、船体機關ノ構造、寸方等ヲ詳細ニ記錄セル「船舶件名書」ヲ交附スヘキヲ以テ、船主ハ之ヲ添ヘテ船舶ノ登記ヲ管轄裁判所ニ申請シ、「登記ノ謄本」ヲ受ケタル上、更ニ之ヲ添ヘテ前示管海官廳ニ

船舶ノ登録ヲ申請スヘシ、是ニ於テ該官廳ハ其ノ備付ノ「船舶原簿」ニ登録ヲ爲シ、成規ノ「船舶國籍證書」ヲ交附スヘシ、斯テ船舶ハ日本國ノ船舶タルコトヲ證明セラレタルモノナレハ、茲ニ始テ日章ノ國旗ヲ掲ケ又内外諸港ニ航行スルコトヲ得ルナリ、尙ホ項ヲ分チ逐次詳述スル所アルヘシ、

(備考)

- 一、船舶ノ積量測定、登記、登録等ニ付テ代理人ヲ使用スルトキハ必ス其ノ權限ヲ證スル委任狀ヲ添付スヘシ
- 二、外國ニ在リテハ日本ノ領事又ハ貿易事務官ニ於テ管海官廳ノ事務ヲ行フモノトス
- 三、總噸數二十噸未満又ハ積石數二百石未満ノ船舶(一) 端舟其他權限ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ權限ヲ以テ運轉スル舟(二) 船舶法ノ規定ヲ適用セラレシテ地方官廳管轄ノ下ニ船監札規則(二十九年發布)ニ依リ支配セラレ、モノトス即チ在來ノ慣例ヲ按ズルニ(一) 西洋形船ニシテ總噸數十噸未満ノ漁船、(二) 同二十噸未満ノ帆船、及(三) 湖川港灣ヲ限リ運轉スルモノハ登簿船免狀ヲ受有スルニ及ハス此種ノ船舶ハ不登簿船トシテ世ニ知ラレ(但シ) 航行ノ用ニ供セサルモノ、(一) 登簿噸數五噸未満者クハ積石數五十石未満、(三) 權限ノミヲ以テ運轉シ若クハ主トシテ權限ヲ以テ運轉スル舟ハ之ヲ除ク(船監札規則ニ依リ本船定製所チ管轄スル地方官廳ノ支配ヲ受ケ船監札ヲ受有スヘキモノトス而シテ地方官廳ニ於テハ之カ爲メ船監札臺帳ナルモノヲ備置キ船舶ノ件名等ヲ記載スヘシ

第二 船舶ノ積量測定 (Measurement of ship)

船主カ船籍港ヲ定メタル上、所轄管海官廳ニ船舶積量ノ測定ヲ請ハントスルトキハ、左ノ如キ書式ノ申請書ヲ差出シ、同時ニ造船者及機關製造者カ船体及機關ノ製造年月日等ヲ證明スル書類(新造ノ場合ニハ製造地及進水年月日ヲ證スル造船者ノ書面并ニ汽機汽罐ノ製造年月日ヲ證スル汽機汽罐製造者ノ書面ヲ添ヘ又購入等ノ場合ニハ右ノ外向ホ造船者及汽機汽罐製造者ノ氏名并ニ船舶ノ原名ヲ證スル汽機汽罐製造者ノ書面ヲ添フヘシ)ヲ添付スヘシ、

積量測定申請書

汽船何丸

- 一、船籍港
- 二、積量
- 三、造船者ノ氏名又ハ名稱
- 四、製造地
- 五、進水ノ年月日
- 六、汽機製造者ノ氏名又ハ名稱
- 七、汽機製造ノ年月日
- 八、汽罐製造者ノ氏名又ハ名稱
- 九、汽罐製造ノ年月日
- 十、原名
- 十一、所有者ノ氏名又ハ名稱及住所
並ニ共有者ナルトキハ其持分

第五章 船舶ノ登記、登録、國籍證書受有等

第五章 船舶ノ登記、登録、國籍證書受有等

- 十二、船舶管理人ノ住所氏名
 - 十三、測度ヲ受ケントスル場所
- 右者今般新造致シ(又ハ何國人何某ヨリ買受ケ等)貴管内ニ船籍港ヲ定メ候ニ付積量測度相成度關係書類何通相添此般及申請候也

明治 年 月 日

住所

何某印

(管海官廳名)

御中

(備考)

- 一、船名、郡市町村名、氏名及名稱ニハ振假名ヲ附記シ外國ノ名稱ナルトキハ外國文字ヲ附記スヘシ
- 二、原名ト稱スルハ國籍取得前ニ於ケル最近ノ船名ヲ云フ
- 三、前記件名中船舶ノ種類ニ依リ事項ナキモノハ之ヲ省略スヘシ

斯ク船主カ積量ノ測度ヲ申請シタル上ハ、之カ測度ヲ受クルニ必要ナル萬端ノ準備ヲ整フヘキコト勿論ニシテ、廳テ當該官廳ハ検査官ヲ船内ニ出張検査セシメ、左ノ如キ「船舶件名書」ヲ調製セシメタル上、其ノ謄本ヲ申請者タル船主ニ交附シ、之ト同時ニ先キニ申請書ニ添付セル証書類ヲ還附スヘシ、

船舶件名書

- 一、甲板ノ層數及種類 帆船何丸
- 二、外板ノ材料
- 三、船骨ノ材料
- 四、樁ノ數
- 五、綱具ノ裝置
- 六、船首ノ形狀
- 七、船尾ノ形狀
- 八、造船規程ニ定ムル方法ニ依リテ測リタル長
- 九、船舶積量測度方法ニ依ル量噸甲板下ノ長
- 十、造船規程ニ定ムル方法ニ依リテ測リタル幅
- 十一、船體最廣部ニ於テ内張板ノ内面ヨリ内面マテノ幅
- 十二、造船規程ニ定ムル方法ニ依リテ測リタル深
- 十三、船舶積量測度方法ニ依ル量噸甲板下ノ長ノ中央ニ於テ該甲板ノ下面ヨリ船底内張板ノ上面マテノ深
- 十四、支水隔壁ノ數
- 十五、二重底ノ位置及容量
- 十六、最大喫水
- 十七、總噸數
- 十八、登漕噸數
- 十九、流機ノ種類及數

第五章 船舶ノ登記、登録、國籍證書受有等

- 二十、瀛艦ノ種類及數
- 二十一、瀛艦ノ材料
- 二十二、瀛艦ノ數
- 二十三、瀛艦ノ徑
- 二十四、瀛艦ノ行長
- 二十五、推進器ノ種類及數
- 二十六、公稱馬力

右明治何年月何日某所ニ於テ臨檢シタル處前記ノ通相違無之候也

明治 年 月 日

所屬官廳

官氏名印

而シテ船舶積量ノ測度ハ何レノ地ニ於テ之ヲ行フヘキモノナリヤト云フニ、元來船舶検査執行地ニ於テ之ヲ行フノ原則ナレトモ、船舶ノ構造、航路ノ狀況、又ハ其他ノ事由ニ依リ、船舶ヲ検査執行地マテ航行セシムルコト能ハサル場合、如キハ、所轄管海官廳ハ其ノ事由ヲ正當ト認ムル上ハ、右船舶ノ所在地ニ就キ測度ヲ爲サシムルカ、若シ又當該官廳ノ管轄區域外ナルトキハ、其ノ所在地ヲ管轄スル管海官廳ニ右測度ノ事務ヲ囑托スル等、船主ノ便利ヲ圖ルコトヲ得ヘシ、尤モ船主ノ申請ニ依リ検査官カ規定ノ検査執行

地外ニ出張シタルトキハ、成規ノ旅費及日當ヲ納メサルヘカラスト知ルヘシ、

若シ又船舶ノ修繕等ノ爲メ、積量ニ變更ヲ生シ其ノ改測ヲ申請セントスルトキハ、申請書中ニ改測ヲ受ケントスル部分及測度ノ爲メ検査官ノ臨檢ヲ受ケントスル場所ヲ記載シ、同ク所轄管海官廳ニ之ヲ差出スヘシ、左スレハ前述ノ場合ト均ク、件名書ノ謄本ヲ交附セラル、モノトス、

第三 船舶所有權ノ登記

既ニ「船舶件名書」ノ謄本ヲ管海官廳ヨリ交附セラレタル上ハ、管轄登記所（船籍港ヲ管轄スル區裁判所又ハ其ノ出張所）ニ向テ、所有權取得ノ登記ヲ申請セサルヘカラス、此ノ場合ニハ左ノ事項ヲ記スル申請書ニ添付スルニ、右件名書ノ謄本ト船舶進水ノ年月日及汽機汽罐製造ノ年月日ヲ證明スル書面トヲ以テスヘシ、（但シ日本ニテ製造シタル船舶ニ付地ヲ管轄スル登記所ノ特別登記簿ノ謄本又ハ特別登記簿ニ其ノ船舶ニ關スル登記ナキコトヲ證明スル書面ヲ添フヘシ）

船舶所有權取得登記申請書ニ記載スヘキ事項

一、船舶ノ種類、名稱及積量

- 二、船籍港
- 三、申請人ノ氏名、住所
- 四、代理人ニ依リテ登記ヲ申請スルトキハ其ノ氏名、住所
- 五、登記ノ原因及其ノ日附
- 六、登記ノ目的
- 七、登記所ノ表示
- 八、年月日
- 九、船舶ノ價格
- 十、登録稅額

登記官吏ハ此ノ申請ニ接シ成規ノ手續ニ依リ登記ヲ完了シタルトキハ「登記證書」ヲ作り之ニ登記番號、船舶ノ種類、名稱及積量、船籍港並ニ申請書受付ノ年月日、受附番號、順位番號、登記權利者ノ氏名、住所、登記ノ原因、其ノ日附、登記ノ目的及登記濟ノ旨ヲ記載シ、登記所（區裁判所ノ如シ）ノ印ヲ捺シテ之ヲ登記申請人ニ交附シ、同時ニ申請人ノ請求ニ依リ係判事ノ署名捺印アル「登記ノ謄本」ヲ交附スルモノトス、此ノ謄本ニ記スル事項（汽船ノ場合）ハ左ノ如シ、

一、船舶ノ種類及名稱

- 二、國籍取得ノ年月日（但シ日本ニテ船舶ヲ製造シタル場合ハ此限ニ在ラス）
- 三、外板ノ材料
- 四、船骨ノ材料
- 五、櫓ノ數
- 六、總噸數
- 七、登陸噸數
- 八、進水ノ年月日
- 九、汽機ノ種類及數
- 十、汽鐘ノ種類及數
- 十一、推進器ノ種類
- 十二、汽機製造ノ年月日
- 十三、汽鐘製造ノ年月日
- 十四、登記ノ原因及其日附
- 十五、登記ノ目的
- 十六、船籍港

然リ而シテ既ニ登記ヲ爲シタル船舶ニシテ左ノ場合ニ該當スルトキハ、右所有權ノ登記名義人ヨリ、其ノ事由ヲ記載スル登記抹消ノ申請書ヲ差出シ、之ニ其ノ事實ヲ證スル官吏又ハ公定ノ書面ヲ添付スヘシ、

- 一、船舶カ滅交又ハ沈没シタルトキ
- 二、船舶カ解撤セシタルトキ
- 三、船舶ノ存否カ六個月間分明ナラサルトキ
- 四、船舶カ日本ノ國籍ヲ喪失シタルトキ

第四 船舶ノ登録

上來叙述シタル如ク船舶ノ登記ヲ完了セル後ハ、船主ヨリ船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ向テ登録申請書ヲ差出シ、之ト引換ニ該官廳ヨリ「船舶國籍證書」ノ交附ヲ受クヘシ、茲ニハ先ツ船舶登録ノ事ヲ述ヘンニ、即チ登録申請書ニハ前項ニ示セル登記ノ謄本（區裁判所ヨリ交附シタル）ヲ添ヘ、之ヲ管海官廳ニ差出セハ、該官廳ニ於テハ關係書類ヲ調査シタル上、左ノ船舶原簿ニ登録スルモノトス（汽船ノ場合ヲ示ス）

- 一、番號
- 二、信號符字
- 三、種類
- 四、名稱

- 五、船籍港
- 六、甲板ノ層數及種類
- 七、外板ノ材料
- 八、船骨ノ材料
- 九、橋ノ數
- 十、網具ノ裝置
- 十一、船首ノ形狀
- 十二、船尾ノ形狀
- 十三、造船規程ニ定ムル方法ニ依リテ測リタル長
- 十四、船舶積量測定方法ニ依ル量噸甲板下ノ長
- 十五、造船規程ニ定ムル方法ニ依リテ測リタル幅
- 十六、船體最廣部ニ於テ内張板ノ内面ヨリ内面マテノ幅
- 十七、造船規程ニ定ムル方法ニ依リテ測リタル深
- 十八、船舶積量測定方法ニ依ル量噸甲板下ノ長ノ中央ニ於テ該甲板ノ下面ヨリ船底内張板ノ上面マテノ深
- 十九、支水隔壁ノ數
- 二十、二重底ノ位置及容量
- 二十一、最大喫水
- 二十二、量噸甲板下部ノ噸數
- 二十三、量噸甲板上部ノ噸數
- 甲板間ノ噸數

- 船首樓ノ噸數
- 船橋樓ノ噸數
- 船尾樓ノ噸數
- 圓室ノ噸數
- 其他圍セル場所ノ噸數
- 二十四、總噸數
- 二十五、登簿噸數
- 二十六、船員常用室ノ噸數
- 二十七、汽關室ノ噸數
- 二十八、汽機ノ種類及數
- 二十九、汽鐘ノ種類及數
- 三十、汽鐘ノ材料
- 三十一、汽筒ノ數
- 三十二、汽筒ノ徑
- 三十三、汽筒ノ行長
- 三十四、推進器ノ種類及數
- 三十五、公稱馬力
- 三十六、製造地
- 三十七、進水ノ年月日
- 三十八、汽機製造ノ年月日

三十九、汽鐘製造ノ年月日

四十、汽機製造者ノ氏名又ハ名稱

四十一、汽鐘製造者ノ氏名又ハ名稱

四十二、造船者ノ氏名又ハ名稱

四十三、原名

四十四、所有者ノ氏名又ハ名稱及住所並ニ共有者ナルトキハ其ノ持分

右登録シタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ、船主ハ成規ノ手續ニ依リ其ノ事實ヲ知りタル日ヨリ二週間内ニ、變更ノ登録ヲ申請スヘク、又登録ニ誤謬若クハ遺漏アルトキハ、訂正ノ手續ヲ爲スヘシ、而シテ船舶カ滅失若クハ沈没シタルトキハ、(一)、解撤セラレタルトキ(二)、日本ノ國籍ヲ喪失シタルトキ(三)、又ハ船舶ノ存否カ六ヶ月間分明ナラサルトキ(四)ハ、船主ハ同ク其ノ事實ヲ知りタル日ヨリ二週間以内ニ、抹消ノ登録ヲ爲スノ必要アリ、即チ抹消登録ノ申請書ニ登記證書ヲ添へ、船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ之ヲ差出スヘシ(此際ハ國籍證書ヲ返納スルヲ要ス)。

第五 船舶國籍證書 (Certificate of Registry)

「船舶國籍證書」ハ管海官廳ニ於テ船舶原簿ニ登録ヲ完了シタル後交付スルモノニシ

テ、商法ノ規定ニ依リ常ニ船内ニ備置カサルヘカラサル重要書類ノ一ナリ（書式等ニ付テハ第十七章第四項（一）參看）、而シテ外國ニテ船舶ヲ取得シタルトキ、又ハ日本ニテ之ヲ取得スルモ其ノ取得地ヲ管轄スル管海官廳ノ管轄區内ニ船籍港ヲ定メサルトキハ、「假船舶國籍證書」ノ交付ヲ申請スルヲ得ヘキモノニシテ、船主ハ成規ノ書式ニ依リ申請書ヲ作成シ、之ニ船舶所有權ノ取得ヲ證スル書面ヲ添ヘ、當該官廳（外國ニ於テハ其地駐在ノ日本領事又ハ貿易事務官）ニ差出スヘシ、斯クテ得タル假國籍證書ノ有効期間ハ、外國ニテ交付シタルモノニ付テハ一年未滿、日本ニテ交付シタルモノニ付テハ六ヶ月未滿ノ範圍内ニ於テ、當該管海官廳ノ見込ヲ以テ適宜之ヲ定ムルモノニシテ、船舶カ一タヒ船籍港ニ到着シタルトキハ、右有効期間ノ滿了前ニセヨ、假國籍證書ハ忽チ其ノ効力ヲ失フヘケレハ、遲滞ナク本國籍證書ヲ受有スルノ手續ヲ爲スヘキモノトス、

船舶ハ國籍證書（又ハ假國籍證書）ヲ受有シタル後ニ非サレハ、日本ノ國旗ヲ掲ケ又ハ航行セシムルコト能ハサル原則ニシテ、之ニ違反スルトキハ船長ハ拾圓乃至千圓ノ罰金ニ處セラルヘシ、然レトモ左ノ場合ニ在リテハ國籍證書ノ交附前ニセヨ、國旗ノ掲揚

又ハ船舶ノ航行ヲ特許セラル、ヲ得ヘキナリ、

（甲） 國旗ヲ掲グルヲ得ヘキ場合

- 一、祝日、大祭日（但シ外國ノ祝祭日ニ付テハ其國ノ港ニ碇泊スルトキニ限ル）
- 二、前號ノ外祝意又ハ敬意ヲ表スルトキ
- 三、進水ノトキ

四、次ニ示ス事由ニ依リ船舶ヲ航行セシムルトキ

（乙） 船舶ヲ航行セシムルヲ得ヘキ場合

（但シ最寄管海官廳ノ許可ヲ受クヘシ）

- 一、試運轉ノトキ
- 二、積量ノ測度ヲ受ケントスルトキ
- 三、正當ノ事由アルトキ

船舶國籍證書又ハ假船舶國籍證書ヲ滅失若クハ毀損シタルトキ、又ハ其ノ記載事項ニ變更ヲ生シタルトキハ、船主ハ其ノ事實ヲ知リタル日ヨリ二週間内ニ、成規ノ手續ニ依

リ再授又ハ書換ヲ申請セサルヘカラス、其他外國ノ港ニ碇泊中又ハ外國ニ航行中、國籍證書ヲ滅失若クハ毀損シタルトキハ、船長ハ日本領事又ハ貿易事務官ニ請フテ、假國籍證書ヲ受クルコトヲ得ルナリ、

第六 船舶ノ標示及其ノ名稱ノ變更

日本船舶ハ法令ノ定ムル所ニ依リ常ニ成規ノ標示ヲ爲サ、ルヘカラス、即チ其ノ標示スヘキ事項及方法ハ左ノ如クニシテ、明瞭耐久ヲ主トシ、若シ右事項ニ變更アリタルトキハ遲滞ナク改正スヘシ、

- 一、船首兩舷ノ外部ニ船舶ノ名稱、船尾外部ノ見易キ所ニ船舶及船籍港ノ名稱ヲ四吋以上ノ國字及羅馬字ヲ以テ記スルコト
- 二、中央ノ船梁ニ船舶ノ番號、總噸數及登簿噸數ヲ彫刻シ又ハ其番號及噸數ヲ彫刻シタル板ヲ釘著スルコト
- 三、船首材及船尾材（船尾材ナキトキハ舵柱）ノ外部兩側面ヘ喫水ヲ示ス爲メ龍骨ノ下面（副龍骨ヲ有スルトキハ其下面）直線ヨリ最大喫水ニ至ルマテ一呎毎ニ

六吋ノ羅馬數字又ハ亞刺比亞數字ヲ以テ其尺度ヲ記シ數字ノ下端ハ其數字ノ表示セル喫水線ト一致スルコト

但シ石數ヲ以テ積量ヲ表示スル船舶ハ右ニ定メタル方法ニ依リ船尾ニ船舶及船籍港ノ名稱、船梁ニ船舶ノ番號及積石數ヲ標示スヘシ

又船舶ノ名稱ハ妄ニ變更スルヲ得サルモノニシテ、之ヲ變更スルノ必要アルトキハ、船主ハ其ノ事由ヲ記スル申請書ヲ、船籍港ヲ管轄スル管海官廳ニ差出スヘシ、而シテ該官廳ニ於テハ左ノ場合ニ限り之ヲ許可スルモノトス、

- 一、船主ノ氏名、名稱又ハ之ト同一ト認ムヘキ名稱ヲ有スル船舶ヲ取得シタルトキ
- 二、船舶ノ名稱ニ番號ヲ冠附シ又ハ冠附シタル番號ヲ變更若クハ削除スルトキ
- 三、船主ニ於テ自己ノ行爲ニ因ルニアラスシテ船舶ノ名稱ノ爲メニ著シキ不便ヲ受クルトキ

第七 船舶ノ登記、登録ニ關スル登録稅及手數料

(甲) 登録稅

(一) 船舶ニ關スル登記ヲ受クルトキ登記所ニ納ムヘキモノ

- 一、法定ノ家督相續ニ因ル所有權ノ取得 船舶價格 千分ノ三
- 二、第一號以外ノ家督相續又ハ遺產相續ニ因ル所有權ノ取得 船舶價格 千分ノ六
- 三、遺言、贈與其ノ他無償名義ニ因ル所有權ノ取得 船舶價格 千分ノ二十
- 四、第一號乃至第三號以外ノ原因ニ因ル所有權ノ取得 船舶價格 千分ノ十五
- 五、從來保有セル所有權ノ保存 船舶價格 千分ノ一
- 六、貸借權ノ取得 船舶價格 千分ノ一

存續期間十年未滿
存續期間十年以上

存續期間ノ定メナキモノ

但シ權利移轉ニ因ル場合ニ於テハ既ニ經過シタル期間ヲ存續期間ヨリ控除シ其ノ殘期ヲ以テ存續期間ト看做シ登録既ヲ計算ス

七、質權、抵當權ノ取得

債權金額 千分ノ六

但シ債權金額ナキトキ又ハ質權抵當權ノ目的タルモノノ價格ヲ以テ債權金額ヨリ算キトキハ質權抵當權ノ目的タルモノノ價格ヲ以テ債權金額ト看做ス

八、競賣ノ申立

債權金額 千分ノ六

但シ競賣ニ附スヘキモノノ價格ヲ以テ債權金額ヨリ算キトキハ其ノモノノ價格ヲ以テ債權金額ト看做ス

九、假差押、假處分

債權金額 千分ノ四

但シ假差押假處分ニ付スヘキモノノ價格ヲ以テ債權金額ヨリ算キトキハ其ノモノノ價格ヲ以テ債權金額ト看做ス

做ス

十、抵當アル債權ノ差押

債權金額 千分ノ六

但シ差押ニ付スヘキモノノ價格ヲ以テ債權金額ヨリ算キトキハ其ノモノノ價格ヲ以テ債權金額ト看做ス

十一、登記ノ更正變更又ハ抹消

船舶每一箇 金拾錢

(二) 船籍ノ登録ヲ受クルトキ管海官廳ニ納ムヘキモノ

一、新規登録

每十噸 金五拾錢

二、轉籍

每十噸 金拾錢

三、除籍

每十噸 金五錢

四、登録ノ變更

船舶每一箇 金拾錢

船舶ノ噸數ハ總噸數ニ依ル但シ十噸未滿ノ噸數ハ十噸トシテ計算ス

石數ヲ以テ積量ヲ表示スル船舶ニ在テハ積石數百石ヲ十噸トシテ計算ス

(乙) 手數料

(三) 登記ニ關スルモノ

一、船舶登記簿ノ謄本(又ハ抄本)ヲ請求スルトキ

一枚ニ付 金拾錢

二、船舶登記簿又ハ其ノ附屬書類ノ閲覧ヲ請求スルトキ

金拾錢

三、登記証書ヲ滅失シ更ニ交付ヲ請求スルトキ

金五拾錢

四、特別登記簿ニ船舶ニ關スル登記ナキコトノ証明ヲ請求スルトキ

一件ニ付 金拾錢

第五章 船舶ノ登記、登録、國籍証書受有等

(四) 登録ニ關スルモノ

- 一、船舶原簿ノ謄本(又ハ抄本)ノ交付
- 二、船舶原簿ノ閲覧

一枚ニ付

金貳拾錢

金貳拾錢

第六章 船舶ノ検査及修繕

第一 検査及修繕ノ要旨

船舶ニハ生物ト同ク一定ノ命數アリ、此ノ命數ヲ過クレハ、最早無用ノ廢物ニ屬シ、復々運輸交通ノ機關トシテ海洋ヲ航行スルコト能ハサルナリ、元來船舶ノ命數即チ其ノ有効年限ハ、用材ノ強弱、工技ノ巧拙等ニ依リ長短ヲ異ニスルハ勿論ニシテ、一例ヲ示セハ鋼製及鐵製ノ船舶ハ貳拾年乃至拾五年、木造船ハ拾五年乃至拾年、普通ノ小蒸汽船ハ拾年内外ヲ以テ命數トスルノ常ナリ、且ヤ年齡ノ老ユルニ從ヒ船舶ノ價格ヲ減少スルモ亦當然ノ事ニシテ、商船ニ於テ年々遞減スル割合ハ通例百分ノ五ナルヲ以テ、今百萬圓ノ船舶ヲ新造スルモ、拾年後ニハ船價六十萬圓ニ下リ、貳拾年ヲ過クレハ三十五萬圓ニ減スルノ計算ナリトス、然レトモ以上ハ是レ新造ノ後普通ノ使用ヲ爲シ普通ノ維持法ヲ施シタル結果ニ付テ謂フモノニシテ、若シ濫用ニ流レ維持法ヲ怠ルコトアラハ、右ノ年限ニ滿タサルニ逸早ク老廢シテ、自カラ腐蝕壞頽ニ歸スルカ、若クハ劇甚ナラサル

風雨ニ逢フモ毀損、覆没ノ不幸ニ陥ランノミ、若シ又之ニ反シテ可成無理ノ使用ヲ慎ミ
検査ヲ精クシ修繕ヲ吝マヌ、汽鐘ノ掃除、船底ノ塗替等必ス其時ヲ誤マルコトナクンハ
貳拾年ノ命數ト稱スル鋼鐵船モ、其實ニ拾年以上ニモ悠ニ持續スルヲ得ヘシトハ、造船學
者ノ責ヲ負フテ語ル所ナリ、故ニ世ノ船主及船員タル者ハ、常ニ此ノ高價ノ財産ヲ鄭重
ニ保管シ能ク維持ノ方法ニ注意シテ、可成命數ヲ長クシ船價ヲ保チ、長ク其ノ利益ニ浴
スルコトヲ圖ラサルヘカラサルハ蓋シ多言ヲ要セスシテ明白ナリ、

第一節 検査

第一 法定検査

(一) 検査ノ種類

日本船舶ハ(一)總噸數二十噸未滿又ハ積石數二百石未滿ノ帆船、(二)端舟其他櫓權ノミ
ヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ櫓權ヲ以テ運轉スル舟、(三)倉庫船又ハ繫留船、(四)平水航
路ノミヲ航行スル帆船ヲ除ク外ハ、西洋形タルト日本形タルトヲ問ハス、船舶検査法
ニ依リ其ノ船舶所在地ヲ管轄スル海事局又ハ海務署ノ検査ヲ受ケサルヘカラス、但シ

遞信大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ、特ニ検査官吏ヲ指定シテ検査ヲ行ハシムルコト
アルヘシ、而シテ此ノ法定検査ニ三種アリ左ノ如シ(前示四種ノ小形船ニ付テハ地方長官ニ於テ其
ノ検査ニ關スル規程ヲ設ケ遞信大臣ノ認可ヲ
經テ施行スヘシ)

一、特別検査

- (イ) 日本船舶トシテ始テ航行ノ用ニ供スルトキ行ハル、モノ
- (ロ) 其後船舶ノ狀況ニ依リ三年乃至五年毎ニ一回行ハル、モノ

二、定期検査

- (イ) 始テ船舶ノ航行期間ヲ定ムルトキ並ニ其ノ航行期間(汽船三ヶ月乃至一年
帆船六ヶ月乃至三年) 滿了
ノトキ行ハル、モノ

- (ロ) 航行期間内ニ船主ノ申請ヲ受ケ行ハル、モノ

三、臨時検査

- (イ) 船舶ノ航行期間内ニ入渠若クハ上架セシトキ行ハル、モノ
- (ロ) 船艙、機關其他ノ要部ニ損傷ヲ生シタルトキ若クハ之ヲ修繕變更セントスル

トキ行ハル、モノ

(ハ) 其他ノ原因ニ依リ検査官廳ニ於テ必要ト認ムルトキ行フモノ
 其他航海獎勵法ニ依リ獎勵金ヲ受クル船舶ハ、總噸數一千噸以上、最強速力十節以上ニシテ造船規程ニ合格シタル者ナルガ、是等ハ前示ノ普通法定検査ヲ受クルト共ニ左ノ如ク造船規程ニ依リ構造、速力等ニ付テ獎勵検査ヲ受クヘキモノトス、

四、航海獎勵検査

(イ) 始テ航海獎勵獎金ヲ受ケント欲スルトキ検査ヲ行フ

(ロ) 獎勵認許證書ノ有功期間(一年以內トス)満了シ更ニ繼續ヲ申請スルトキ検査ヲ行フ

(ハ) 船舶ニ損傷ヲ生シ若クハ之ニ修繕ヲ加ヘタルトキ検査官ニ於テ必要ト認ムレ

ハ検査ヲ行フ

前示四種ノ検査ハ、專ラ日本船舶ニ付テ施行スヘキモノナレトモ、近頃検査法改正ノ結果トシテ、其ノ規定ヲ外國船舶ニモ及ホスコト、爲レリ、即チ外國船舶ト雖モ日本人ニ於テ借入レタル上日本諸港間又ハ日本ト外國ノ間ニ使用スルトキ(此分ハ從前ヨリ日本船舶ト同様ニ検査)

法ノ支配ヲ受ク
 (一) 日本ノ沿岸又ハ湖川港内ノミヲ航行スルトキ
 (二) 日本ノ港ニ於テ旅客又ハ移住民ヲ搭載スルトキ
 (三) 遞信大臣特定ノ規程ニ依リ検査ヲ受ケサルヘカラス、是レ旅客貨物ノ安全ヲ圖ル必要上、正當ニ帝國ノ領海權ヲ外國船舶ニ行使スルモノト謂フヘシ、

五、外國船舶ニ關スル検査

(一) 日本人ニ於テ外國船ヲ借入レ内外諸港間ニ使用スルトキハ、前示定期検査ノ程度ニ準シ検査ヲ行ハルヘシ

(二) 外國船カ我國ノ沿岸又ハ湖川港内ノミヲ航行スルトキハ全然我カ法律ヲ以テ支配スヘキコト當然ナルカ故ニ内國船ト同様前示ノ各種検査ヲ受ケサルヘカラス

(三) 外國船カ我國ノ開港場ニ寄航シ旅客又ハ移住民ヲ搭載スルトキハ内國船ト同様我カ検査官吏ノ検査ヲ受ケ旅客定員及船内設備ニ關シ検査法施行細則并ニ検査規程ニ合格セサルヘカラス

(二) 検査手續

船舶ノ検査ヲ受ケントスルトキハ、船主又ハ船長(外國船借用ノトキハ其ノ借用者)ヨリ成規ノ申請書ヲ検査官廳ニ差出シ必要ノ準備ヲ爲スヘシ、但シ獎勵検査ニ付テハ別ニ申請書ヲ差出スニ及ハス、而シテ検査官カ検査ヲ行フ手續ヲ畧示セハ左ノ如シ、其他船艀、機關及屬具ニ付テ検査ヲ受クル準備并ニ検査方法ノ詳細ハ、船舶検査規程及航海獎勵法施行細則ニ詳ナリ、

- (イ) 特別検査ハ船舶ヲ入渠(若クハ上架)セシメテ之ヲ行フ但シ進水後又ハ前回入渠(若クハ上架)後一年ヲ經過セサル船舶ニ付テハ検査官ノ見込ニ依リ入渠(若クハ上架)ヲ猶豫スルコトヲ得ヘシ
- (ロ) 第二回以後ノ特別検査ハ検査官ヨリ豫メ期限ヲ定メテ船主ニ通知シ其ノ期限内船主ノ便宜ナルトキ之ヲ行フ
又第二回以後ノ特別検査ニ於テハ船艀汽機及汽罐ハ各々時ヲ異ニシテ検査スルコトヲ得此ノ場合ニ汽罐ヲ検査スルトキハ船舶ヲ入渠(若クハ上架)セシムル

ニ及ハス

- (ハ) 定期検査及臨時検査ハ船舶ノ碇泊中ニ行フ尤モ検査官ノ見込ニテ入渠(若クハ上架)ヲ命スルコトアルヘシ
- (ニ) 船舶ハ臨時検査ヲ受クルニ方リ特別検査又ハ定期検査ヲ併セ受クルコトヲ得ルモノニシテ其ノ手續ヲ結了シタルトキハ其ノ検査ハ特別検査又ハ定期検査ト看做サルコトヲ得ヘシ其他定期又ハ特別ノ検査期限ニ至リタルトキ便宜上同時ニ他ノ検査ヲモ併セ受クルコトヲ得
- (ホ) 獎勵検査ノ手續ハ特別検査ニ準シ且ツ試運轉ヲ行フテ最快速力ヲ檢定スヘシ第二回以後ハ定期検査ニ準ス
- (ヘ) 検査官ハ各種ノ検査上必要ト認ムルトキハ試運轉ヲ命スルコトヲ得又船舶ノ大小年齢及現狀ニ依リ成規ノ検査方法ヲ變更若クハ増減スルコトヲ得ルモノトス

(三) 検査執地行地

船舶カ検査法ニ依リ海事局又ハ海務署ノ検査ヲ受クルニハ、一定ノ場所ニ於テス、

之ヲ検査執行地ト謂フ、即チ左ノ如シ、

東京海事局管轄内

東京、品川、戸ノ口(代岩)、横濱、神奈川、横須賀、浦賀、清水、沼津、掛塚(江越)、下田、熱田、鳥羽、大湊(伊勢)、石巻、鹽釜、新潟、松崎(越後)、伏木、七尾

大阪海事局管轄内

大阪、大津(江近)、堺、神戸、兵庫、高知、多度津、糸崎、尾ノ道、土生(備後)、木ノ江(安藝)、赤間關、門司、境、松江、

長崎海事局管轄内

長崎、口ノ津、茂木(肥前)、時津(肥前)、網場(肥前)、若津(筑後)、大牟田(筑後)、鹿兒島

函館海事局管轄内

函館、小樽、

又航海獎勵検査ニ在リテハ、遞信大臣ヨリ前記ノ場所ニ就キ、其一ヲ指定シテ検査ヲ

行ハシムヘシ(從來ハ大概横濱ニ於テセリ)

(四)検査証書 (Certificate of Survey)

(イ) 検査証書ノ交付及有効期間

検査官カ船舶ヲ検査シ検査規程ニ合格スルモノト認ムルトキハ、當該検査官廳ヨリ左ノ書式ナル「船舶検査証書」ヲ検査申請人(船主若クハ船長)ニ交付スヘシ、此ノ検査証書ヲ受有シタル後ニ非サレハ、船舶ハ航行ノ用ニ供スヘカラサルモノナレトモ、若シ成規ノ検査ハ既ニ受ケタルモ未タ証書交付ノ運ニ至ラサルニ方リ、船主ノ都合ニ依リ船舶ヲ航行セシメント欲スルトキハ、検査官廳ニ「假検査証書」ノ交付ヲ申請スルコトヲ得ヘク、検査官ニシテ其ノ船舶ヲ検査規程ニ合格スルモノト認ムル以上ハ、成規ノ假証書ヲ交附スヘキナリ、

船舶検査證書 割印

| 客 旅 | 期 航 | 限 定 路 航 | 種 船 | 種 類 | 船 名 |
|-----|-----|---------|-----|-------------------|-------|
| | | | | | |
| 端 艇 | 汽 機 | 汽 機 | 汽 機 | 汽 機 | 定 繫 場 |
| | 制 汽 | 種 汽 | 種 汽 | 積 載 登 石 若 簿 數 ハ 噸 | |
| | 限 壓 | 類 鐘 | 類 機 | 者 有 所 | |

豎九寸
横一尺三寸

| | |
|-------|-----------------------|
| 員 定 | 右検査ヲ遂ケ船舶検査法ニ依リ此證書ヲ交付ス |
| 室 等 三 | 明治 年 月 日 |
| 長 船 | 検査官廳 名 印 |

而シテ検査官ハ定期検査ヲ行ヒタル上、船舶ノ現状ニ從ヒ適當ト思惟スル航行期間ヲ定メ、検査証書中ニ之ヲ記入スルモノニシテ、此ノ期間ハ汽船又ハ帆船ニ依リ長短ヲ異ニシ、甲ハ三ヶ月乃至一ケ年乙ハ六ヶ月乃至三ケ年トス、又假検査証書ノ有効期間ハ本証書ト交換シ得ヘキ時日ヲ標準トシ、三ヶ月ノ範圍内ニ於テ検査官之ヲ定ムルモノトス、

前述ノ如ク船舶ヲ航行セシムルニハ、検査証書若クハ假証書ヲ受有セサルヘカラス又其ノ証書中ニ記載シタル各事項ニ違反スヘカラサルコト勿論ナレトモ、左ノ如キ場

合ニハ之カ例外トシテ、検査証書ヲモ受有セス、又航路定限若クハ航行期限ヲ超過シテ船舶ヲ航行セシムルコトヲ得ヘシ、

一、船舶検査執行地外ニ於テ新造、修繕、購入若クハ圍ヒタル船舶ニシテ検査ヲ受クル爲メ旅客、貨物ヲ搭載セス検査執行地マテ航行スルトキ、但シ外國ニ於テ新造修繕若クハ購入シタル船舶ニシテ帝國領事ニ於テ相當ト認ムル「適航証書」ヲ有スルトキハ旅客貨物ヲ搭載スルコトヲ得

二、航路定限内ノ地ニ船舶検査執行地ナキ場合ニ於テ検査ヲ受クル爲メ旅客、貨物ヲ搭載セスシテ検査執行地マテ航行スルトキ

三、航路定限外ノ地ニ於テ検査ヲ受ケタル船舶ニシテ検査官廳ノ認可ヲ受ケ其ノ航路定限内ノ地マテ航行スルトキ

四、外國ヨリ歸航スル船舶ニシテ外國ニ於ケル最終ノ寄港地ヲ發シタル後航行期間滿了スル場合ニ於テ検査官廳所在ノ最初ノ寄港地ニ於テ其ノ認可ヲ受ケ到達地マテ航行スルトキ

五、船艙機關其他要部ノ修繕ノ爲メ検査官廳ノ認可ヲ受ケ工場所在地マテ航行スルトキ

六、沿海航船若クハ平水航船ニシテ航路定限變更ノ爲メ検査官廳ノ認可ヲ受ケ航路區域外ヲ航行スルトキ

尤モ右第三號乃至六號ノ場合ニハ、船主ヨリ其ノ事由ヲ具スル申請書ヲ検査官廳ニ差出シ、「回航認可証書」ヲ受ケサルヘカラス、此ノ証書ノ有効期間ハ回航ニ要スル時日ヲ標準トシテ該官廳之ヲ定ムヘシ、

(ロ) 検査証書ノ保管等

船舶検査証書又ハ假証書ハ、船内最モ見易キ場所(例ヘハ食堂入口ノ如シ)ニ掲ケ置クヘモノニシテ、之ヲ滅失毀損スルカ又ハ記載事項ニ變更ニ生シタルトキハ(航路定限)航行期間、旅客定員、船長等ハ屢々變更ヲ見ルモノナリ)船主又ハ船長ヨリ成規ノ手續ニ依リ再授又ハ書換ヲ申請シ、左ノ如キ場合ニハ検査官廳ニ遲滞ナク返納スヘシ、

一、船舶ノ航行期間又ハ假証書ノ有効期間滿了シタルトキ